
災いをもたらす、その先には

紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

災いをもたらす、その先には

【Nコード】

N0315W

【作者名】

紫苑

【あらすじ】

私、古宇田里菜こうだりなは、ごくフツ―の高校1年生。今日も親友の神門詩緒里かんとしおりと、変わり者の友人、椎奈にからむ。椎奈のデートに同行して、ちよつと疲れる思いをして。そんな日常が、突如豹変する。ファンタジーな世界で、私達は椎奈の秘密を知った。

――椎奈、椎奈は、1人じゃないよ。

超初心者の書いた異世界ものです。どんどん感想を書いて、アドバ

イスいただけると助かります。

登場人物紹介（前書き）

だんだん人が増えて来たので整理の意味も兼ねて。

ストックに余裕がある時とかに、少しずつ更新するつもりです。

何時本編に追いつく事やら…

登場人物紹介

主要登場人物

名前（年齢）

職業

外見

趣味

特技

性格

家族構成

その他

古宇田里菜（16）

高校生

背はやや高め、どちらかと言えば細身。よく日焼けした肌。典型的日本人の顔だが、人好きのする顔。ぱっちりした勝ち気な黒目。焦げ茶色の髪を短く切っている。全体的に子供っぽい印象。

走る事

長距離走、薙刀（ただし、あくまで基礎）

明るくさっぱりした性格。考えている事が直ぐ顔に出る。面倒見が良く、誰とでも仲良くなれる。ふざけるのが好き、他人の恋愛大好き。自分の感情に素直過ぎて、時に言動が子供っぽい為、椎奈に叱られる事が多い。ツツコミ役に回る事が多い。

叔父、叔母、2つ上の従姉と4人暮らし

ユトウルナとの契約により、水属性の精霊魔術を操る。武器は薙刀。とにかく方向音痴。よく食べる。

神門詩緒里（16）

高校生

背は低め、線が細い。クリーム色の肌。やや丸い線を描く輪郭に、大人しそうな印象を与える童顔。柔らかな茶色の目。やや色の抜けた茶色い髪をショートボブにしている。

絵を描く事

フルート

人見知りをするが、椎奈に何を言われてもめげない強さを持ち、意志が強い。4人の中で一番常識的なため、気苦労が絶えない。他人に非常に優しいが、友人を批判する事は絶対に許さない。やや心配性。運動は苦手。

父、母、弟と4人暮らし

ミキストリとの契約により、風属性の精霊魔術を操る。武器は苗刀。旭の事が好きだが、椎奈の応援をしている。里菜とは幼稚園以来の親友。方向音痴。

椎奈（16）

高校生、術師

背は平均、かなり細身。色白で、鋭い線の目立つ、中性的な顔立ち。切れ長の目の色は、黒。癖のない黒髪を、腰まで伸ばす。長髪のため以前の世界では女だという事に疑いをもたれる事はなかった、というより、美人と称され多くの男の熱い視線を集めていたが、こちらの世界では男でも長髪はさほど珍しくない為に、男と間違えられる事しばしば。

特に無し

剣術、体術、方術、仙術、家事全般

人を寄せ付けず、端的な物言いをする。礼儀正しいものには礼を尽くすが、敵と見なせば一切容赦しない。基本無表情で、里菜達は僅かな表情の変化から辛うじて何を考えているかを判断している。目に浮かべるのは、大抵脅しか怒り、あえて見せる冷たい視線。自分の事、特に好意や恋愛感情に関しては極端に鈍く、一般常識に欠ける。

過去を一切語らないため、不明

「シイナの巫女」という異名を持つ。災いをもたらす身として、人のみならず妖にも恐れられている。その為、妖に襲われる事数知れず。甚大な霊力を持ち、術師としての知識は卓越している。天御中主神と契約を2度結ぶ。術（神霊魔術）が専門だが、魔術（理魔術）もやや使える。精霊魔術は興味本位に勉強中。武器は直刃で諸刃の比較的長い刀。

里菜曰く、「体力底なし」。食事量が異様に少ない為、時々里菜に無理矢理食べさせられている。

旭梗平（17）

高校生、魔術師

背はやや高め、細身。色白で、秀麗な顔立ち。深い闇色の瞳には常に感情を宿さない為、「目つきが悪い」「冷たい目」とよく言われる。男子にしてはやや長めの黒髪を無造作に流している。

民俗学、西洋魔術史、神話

魔術、心理学

感情が著しく稀薄。椎奈に対してだけはやや人間臭い反応を表す事も。一般論に対して冷めた意見を持っており、人の生を酷く儚いものと見、恋愛を「脳の錯覚」だと捉える。常に無表情で、目にも感情が浮かばないため、何を考えているのかほとんど分からない。理性が下す判断に忠実な為、周りにしてみれば突発的にとんでもない事をするように感じる。

母は他界。父は再婚しており、現在一人暮らし。

魔術について無限とも呼べる知識を持ち、常識はずれの魔術行使を行う。霊視力や霊力量は椎奈程ではないにせよ桁外れ。幼い頃虚弱体質だった。今は健康体だが、体力や運動能力が劣る事には変わりがない。ミハエルと契約を結ぶ。魔術（理魔術）がずば抜けて優れており、現在精霊魔術に手を出す。術は、椎奈からいくつかの手ほどきを受けているが、余り使わない。武器は長巻。椎奈の彼氏。

：ここから先は、もう少し雑になります。そこまで出番が多くありませんからね：

ライアスⅡデルⅡエルド

エルド国の王にして、椎奈達を召還するよう命令を下した張本人。国の民を思う気持ちは本物だが、その為椎奈達を「勇者」として利用しようとはあらゆる策をとる。策謀家だが、旭に掛けた呪い以外に成功したものはない。椎奈によって、愛する者の命を奪う呪いを杖に掛けられている。

金髪に緑の目、肥満体型。一見鈍重そうに見えるが、眼光は知性が見られ、抜け目のなさが表情に現れている。

サーシャ

椎奈達の世話役兼監視役を一任されるメイドであり、魔術師。椎奈によって、魔物であると見破られ、脅される。里菜や詩緒里には、比較的好印象を持っている。

黄土色の巻き毛を結い上げている。細い目の色は、黄色に近い黄緑。

エリーⅡアドラス

城の中で、最も優秀な神官。召還魔術も目覚めの儀式の魔術も行った。儀式の際、王の命令の下、椎奈達の記憶を消し、エルド国への忠誠を刷り込もうとして、椎奈に防がれる。やや気弱な性格。

銀髪にターコイズブルーの瞳。背は低く、幼くか弱い少女を絵に描

いたような外見。

ユトウルナ

水の大精霊。椎奈に対して余りいい感情を持っておらず、突っかかるような物言いをする。人間臭い反応をする事が多い。

虎とオオカミを掛け合わせたような四足獣。白い体毛に、碧瑠璃色の瞳。

ミキストリ

風の大精霊。知性に富んだ精霊であり、ユトウルナを宥める役。椎奈の事は、知識があるが故に、多少は畏怖している。

銀色のフクロウ。目は橙色。

ミハエル

異世界の創世神。意地の悪い性格で、旭を気に入っている。旭の「力を解放する鍵」。

肩まで届く青い髪に、深碧色の瞳。人外の美しさを持つ若い男神。

天御中主神

日本の宇宙を司る神。椎奈に手厳しくはあるが、椎奈に対して責任を感じている。ミハエルを童と呼び、少し交流がある様子。椎奈の事をミハエルに話したのはこの神ではないかと、椎奈は半ば確信しているが…

腰に届く程の？色の髪に、黄金色の瞳。誰もが見蕩れる外見だが、性別はない。

ソフィアⅡミアⅡエルド

エルド国第一皇女。非常に聡明で察しがよく、礼儀正しい。未覚醒の情動操作系の魔術師で、追いつめられていた椎奈の感情を和らげる一助となった。

くるくるの金髪を2つに結っている。上品な空色の瞳。小柄だが、可愛らしさと賢さを併せ持つ、王女に相応しい外見。

アドルフⅡヘラー

近衛騎士団第一隊長。訓練はかなり厳しい。この国有数の魔術師であり、防御魔術は椎奈や旭に高評価を受けた。部下に厳しく、道理の分かる人間。

茶色い髪を短くしていて、赤褐色の瞳。歴戦の強者らしい厳しい表情と彫りの深い顔立ちが特徴。

セヴェリオⅡピルロ

近衛騎士団第一隊の騎士。ズルの方法を詩緒里達に教える。明るく面倒見の良いお人好し。里菜と詩緒里を「嬢ちゃん」、椎奈を「姉ちゃん」、旭を「兄ちゃん」と呼ぶ為、里菜には不評。出会った当初、実は詩緒里は13、里菜は15、椎奈と旭は18〜20くらいだと思っていた。後に里菜に訂正されるまでは、里菜の言動に「実は12くらいか？」とも勘ぐっていた。椎奈を女性と知り、驚いた第一号。

赤銅色の肌、赤い巻毛、葡萄茶の瞳。ラテン系の顔立ち。

アーロン

近衛騎士団第一隊の騎士。椎奈が選んだ刀に強い拘りを持ち、椎奈が使う事を拒む。頭に血が上りやすく、攻撃しようとして里菜に返り討ちに遭う。魔術を使った事で椎奈の、椎奈を侮辱した事で旭の怒りを買う。とはいえ戲けだの負け犬だの価値がないだの雑魚だの、ぼろかす言われる哀れな男。

黄土色の髪、リーフグリーンの瞳。神経質そうな顔。背は低いが、鍛えられた体つきではある。

ヴァリオールメレリ

魔術師の指導を行う、一級魔導士。椎奈達の指南役に指名されるが、椎奈の知識に非の打ち所がなかったが為に、介入を断られる。椎奈の実力に勘付いており、水晶の示した魔力量に疑いを持つ。

長い白髪を緩く1つ結びしており、色あせた緑の瞳。皺の多い老人だが、年寄りとは思えない精力の持ち主。

夢宮

夢見を統括する存在であり、夢殿の管理者。夢の中で発揮する力は絶大。椎奈と同じ術を操る。本人曰く、「椎奈について一番詳しい」。椎奈に近付くなど警告するが、それに対し本気で怒り、椎奈の側にいたいという想いに応えて、里菜と詩緒里の守護者となり力を貸すと同時に、旭に「誓いの詞」によって相当量の霊力を流し込んだ。ある願いを彼らが叶えるのではないかと期待している。椎奈を人間として扱いながらも生き残る、「神に愛されし者」。

椎奈との関係は、「同業者」としか言わないが：

癖のない黒髪と黒目。丸みをおびた頬やぱっちりした目、友好的な雰囲気、育ちの良い印象など、椎奈とは正反対。

「本気」を出したときのみ瞳の色が蒼くなり、術の時に放つ光も青から蒼へと変わる。

登場人物紹介（後書き）

…あつという間に追いついた…びっくりです。
これからも椎奈達をよろしくお願いします。

プロローグ 日常（前書き）

ちょっと重たい異世界ものです。暗い話があるので、苦手な人はご注意ください。作者はまるきりの初心者なので、出来るだけ多くのアドバイスをお待ちしています。

プロローグ 日常

「椎奈^{しいな}、一緒に帰らない？」

放課後。鞆^{たも}を手を持ち、私、古宇田^{こうだ}里菜は、クラスメイトである椎奈に声を掛ける。教室を出ようとドアに手をかけたばかりだった椎奈は、振り返りもせずに答えた。

「駄目。約束があるから。」

抑揚の無い、素っ気ない口調。友好的な雰囲気というものがまきり無いが、これが椎奈の常だから、気にならない。むしろ、その内容に興味を持った。

「約束って、もしかして、旭先輩？」

親友、神門^{かんど}詩緒里の問い掛けに、首肯が返ってきた。

「えっ、そうなの？じゃあさ、ついていっていい？」

迷わず頼み込むと、椎奈がようやく振り返った。

整った細面に、切れ長の瞳は黒曜石のように輝く。全体的に鋭い線の目立つ外見の上に、いつも無表情なため、見るものに冷たい印象を与える。目と同じく真っ黒な長い髪を無造作に流している彼女は、わずかに眉をひそめて、問い掛ける。

「何故？」

「興味があるから。」

躊躇いもせずに即答すると、椎奈の眉間のしわが、更に深くなった。

「…古宇田。無粋って言葉、知ってる？」

「知ってるけどさー。興味あるんだよ。だって、あの旭先輩でしょ

「？今や、学校一の有名カップルだもん。どんな感じなのか、見てみたいって。」

変わり者の少女と、その彼氏

椎奈との付き合いは、高校に入ってからだ。入学してすぐのホームルームで御定まりの自己紹介。誰もが緊張気味に挨拶する中、椎奈は、緊張など欠片も感じさせない口調で、クラスメイトに対して言い放った。

「椎奈。中学では帰宅部。高校でも、部活に入るつもりは無い。以上。」

担任の先生までもがその素っ気なさに言葉を失う中、私は手を挙げた。

「古宇田里菜です。質問。椎奈って、名前？ 名字？ どっちにせよ、残りは？」

切れ長の目が私を捉えた。表情を変えぬまま、椎奈はよく通る声で答えた。

「名字だ。名は無い。学校にも、椎奈とのみ登録されている。」
「…どうして？」

「理由が必要か？ そちらが私を呼ぶのに、何の影響も無い。」
二の句を次がせない相槌を打つと、椎奈はさっさと自分の席に戻った。

そんな自己紹介にも関わらず、椎奈に声を掛ける者は少なくなかった。きつい印象を与えはするものの、椎奈は美人だ。男子が放っておくはずが無く、女子だって1人でも多く友達が欲しい時期だから、積極的に声をかけていた。

けれど椎奈は、まるで関わりを持つまいとしているかのように、最低限の返答だけを返して、後は読書に没頭していた。他者を拒絶するその態度に、自然と皆、彼女から離れていった。

最後まで残ったのは、私と詩緒里。私達はことあるごとに椎奈に

声をかけた、というか付きまとった。椎奈は、始めは鬱陶しげにあらわっていたけれど、やがて諦めたのか、質問したら答えるようになった。

椎奈に言い寄る男子は後を絶たなかったけれど、椎奈が相手にする事は無かった。誰もが、椎奈は恋愛沙汰とは無縁なのだろうと思っていた。

二ヶ月前までは。

入学して三ヶ月経ったその日、私と詩緒里は、椎奈と一緒に帰ろうと、校庭を足早に歩く椎奈を追っていた。ようやく追いつこうというその時、詩緒里が声を上げた。

「あ、あれ…」

顔を上げると、校門のところに、あさひきょうへい旭梗平が立っていた。彼の視線の先には、椎奈。

旭先輩は、私達の1つ上。頭が良いが、どうも方向性を間違っている。

「環境保護の主張など、馬鹿げている。人間はこの地球に一時的に住む事を、許されているだけに過ぎない。自分たちがより長く生き残ろうとあかくという、生物として当然の行動を、何故過剰に美化しようとするのか、理解に苦しむ。」

「国際協調など、夢物語だ。動物は縄張りを争い、自分たちがより利益を得ようとする。人間とて同じだ。口では皆仲間と言いつつ、より己が得をしようとしている。ならば始めから、そんな建前など口にする必要も無い。そんなものを信じるのは、愚か者がする事だ。

「
淡々と己の過激な主張を口にし、反論を封じるだけの理論を構築する。それだけでも変わり者のレッテルに十分値するが、更に特筆すべき特徴があった。」

西洋の魔術に異様に詳しいという、特徴が。

勿論一般的な知識も他者を凌駕する彼は、その知識と思想故に、一部の生徒に「魔王」と呼ばれていた。私も密かに、その呼び名に賛同している。

秀麗と言って差し支えない容貌に、冷たい瞳。薄い唇から己の意見を紡ぐその様子は、まさに魔王という名に相応しい。

彼もまた、恋愛沙汰とは無縁に見えた。だからこそ、わざわざ校門で椎奈を待ち伏せる旭先輩に、強い興味を抱いた。

そんな私の思いを他所に、二人は言葉を交わすと、ともに学校を去った。後を追おうかとも思ったけれど、まだあのときはそこまで椎奈と親しくなかった為、そこまで図々しい真似は出来なかった。

それから、一ヶ月後。二人は、付き合い出した。

それを聞いた誰かが耳を疑ったが、真実を正すと、どちらもあっさりと認めてしまった為、かえって追究できなかった。

それでも、恋愛から一番遠いと目されていた二人組は、二人を知るものにとっては、最も興味深いカップルだ。

「ねえ、良いでしょ椎奈？別に、邪魔はしないよ。今まで一度も一緒に帰った事無いし、一回くらい良いじゃん。」

「迷惑。大体、一緒に帰る義務は無い。」

そういうと椎奈は、それ以上の反論を許さず、足早に廊下を歩き出した。

ここで諦めるくらいなら、始めから一緒に帰るなどと言い出すはずも無い。

私達は、急いで椎奈の後を追った。

異変

「恋愛というのは、脳の錯覚だな。種の保存を求める本能を正当化する為に、感情の昂りと言う形で性欲を肯定する。メディアがこれを煽るのは、いったいどのような意図があるのだろうか。」

「それこそ、正当化の為じゃないか？それに私は、恋愛は、互いに干渉し合いたいという欲求に帰化されると思っている。勿論本能的なものもあるだろうけれど、己の弱さを補う為でもあるだろう。」

「成る程。だが、それは干渉というよりも依存だ。そう考えると、随分と幼稚な話だ。」

「まあ、そもそも人間は、まだまだ未完成な生き物。当然と言えば、当然。」

「：あのさ、邪魔しないって言うておいて、悪いんだけど。」

帰り道、二人の会話に、古宇田が割って入った。

「何だ？」

振り返ると、古宇田と神門が、疲れきったような表情を浮かべていた。

「いつもこんな会話をして帰ってるの？」

「そうだが、それがどうかしたか？」

問い返すと、古宇田が項垂れた。

古宇田と神門は、一緒に帰ると言うて聞かなかった。威嚇じみた口調で冷たい言葉を浴びせかけたが、堪える事無く付いて来る。どうやって追いかける事が出来ずに、校門にたどり着いてしまった。

「：椎奈。その二人はどうした。」

旭の問い掛けに、いきさつを説明した。旭が、目で良いのか？と問うて来る。良い訳が無い、と目で訴えたが、追いかける方法が思い浮かばず、そのまま4人で帰る事になった。

何も知らない人間と共に帰るのは、不都合だ。自分にとって、では無く、古宇田達にとってだ。出来るだけ早く別れて帰ってもらう事が、最優先事項だった。

その為に、あえてこの話題を選んだ。野次馬根性丸出しの二人にとって、一番嫌な話題だろうと分かっていたからだ。

「そんなに嫌なら、先に帰ったらどうだ？何を期待していたのかは知らないが。」

「：そうだね、私が間違ってた。帰るよ。」

古宇田が頷いたのを見て、こっそり胸を撫で下ろした。打ち合わせ無しの芝居だったが、旭も上手く乗ってくれたお蔭で、うまくいったようだ。

だが――

不意に、全ての音が消えた。

背筋に緊張が走り、私は身を翻した。旭と背中合わせに立ち、周囲を警戒する。

「え？何：？」

神門のつぶやきを無視して、全神経を五感に集中させる。

――何か、来る。

そう感じた刹那、神門が再び声を上げた。

「：里菜、呼んだ？」

「え？ううん、呼んでないよ？」

「：でも、今――」

神門が何事か言いかけたその時、四人の足下に、光り輝く魔法陣が現れた。

西洋魔術は門外漢だが、旭にいくらか教わっていたため、それが大規模な移動魔術である事は、一目で分かった。

「椎奈！」

旭に警告されて、唇を噛み締め、右手を握り込む。
魔法陣の光が増し、私達を飲み込んだ。

日常との、お別れ

視界を奪う白い光が消えると、私達は宙に放り出された。

「うわっ！」

慌てて着地の体勢をとったが、あまりに急すぎたため、間に合わずに大きくよろける。そのまま転びそうになったところで、後ろから支えられた。

振り返ると、椎奈が無表情で私を見つめていた。

「怪我は無いかな？」

「ん、大丈夫。ありがと。」

礼を言って視線を巡らせると、詩緒里が旭先輩に支えられていた。どうやら、私と同じく転びかけたところを助けられたらしい。

「あ、あのっ。すみませんっ。」

「謝られるいわれは無い。」

慌てて頭を下げる詩緒里と、抑揚の無い口調で堪える旭先輩。詩緒里は旭先輩に頭を下げつつ、視線をちらちらと椎奈に向けていた。当の椎奈は、意味が分からないといった様子で、首を傾げている。

——彼女に、嫉妬という概念は無いようだ。

そう考えたとき、不意に椎奈が視線を周囲に巡らせた。つられて周りを見回す。その時初めて、自分たちを取り巻く異様な状況に気付いた。

さっきまで、街路を歩いていたはずだ。それなのに、今私達が立っているのは、大理石の、中世の宮殿のような部屋の中央だった。その部屋の一番奥に、少し高くなった部分があり、飾り立てられた椅子が置いてあった。太った中年の男が、王様のように派手派手しい衣装を身につけ、ふんぞり返って座っている。その両脇には、

騎士のような格好をした男達が控えているし、神父のような格好をした人たちは、私達を囲むように立っていた。

何なの、これ？

そう思った時、中年の男が口を開いた。

「ようこそ、我が国エルド国へ。私はこの国の王、ライアスⅡデルⅡエルド。」

「えっと、私は古宇田里菜です。」

名乗られたので、ひとまず名乗り返す。

「神門詩緒里です。」

「旭梗平だ。」

詩緒里と旭先輩がそれに続く。けれど、椎奈はいつまでたっても名乗ろうとしなかった。それどころか、王と名乗る男に目もくれず、神父のような格好をした人たちに視線を巡らせている。

「そちらのものは、何というのだ？」

ライアス王が促すも、椎奈は答えない。旭先輩に腕を掴まれ、渋々と言った様子で答えた。

「椎奈。」

短く名乗り、旭先輩の手を振りほどく。

椎奈の態度に、ライアス王の周りの人間達がざわついた。不穏な空気が部屋を占領する。

そんな周りの反応を無視して、ライアス王が口を開いた。

「面白い名をもつ少年少女よ。それに、その珍妙な衣装。どうやら、異世界からの召還は、成功したようだな。」

——今、なんて言った？

物語のような展開、そして、衝突

現実を受け入れたくなくて、思わず聞き返す。

「あの、どういう意味ですか？」

「おお、説明していなかったな。」

我が国は今、魔王による侵略を受けている。騎士団が懸命に戦っているが、我々では魔物を、魔王を倒すには力が足りない。そこで、異世界から勇者を召還して、この国を救ってもらおうと、召還の儀式を行った。まさか4人も来るとは思わなんだが……」

思わず詩緒里と顔を見合わせる。表情から、同じ事を考えている事が分かった。同時に旭先輩に目を向けると、わずかに苦々しい表情を浮かべた。私達が何を考えているか、分かったらしい。

――「魔王」旭梗平が、異世界で魔王を倒す「勇者」？

吹き出しそうになるのを、懸命に堪えた。

「どうかしたのか？」

「……いえ、何も。それより、今、勇者とおっしゃいましたが、私達はごくフツーの高校生です。魔物だの魔王だのを倒すなんて……」

笑いを飲み込み、現実的な問題を指摘する。

「コウコウセイというものが何か分からないが……問題はない。過去に二度、魔王を倒す為に勇者が召還されたが、どちらも特殊な能力を目覚めさせたという。」

……なんか、本当にファンタジー。これが夢なら良いのだけれど、

私は下校途中にこんな夢を見る程、頭の中が危ない人ではない、はずだ。

「頼む、異世界の少年少女よ。この国を、救ってくれ。」

「お断りします。」

間髪入れずにきっぱりとした拒絶の言葉が、部屋に響き渡った。誰もが、言葉の主―椎奈に注目した。

「私達に、見ず知らずの国で命をかけるような趣味はありません。自分たちの国の事位、自分たちでなんとかして下さい。」

「貴様、王に対して何という口を！」

遂に我慢できなくなったらしい騎士の一人がそう言って、腰に刺した剣を引き抜いた。

思わず身を縮めた。けれど、椎奈は動じない。

「貴方達は、全く知らない場所に無理矢理連れ去られ、その攫った人たちに、自分たちを救えと言われて、はい分かりましたと応じるのですか？それも、今まで平和に暮らし、戦いと縁のない生活を送ってきたのに、肉親とも友人とも引き離された状況で、命をかけると？馬鹿馬鹿しい。」

「非難は甘んじて受け入れよう。だが、我々も必死なのだ。この国の民は、日々命の危険に晒され、恐怖と共に暮らしている。少しでも状況を改善できればと、苦渋の決断を下した。君達がここに来たという事は、我々を救う力があるという証。その力を、どうか我々の為に使ってほしい。」

ライアス王の必死の説得にも、椎奈は取り合わない。

「身勝手な話ですね。それで私達が人身御供となって、命を危険に晒し、恐怖と戦えという訳ですか。多数の為に少数を虐げる、さすがは絶対王政のはびこる前時代的な世界だ。」

その言葉に、既に剣を抜いていた騎士が、一歩踏み出した。それを見て、椎奈が構える。

右手の人差し指と中指のみを伸ばし、握り込む。切れ長の目は、騎士の瞳を真っ直ぐ捉えている。

二人の間に緊迫感が漂う。騎士の方が、むき出しの敵意とともに、更に一歩踏み出す。

事態の収拾を計るのは（前書き）

10／18、誤字報告をいただき、旭の出す条件の部分を少し修正しました。

事態の收拾を計るのは

その時、旭先輩が動いた。

椎奈の視界を遮るように、二人の間に立つ。

「王。引き受けよう。」

「旭、」

椎奈が何事か言いかけるが、旭先輩が手を翳してそれを封じる。

「ただし、条件がある。」

我々が、魔物と対峙するのに必要な訓練に、協力を惜しまない事。魔物を倒すだけの十分な力を付けるまで、戦いに参加させない事。訓練以外でこちらの行動に干渉・詮索しない事。

この城にある書物の閲覧を、自由に行えるように取り計らう事。これら全てを約束できるならば、魔王討伐に協力する。」

それを聞いた騎士、神官達が顔を見合わせた。その様子を見ると、今まで召還された勇者達に、条件をつけるものはいなかったようだ。

「分かった。私はこの場で、君の言う条件を全て守る事を誓おう。だから、力を貸してくれ。」

「口約束ですませないと、言い切れるか？それに、王だけが約束を守っても、この国の民全てが守らなければ、意味が無い。」

旭先輩の言葉に、ライアス王が頷く。

懐から杖のようなものを取り出すと、宙に何やら描き出した。青白い光が、複雑な紋様を作る。

「エルド国の王として誓おう。君の言う条件を、この国の全てのものが守らん事を。」

ライアス王が厳かに宣言すると、紋様をかたどる光が増し、消えた。

同時に、ライアス王の左手に、先程と同じ紋様が浮かんだ。

旭先輩が左手の甲を見る。そこにもまた、同じように紋様が浮かんでいた。

「誓いの魔法。我が誓いが守られなかった時、この魔法陣が私を殺す。」

「王！」

神官の叫びをものともせず、ライアス王が続けた。

「勿論、この魔法が本物かどうか、君にはまだ分からないだろう。

だが、少し調べれば、その魔法陣が誓いの魔法のものだと、明らかになるはずだ。信じられないのならば、確認してもらって構わない。」

「その必要は無い。これは、王の言う通りの魔術だ。どうもこの世界の魔術は、こちらの世界のものと同じらしい。以前に、この魔法陣を見た事がある。」

旭先輩の言葉に、ライアス王は満足げに頷いた。

「納得してもらえたようで、有り難い。それでは、今日のところは客間に案内させるから、ゆっくりしてくれ。」

そういつてライアス王が手を叩くと、部屋の扉が開き、メイド服を着た女性が入ってきた。

私と詩緒里が素で引いていると、ライアス王が紹介した。

「サーシャだ。彼女が君達の世話をする。何でも言いつけてくれ。」
「ご案内致します。」

サーシャさんが丁寧な頭を下げ、踵を返して部屋から出た。そこで振り返り、私達が付いて来るのを待っている。

「行こっか。」

私はそう言って、詩緒里とともに歩き出した。すぐ後ろに旭先輩が続く。

—けれど、椎奈は動かない。黙って、王を睨みつけている。

「椎奈。」

旭先輩に促され、ようやく視線をこちらに向けるが、いっこうに歩き出す様子が無い。

椎奈は、再びライアス王に向き直った。

「この国の王よ。私達はいくまで一般人。魔物と戦えるようになるまで、かなりの時間を要するが、この国はそれを、本当に待てるのか？」

「全力を尽くして、君達の訓練に協力し、魔物の侵入を防ぐ。誓いは必ず守る。」

真剣な表情で問い掛けに答えるライアス王をしばらく見据え、静かに言った。

「言質は取った。私達を裏切った時には、相応の報いを覚悟してもらう。」

椎奈は遂に踵を返し、私達のもとに歩み寄った。

事態の収拾を計るのは（後書き）

旭、良いところ取りですね。椎奈はちょっと困った子です。

目論見と口論

部屋―祈り場、と言うらしい―を出て私達が案内された「客室」は、とても広い一室だった。その部屋だけで、私の家よりも大きい。リビングのような場所から廊下が数本存在し、各廊下の先にはまたドアがある。ドアを開けると、広々とした寝室で、天涯付きベッドが据えられていた。

「こちらが皆様のお部屋となります。何か分からない事、不都合な事があった場合には、こちらのベルを鳴らせば、すぐに参りますので。」

メイド服を来たサーシャさんが、慇懃な口調でそう告げ、部屋を出ようとした。その背中を、椎奈が呼び止める。

「サーシャと言ったな。騎士や神官どもに伝えておけ。盗聴は詮索と見なす、不用意な行動で王の命をみすみす失わないように、とな。」

サーシャさんの背中が、びくりと揺れる。それでも答える声に動揺の欠片も無い事に、私は感嘆した。

「承りました。それでは、失礼致します。」

サーシャさんが部屋を出てすぐ、里菜が椎奈に食って掛かった。「椎奈、どうしてあんな態度を取るの？彼女は何も悪くないじゃない。頼れる人もいないんだし、むやみに敵を作るような態度、やめようよ。」

椎奈が冷めた目で里菜を見やった。

「古宇田、何か誤解しているようだが、彼らは誘拐犯だ。しかも、死の危険に晒される事を要求している。毅然とした態度を取らなければつけ込まれるぞ。大体、彼女が信頼できる人間だと、どうして言い切れる？ 彼女は、いつ逃げ出してもおかしくない者達を一任される程、王の信頼を勝ち得ている、魔術師だ。」

「魔術師？」

思わず声を上げると、椎奈がこちらを振り返った。

「そう。それも、かなりの魔力を有している。祈り場にいた神官達の大半よりも強かった。」

椎奈が確認するように旭先輩を振り返る。旭先輩は、黙って頷いた。

何故そんな事が分かるのか聞きたかったけれど、言い出せなかった。

「旭、何故引き受けた。」

椎奈が続いて、旭先輩に詰め寄ったからだ。椎奈の表情に変化は無かったが、語調に苛立ちがにじんでいる。旭先輩は、表情を変えずに答えた。

「あの場で言い争っても、何も状況は改善しない事は椎奈も分かっていただろう。ならば、少しでもこちらに有利な条件を引き出して、引き受ける振りをした方がいいと判断した。」

「引き受ける、フリ？」

里菜の呟きに、旭先輩が頷く。

「条件のうち、最初の3つは、時間稼ぎと行動の自由の確保のためにすぎない。目的は、4つ目だ。」

召還の魔術があるのならば、帰る方法があるはずだ。ここは、国

の中樞たる王城。国中の書物が集まっていると判断していい。この国の書架を調べれば、帰る方法そのものとは行かなくとも、召還の魔術の理論などから手掛かり位は得られる。

訓練の為の学習と称して調べていけば、戦いにかり出される前にもとの世界に帰る事も可能だ。」

「…残念ながら、目論見は外れたようだが、どうするんだ？その誓いの魔術、旭に対しても効力がある。もし魔王討伐に協力しなければ、旭が死ぬ。」

椎奈の言葉に、息を吞んだ。けれど旭先輩は、動じない。

「魔王を倒してから帰れば良い話だ。」

「旭！」

椎奈が声を荒げた。これほど怒った椎奈は、初めてだ。いつもは冷静沈着に、淡々と物事を処理していくのに。

それに。椎奈の表情には、怒りとともに、焦りがあるように見えた。

「何を考えている！それがどれだけリスクの高い事か、分からない程愚かではないだろう！」

「椎奈、もう遅いよ。それに、今更見過ごす事も出来ないし。4人で力を会わせれば、何とかなるよ、きっと。」

里菜が口を挟んだ。椎奈の剣幕にのまれていた私は、親友の勇氣に感心した。里菜を応援すべく、力強く頷いてみせる。

「古宇田、情に流されるな。古宇田は今まで、何かしらの戦闘経験があるか？武道すらも学んでいないのだろう。たとえ王の言う特殊

な能力が身に付いたとしても、それだけでは何もならない。力を得ても、それを使いこなすだけの技術と知識、経験が無ければ、無用の長物だ。」

「…なんだか妙に確信的けどさ、椎奈こそ、その経験がある訳？ やってみなければ分からないでしょ。」

流石にむっとした様子で言い返す里菜の主張を、椎奈は切って捨てた。

「やってみなければ分からないから、試しに命をかけてみるのか？ 自殺行為だぞ。それから、経験があるのかと聞いたな。その答えは yes だ。」

「…え？」

椎奈の秘密（前書き）

タイトル付けるの、難しいですね。どうも内容とずれている気がして仕方ありません。

椎奈の秘密

何事か反論しようと口を開いた里菜が、最後の言葉を聞いてぽかんとした表情を浮かべた。

「良いのか、椎奈。」

「事ここに至っては、何も知らないままという訳には行かないだろう。」

旭先輩と椎奈が言葉を交わす。旭先輩は知っていたようだ。

「私も旭も、妖を視る目を持っている。視るだけではなく、声を聴いたり、触れたり、まあ普通の人間と同じように接する事が出来るんだが、妖というものは、視える者を襲う性質がある。たまたま私達は、それを退ける力をもっていたから、日常的に妖と戦ってきた。旭が西洋魔術に詳しいのは、その為だ。」

「俺の力は西洋魔術に適していたからな。椎奈は、日本古来の術が合っているようだ。」

「…だから、サーシャさんが魔術師だって分かったんだ。」

漏れた呟きに、椎奈が頷く。

「私達の視る力は、かなり強い方だ。だから、妖を視るだけでなく、人に宿る魔力を、可視光と同じように視える。」

「でもさ、だったら問題ないじゃない。椎奈も旭先輩も、戦い慣れているのでしょうか？どうしてそんなに反対するの？」

里菜の反対に答えたのは、旭先輩だった。

「椎奈は、自分の戦う力を疑っている訳ではない。古宇田と神門の事を心配している。」

旭先輩はそれだけしか言わなかったけれど、言いたい事は理解できた。

椎奈や旭先輩は、いい。でも私達には、経験が無い。人外のものと戦うという意味を知っている椎奈には、私や里菜が戦う事がどれだけ危険な事か、実感として分かるのだろう。気持ちだけで何とかなるものではない、と。

「…旭。私は旭も危険だと思っている。旭の力自体を疑う気はないが、旭はそこまで経験が多くない。どこまで前の世界で使っていた力が通用するか分からない状況で、旭が無事でいられる保証はどこにも無い。旭だって、その位は分かっていたのだろう？だから聞いている、何故引き受けたりしたんだ。」

椎奈が非難の矛先を旭先輩に向けた。恋人の心配をするのはごく普通の事なのだろうけれど、その言い振りは、椎奈が旭先輩さえも信じていない事が聞いてとれた。

以前、椎奈が言っていた事を思い出す。

「他人に期待を抱くのは、甘えに過ぎない。客観的な判断を下せば、絶対という言葉など空想に過ぎないというのは明白だ。私は、他人の事を無条件に信頼などしない。」

確か、旭先輩と付き合い出した後だった。里菜が、旭先輩でも？と聞き返していたからだ。

「当然。付き合っているからと言って、その人間の全てを信じる事など出来はしない。私は旭に何かを求めるために、依存する為に側にいる訳ではないからな。」

じゃあ、どうして付き合うの？という言葉には、答えが返って来なかった。

誰も信じない、その言葉には椎奈自身さえ含まれているようで、なんだか悲しい気持ちになったのを、覚えている。

「力が通用するかどうか分からないのは、椎奈も同じだ。確かに王は俺が見ていたよりも一枚上手だったが、俺が約束したのは、魔王討伐の協力だ。字義解釈など、いくらでも出来る。後方支援でも、配下を倒すだけでも、協力は協力だ。今は過ぎた事を言い争うより、今後の事を考えるべきだろう。」

「答えになっていない。誤魔化すな。私が聞いているのは、戦えるだけの十分な力も無いのに、何故安請け合いをしたのか、という事だ。」

椎奈の言葉に、旭先輩が眉をひそめる。口論に発展しそうな雰囲気、私は慌てて割って入った。

「二人とも、やめて。こんな状況で、私達まで仲違いしても、良い事なんて何も無いでしょう？」

「：神門、」

「もう良いよ、椎奈の心配も分かるし、嬉しい。でもね、今は出来る事をしようよ。私も里菜も、足手纏いにならないように頑張るから。」

真っ直ぐ目を見て、はっきり言った。椎奈の目つきは鋭いから、目を合わせるだけでも緊張するけれど、それでも、目を逸らさなかった。

私の言葉に、椎奈が逡巡を見せた。珍しく、椎奈の方から目を逸らす。

「…今日はもう、休まない？　なんか、疲れちゃった。」

不意に里菜が口を開いた。その言葉で、場を支配していたぎこちない空気がふっと和らいだ。

「そうだな、明日もいろいろあるだろうし、休めるうちに休もう。」
旭先輩が頷いて、寝室の1つに歩み去った。行動の早さにやや面食らったけれど、私も空いている寝室に入った。

拒絶

誰もが寝静まった頃、私はそっと寝台から抜け出した。寝室を出て、部屋を出ようとしたその時、背後から声を掛けられた。

「椎奈。」

ゆっくりと振り返る。声を掛けられる前から気配は感じていたから、驚きは無かった。

「どこに行く。」

「少し、城内を偵察。」

短く答えて、再びドアに向き直った。肩に手が置かれた。

「椎奈。気持ちは分かるが、せめて探査の術に止めておけ。相手の警戒心は無闇に煽るのは、得策とは言えない。俺たち二人だけではないんだ。」

旭の言葉に舌打ちして、刀印を握り、目を閉じた。城の構図と、この城に掛けられている魔術と兵力を頭に入れる。

「椎奈。焦るな。つけ込まれるぞ。」

旭の警告に、あえて返事をしなかった。

「椎奈。」

肩に置く手に力が入り、私は無理矢理旭の方に向き直させられた。感情を排した瞳。いつもならば私に冷静さをもたらすその目は、

しかし、今はただ、苛立ちを掻き立てた。

らしくないとは、自分でも思う。感情など、とうの昔に捨てたはずなのに、今日の私は、ただひたすら苛立っていた。原因は、分か
りきっている。

――また、巻き込んでしまった。

おそらくあの召還術は、勇者となる資格を持つ者を裁定する術が
組み込まれている。過去の勇者達も、この国に来てから力を得たと
いうよりも、顕在していたか潜在的なものかはともかくとして、何
らかの能力を持っていたのだろう。

古宇田と神門に、その力はない。人の身に余るこの力は、潜在的
な能力すらも見抜く。クラスにも一人二人、素質のある者がいるの
は分かっていたが、あの2人には、それが全くない。

それなのに二人までもがこの世界に来てしまったのは、間違いな
く私のせいだ。

せめて、あの2人だけでも帰してやりたい。召還術の魔法陣はあ
らかた解析できているから、少しこの国の魔術を学べば、帰す為の
魔法陣を組む事など雑作も無い。本当は旭も帰したいところだが、
誓いの魔術がある以上、それは出来ない。それでも旭と王の契約は、
4人全員を対象にしきれていないから、古宇田と神門を帰す事には
何の支障もない。

けれど、今日の様子を見る限り、それは拒まれてしまう恐れがあ
る。二人のお人好しは分かっていた事だったが、まさかあれほどと
は、夢にも思わなかった。

――何故あの時、神門の言葉を退けられなかったのだろう。
嫌われてでも、傷つけてでも、彼女達が手を引くように説得する

べきだったのだ。それなのに、「足手纏い」という言葉に、心乱れた。

——足手纏いなのは、私の方だ。

——災いを招くこの身が、古宇田や神門、旭を傷つけないと、誰が言い切れるだろうか。

これ以上巻き込む前に、私から逃げてくれ。そう言いたかったのに、何故か視線を逸らしてしまった自分がいた。動揺に負けた己の弱さに、ほとほと嫌気がさした。

「椎奈。自分を責めるな。」

まるで私の思考を読み取ったかのように、旭が言った。黙って頭を横に振った。

「お前は悪くない。何もかも、一人で背負い込もうとするな。」

「うるさい。」

肩に置かれた旭の手を払いのける。旭の動揺が、空気を介して伝わって来た。

「分かったような口をきくな。旭は、私にただ側にいろと言った。巻き込まれても構わない、決して私の前から消えたりしないからと。だからこうして側にいる。だけど、私に干渉するな。不愉快だ。」

「椎奈、」

何事か言いかける旭に、畳み掛けるように言った。

「旭が何を知っている？ せいぜい、私の力と、過去のほんの一部だ。」

私も、旭の事なんてほとんど知らない。知ろうとも思わない。干渉しようなんて、馬鹿げた事を考えるな。互いに、そんな事を求めている訳ではないだろう。」

「…椎奈、俺は」

「旭の思いなんか、興味ない。旭は、自分の事を心配していれば良い。」

そう言って、私は旭に背を向け、部屋を出た。制止の声は、掛からなかった。

陰謀と魔術

部屋を出た後、私は、見回りの兵士を避けながら、庭に出た。

異世界と言えど、月が出るのは変わらないらしい。細い三日月は、今にも消えてしまいそうでありながらも、確かに夜空を照らしていた。

側にあつた岩に腰掛け、溜息をつく。

言い過ぎたという、自覚はあつた。心配してもらって置いて、随分酷い事を言つた。

けれど、あの言葉は。

『お前は悪くない。』

『一人で背負い込むな。』

その言葉を、再び誰かに言われる日が来るとは思わなかった。最後にその言葉を聞いたのは、遠い昔。

心の奥底に、何重にも鍵をかけてしまったはずのその記憶が、私の心を揺さぶつた。動揺を隠そうと、知らず知らずのうちに拒絶の言葉を吐いていた。彼を受け入れると決めたのは、自分自身であるにも関わらず。

それでも、旭に言った言葉に、嘘は無い。旭には、自分の身を守る事だけを気にしていて欲しい。私に気を使ったりして、自衛をおろそかにしてほしくなかった。

名前を捨てても尚、周りの者に降り掛かる災厄。私の側にいるという事は、それをもろに被るという事だ。それでも消えないまま側にいる事の難しさを、いい加減理解してほしい。

もう一度溜息をついて気持ちを切り替え、城壁に近づいた。先程探査の術を放った時に、城を守る結界に、少し気になる瑕疵が視えた。

城壁の上の方、人の視線が丁度素通りする位置。そこに、小さな刻印が刻み込まれていた。魔法陣というよりは、私が普段使う印に近い。この国の魔術にもいろいろあるようだ。

刻印に軽く触れ、目を閉じる。案の定、それが結界を不安定にしている原因だった。

『…我、シイナ、ここに命ず。守るものに害をなすもの、力を失い、その源を我の前に示せ。』

言霊を込めて呟くと、刻印が赤く光り、溶けるように消え失せた。その代わり、目の前に五芒星が現れた。

五芒星は明滅を繰り返し、一瞬男の顔を映し出すと、すぐに消えた。

見知らぬ男だった。とりあえず記憶に止めてはおくが、それよりも気になった事があった。

「…逆探査の術を、防がれた？」

眩きが漏れる。

術が破られる事など、今まで無かった。本来逆探査の術は、相手の顔だけでなく、居場所までも探り出す。あれだけ不安定な五芒星が、顔だけを映し出し、それも一瞬で消えてしまうなど、通常はあり得ない。

可能性としては、この術が遠い昔に組まれたか、術者が死んだか、あらかじめ探られないように防御の魔術を組んでおいたかだ。そして、今の五芒星の様子から言って、最後が正解である可能性が高い。

だが、それさえもあり得ない事だった。この力は、通常の魔術師を軽く凌駕する。防御の魔術等、容易く打破するのが常だった。相手が自分以上の魔術師なのか、それとも。

「この世界に来て、力が十分に使えていないのか…」

どうやら、旭に言った言葉が現実になっているようだ。それでも、使えるだけましと考えるべきなのだろうが。

深まる対立

不意に背後に気配を感じた。振り返ると、サーシャと名乗った魔術師が、こちらに向かって歩み寄って来た。

「シイナ様、こんな夜遅くに、どうなされたのですか？明日は大切な目覚めの儀式。どうかご自愛下さい。」

いつの間に名を知ったのか、サーシャは静かに告げてきた。

「こちらの行動に詮索、干渉するなと約束したはずだが？私が何をしていたように、私の勝手だ。それより、儀式と言ったな。」

「はい。明日は、勇者様が召還の時に得た力を目覚めさせる儀式です。今回は、同時に、4人の中のどなたが勇者なのかを見分ける目的もあります。」

我ながらあまりな物言いだと思ったが、サーシャは気を悪くした様子も無く律儀に説明してきた。

「4人全員が勇者の素質をもつ可能性は？」

「分かりません。過去に、複数人が召還された事など一度もありませんでした。」

その言葉に、思わず笑いがこぼれる。いぶかしげな顔をしたサーシャに向かって、一歩踏み出した。

「戯れ言を。貴方程の力があれば、古宇田と神門に素質が無い事に気付かないはずが無い。それに、前回も二人程召還されているのだろう？その時は、一方のみが資質を示したはずだ。」

サーシャが息を呑んだ。その顔に狼狽が浮かぶ。私は、もう一步サーシャに詰め寄った。

「貴方達は、古宇田と神門を人質に取るつもりか。あの2人がいる限り、あの2人が戦いに臨む限り、私が手を引くはずも無いと。…ああ、成る程。だからこそ、目覚めの儀式か。この国における、魔術の譲渡を行う事で、素質の無い二人に魔力を与え、4人とも素質がある事にする為に。」

明るい緑色の瞳を覗き込むようにしてそう告げると、サーシャは絞り出すように呻いた。

「どうして…」

「どうして分かったか、か？さあな。ともかく、お前をよこした奴らに言え。もしも明日、そんな愚かな事をするようならば、その場で貴方達を皆殺しにする、と。」

サーシャが顔を引きつらせたのは、私があえて見せた力のせいか、それとも、私の目が映し出しているに違いない、まぎれも無い殺意のせいか。

「人の姿をした妖よ。私が貴様に、慈悲を掛けと思うな。これ以上こちらに手を出すようならば、私は間違いなく、貴様を消す。」

そう言うと、サーシャの顔から表情が消えた。無表情のまま、私に問い掛ける。

「いつから気が付いていたの？」

鼻で笑ってみせた。ようやく本性を晒したか。

「最初からだ。私には、魔力と妖力の違いが分かる。よく似ているが、その性質は全く違う。妖力は、人間に仇なすものだ。その陰の性質を視れば、相手が人か妖かなど、火を見るよりも明らかだ。

警告しておくが、私は本気だ。少しでもこちらにとって災いとなると判断すれば、すぐに貴様を抹消する。覚えておけ。」

そう言って、私は一歩下がし、背を向け、悠然と立ち去ってみせた。誰よりも他者にとっての災いである自分が、随分と偉そうな口を叩くものだと、自らを嘲りながら。

深まる対立（後書き）

物騒な椎奈。こんな16歳がいたら、怖いですね。

勿論椎奈がこうなったのには、理由があります。いつか書くつもりです。

…いつになるかは、分かりませんが…

誰が、勇者？

異世界生活、2日目。

何となくそう呟いてみて、あんまりにファンタジーじみていて、笑ってしまった。

現実逃避だというのは、分かっている。そんな事をしてもしようも無い事だって、よく分かっている。

：それでも逃げたい時って、あるよね。

椎奈の不満は、一晚経っても、ちっとも和らいでいないらしい。それどころか、更に悪化したように見える。

相も変わらずサーシャさんに対する態度は攻撃的だし、夕べの言い合いが尾を引いているのか、旭先輩とは、事務的な事しか口をきかない。旭先輩も、そもそも無駄話をするタイプじゃないから、気まずい空気の中、私と詩緒里が断続的に会話を交わすという、実に胃に悪い朝食をとった。

朝食後、サーシャさんが丁寧な口調で私達に話しかけた。

：「私達」の中に、無意識に椎奈が外されていたところで、責められないだろう。あれだけあからさまに威嚇されて、平気なはずが無い。

「これから、目覚めの儀式が行われますので、ご案内致します。」
「目覚めの儀式？」

今度はどんなネタだと聞き返す。私の内心には気付かず（当たり前だ）、サーシャさんは丁寧に答えてくれた。

「勇者様に宿った力を覚醒させる儀式です。当代一の神官によって行われます。」

「覚醒は、勇者に宿った力に限定されるのか？」

旭先輩が尋ねる。サーシャさんは質問の意図を理解した上で、分かりやすい答えを返してくれた。

「そうです。ですから、この儀式を執り行う事で、4人のうちの誰が勇者の素質を持つのが明らかにあります。」

誰が勇者か……。詩緒里と顔を見合わせて、目だけで会話をする。

「誰だと思う？」

「私達に、そういう役が果たせるとは思えないよね。」

「うん。でも、旭先輩は……」

「魔王、だね。でも、椎奈は……」

「昨日の様子を見ている限り、どう見ても悪役だね。」

「……いないね。」

「うん、いない。」

「……あの、コウダ様、カンド様？どうなされましたか？」

不意にサーシャさんに話しかけられて、会話の途中で黙り込んだ形になっていた事に気付いた。

「あつ、いえ、すみません。えっと、それで、その儀式は、どこで

行われるのですか？」

「昨日と同じ、祈り場です。それではご案内致してもよろしいでしょうか？」

サーシャさんの言葉に頷き、私と詩緒里は立ち上がった。旭先輩、椎奈も続いて立ち上がり、サーシャさんに続いた。昨日の事があったから、椎奈は付いて来ないのではと心配していたけれど、どうやら杞憂だったようだ。

こっそり胸を撫で下ろして、私は椎奈の後ろに付いて部屋を出た。

誰が、勇者？（後書き）

ここまで一気に更新しましたが、ここからはスピードがぐつと落ちます。もう1つ書いている話があつて、両方を少しずつ更新していく事になると思います。

∴というより、もう1つを書いている途中でフツと浮かんた話なんです、これ。

目覚めの儀式

サーシャに連れられ祈り場に付くと、そこには、神官の服を纏った、小さな少女が待っていた。手には、身長よりも大きい杖。

王もまた杖を持っていた事を思い出し、この国の魔術師は、杖が必携なのか？と疑問に思った。機会があれば、調べてみよう。

「初めまして、勇者様。神官のエリー＝アドラスと申します。」

「あ、初めまして。古宇田里菜です。」

少女の自己紹介に、古宇田が真っ先に応じた。昨日といい今日といい、彼女に警戒心というものは存在しないのだろうか。

——まあ、知らなければ無理も無い、か。

漂い出て来る魔力を視て、私達をこの世界に拉致したのが、彼女だと確信した。もっとも、昨日の時点で、見当を付けてはいたのだが。

「神門詩緒里です。」

「旭梗平だ。」

神門、旭が古宇田に続く。事情を知る旭が名乗るのを見て、仕方無く、私も名乗る事にした。

「椎奈。」

私の雑な自己紹介を聞いて、アドラスは首を傾げた。

「コウダ・リナ様、カンド・シオリ様、アサヒ・キョウヘイ様。あ

の、シイナ様。ファミリーネームをお教え願いますか？」

「椎奈がファミリーネームだ。私達の国では、まずファミリーネーム、その後にファーストネーム。この国に会わせるのならば、順番は逆になるな。」

「そうですか。それで、シイナ様のファーストネームは？」

誤魔化されてはくれないアドラスに、内心舌打ちする。

「無いと何か問題があるのか？」

決して友好的とは言えない態度に、アドラスはわずかに怯えたようなそぶりを見せた。

「あ、あの…。儀式において、名前は大切なんです。名字だけでは、十分な効果が出ないかもしれません。」

「名前の呪しゅを源にした魔術か？」

「：お詳しいですね。その通りです。儀式に置ける魔術は、私の魔力と、名前の持つ力によって完成します。」

アドラスの説明に、私の警戒心の水準が上昇した。

名前の呪を用いた術に、碌なものはない。大抵は、相手の精神に干渉するものであり、操ったり、記憶操作を目的とするものが少なくない。少なくとも、ただ力を覚醒させるだけで、名前が必要になるはずもない。

アドラスの表情を見れば、私の知識がどこまで及ぶものなのか、疑っている事が分かる。彼女が、単に目覚めさせる事を目的にしている事は明らかだ。

「そうか。だが生憎、私に名は無い。」

そういうと、アドラスは驚いたように目を見張った。名を捨てて以来、見慣れた光景だから、気にはならなかった。

だが、アドラスから理由を問う声は上がらなかった。

「揃ったようだな。それでは、エリー||アドラス、始めてくれ。」
王が、たくさんの護衛とともに祈り場に入ってきて、アドラスに声を掛けたからだ。

「……はい。畏まりました。」

アドラスがわずかな時間躊躇いを見せた後、諦めたように頷いた。杖を構え、目を閉じ、意識を集中する。

——圧倒的な魔力がその体から放たれ、私達を取り囲んだ。

『我が名は、エリー||アドラス。大いなる神、ミハエルに奏す。
ここにあるは、リナ・コウダ、シオリ・カンド、キヨウヘイ・アサヒ、シイナ。勇者の資質を問いし者。』

神よ、彼らの秘めたる力を解き放ち、彼の者達を導きたまえ。』

アドラスが厳かな口調でそう告げると、召還のときと同じ、白い光が私の意識を飲み込んだ。

予期せぬ再会

意識が戻ると、私は、どこかの森の中の開けたところに、1人立っていた。見回すも、他の三人はどこにも見当たらない。

背筋に冷たいものが滑り落ちた。

「旭、古宇田、神門。どこにいる。」

声を張るも、返事はどこからも返って来ない。

焦燥に駆られて駆け出そうとしたその時、ぼんやりとした光が視界を掠めた。

はっとしてそちらを見やると、光は明滅を繰り返しながら、森の奥へと移動し始めた。

誘われていると、直感した。

他者の術中にはまっている、この状況で、誘いに応じるのは無謀以外の何物でもない。そんな事は分かりきっていた。

だが、他に三人を捜す手掛かりが無いのも、事実だ。

深呼吸を1つして、光を追って歩き出す。まるでそれを察したように、光の移動する速度が増した。

始めはゆっくりと歩いていても間に合う速度だったものが、次第に早歩き、小走り、最後には、全力疾走を余儀なくされる速度になった。

それなりに鍛えているので、走る事に苦痛はそれほど感じない。それよりも、周りの景色に強い既視感を覚えた事が気になった。

いつ見たものかと記憶を探っているうちに、光が一点で止まったのが見えた。数秒後に追いつき、呼吸を整えた。

光は私が追いつくと同時に、形を変えた。一際輝き、発光が収まると、そこには小さな祠があった。

祠は、白木造りのシンプルなものだ。その意匠は、私の既視感を更に掻き立てた。

閃いた、と思った瞬間に、不意に背後から声を掛けられた。

『―シイナの巫女よ。』

その呼称に、凍り付いた。

――まさか。

『久しく会っていなかったが、変わらぬようで、何よりだ。』

ゆっくりと振り返る。ギシギシと体が軋むような錯覚を覚えながら振り返った先には、この世のものではない美しさを持った、人の形をしたモノが、私を見つめていた。

燃えるように赤い髪は、腰に届く程長く。誰もが見とれる顔立ちに、黄金色に輝く瞳は、見るものの心を奪う。

「天御中主、神――」

呻くように呟くと、神は楽しげな笑みを浮かべた。

遭遇

眩しい光が収まって、目を開けると、私と詩緒里は海岸に立っていた。

「…はい？」

思わず声を漏らす。

「里菜、さっきまで、祈り場にいたよね。」

詩緒里も面食らった顔で、声を掛けてきた。

「うん、間違いないよ。…ってというか、他の人は、どこに行ったの？」

辺りを見回しても、人っ子一人いない。先程まで祈り場でたくさんの人に囲まれていたのが、夢みたいだ。

「分からない…。でも、椎名も祖先輩もいないと、怖いね。」

「…うん、そうだね。」

どちらからとも無く、私達は手を握り合った。

情けない話だけれど、こうして二人でいると、改めて、今自分達が置かれている状況に、戸惑いと恐怖を覚えた。そして、今まで平気だったのは、あの2人のおかげなのだと、思い知らされた。

「ここ、どこだろう…」

詩緒里が呟くとともに、目の前に光が煌めいた。光は形を変え、2つに分かれ、やがてはつきりとした形を持って、私達の前に姿を現した。

一方は白く輝く、虎とオオカミの合の子のような姿の4足獣、も

う一方は銀色が眩い、フクロウらしき鳥。

「あのー、ここ、どこですか？っていうか、貴方達はいったい？」

「…里菜、人じゃないんだから、答えられないんじゃないの？」

何となく声を掛けてみると、詩緒里に実に現実的な指摘を受けて、恥ずかしい気持ちになった。

『…そなた達、勇者としてこの国に召還された、リナ・コウダと、シオリ・カンドに、間違いないか？』

けれど。私の質問を無視したこの言葉が、虎とオオカミのハーフの様なものの口から出てきて、改めてここは非現実な世界だと実感した。

「…ええ、まあ。勇者なのかどうかは、分かりませんが。」

とりあえず肯定してみせると、二匹は同時に頷いた。

「で、貴方達は何者で、ここはどこなんですか？」

なんだかどうにでもなれという気持ちで問い掛けてみると、フクロウの方が答えてくれた。

『ここは、神官の作った虚構世界。我等は、この世界の精霊の主だ。』
』

「虚構世界に、精霊の主…。」

詩緒里が呟く。その口調から、私と同じ事を考えているのが分かった。

なんだか、もっと真面目にRPGとかやっておくべきだったんだろうか。こうなったら、ドラゴンが出てきたって何も不思議じゃない。

『確かにこの世界にはドラゴンはあるが…、RPGとは何だ?』

フクロウに尋ねられて、私は凍り付いた。

どうやら、人の心が読めるらしい。

もうやだ、この世界。プライバシーの保護って言葉、今まで鬱陶しくって嫌いだったけれど、とっても大切なものだと思い知った。

「いえ、何でもありません。で、私達はここで、どうすれば良いんですか?」

『何もする必要は無い。』

初めて知る事実、葛藤

虎とオオカミのハーフ―オオカミで良いや―の言葉に、ぽかんと口を開ける。

何もしなくていいなら、何故こんな目に遭っているのだ。

私の非難の視線から察したのか、はたまた心を読んだのか、フクロウが説明を付け加えた。

『そなた達は、勇者の素質を持たずに、この世界に来た。おそらく、他の二人に巻き込まれたのだろう。この世界は、素質あるものを目覚めさせる為に、我等と契約を結ぶ所。そなた達には、する事が無い。』

面と向かって巻き込まれただけだと言われて、私達は顔を見合わせた。一瞬のアイコンタクトの後に、詩緒里が前に向き直り、口を開いた。

「ですが、私達が帰れる訳でもないのですよね。私達は、戦う力も無く、この世界で椎奈達と一緒に戦わなければならぬのですか？」
『否。おそらく、シイナとやらが、近いうちにそなた達を帰す方法を見つけ出すはずだ。そなた達は、力を得ずとも、戦う事無く元の世界に戻るであろう。』

オオカミにそう言われた私の心は、いろいろな感情が浮かんで消えた。

帰れる。元の世界に。素直に喜ぶ自分がいた。さっきまでの不安が、まだ心の奥に燻っている。これからずっと、この不安に耐えられるかと言われれば、自信は無い。不安に押し潰されてしまう前に

帰るのが賢い選択だと、分かっていた。

——でも。椎奈と旭先輩を、置いていくのは気が引けた。これから命をかけて戦う二人を他所に、元の世界で平和に暮らせるかと聞かれれば、答えはNOだ。

だけど、と、小さな声が聞こえた。だけど、あの2人は戦い慣れている。あの2人なら、無事に魔王を倒して、いつか帰って来るだろう。私達は、かえって足手纏いになるだけなんじゃないか。と。

悩んだ。今までに無い程、真剣に考えた。私はどうしたい。どちらを選べば良い。

決意

その時、詩緒里と目が合った。その目は、澄み切った強い光を宿している。悩む私に、詩緒里は微笑んだ。思わず笑みを返し、息を吐いた。

——詩緒里には、叶わない。

普段は、人と話すだけでも腰が引けていて、旭先輩への想いを告げないまま、椎奈に気を使い、椎奈のきつい物言いにいちいち身をすくませる、気の弱い、心優しい少女なのに、その芯は絶対に揺らぐ事は無い。誰よりも強いけれど、常に壊れてしまいそうな危うさを合わせ持つ椎奈とは、正反対だ。

詩緒里はもう、椎奈達についていくと決めている。後は、私が覚悟を決めるだけだ。

大きく息を吸い込み、一步、踏み出した。

「…あの、私達が貴方達と契約を結んだ場合、この世界で、何か特別な力が使えるようになるんですか？」

私の質問に、オオカミとフクロウが顔を見合わせた。

『…おそらく、リナ・コウダは私と、シオリ・カンドは彼と相性がいい。それぞれが契約を結べば、リナ・コウダは水を、シオリ・カンドは風を、自在に操れるようになるであろう。水、風の系統ならば、魔術も使えるはずだ。』

オオカミの戸惑いがちな答えに、フクロウが続いた。

『だが、何故力を欲するのだ？そなた達は無関係、それも、近いう

ちに帰る事が出来る。わざわざ自らを危険に晒す必要は、無いのだ。」

「残念ながら私達、必要、不必要を行動基準にしてないんです。大事なのは、やりたいか、やりたくないか。私は、椎奈や旭先輩と一緒に戦って、一緒に帰りたい。で、足手纏いにならないように、せめて、自分の身を守るだけの、力が欲しい。それだけです。」

あえて明るい口調で言い切った。詩緒里が続ける。

「椎奈は反対するかもしれないけれど、私達は帰りません。経験が無いって言われたけれど、そんな事言ったら、何も出来ないから、やります。椎奈だって、戦いで無事にいられるとはいいい切れない。旭先輩がいれば、ある程度は大丈夫かもしれないけれど、私達も力になりたいんです。」

詩緒里の言葉を聞きながら、椎奈に初めて力を貸してもらったときの事を思い出す。

めっちゃ厳しい先生が担当の英語の予習を忘れていて、パニックになっていた時。すぐ後ろに座って本を読んでいた椎奈は、本から顔を上げる事無く、実に素っ気なく言った。

『うるさい。周りの迷惑を考えろ。騒ぐくらいならば、少しでも進めたらどうだ。』

『そんな事言っちゃって、これ難しいし、間に合わないよ。』

言い返すと、椎奈はようやく本から顔を上げて、教材を覗き込んだ。

『要するに、この部分の文法が分からないのだろう？これは、関係代名詞の省略だ。授業でもまだやっていないがな。』

あっさりと手が止まっていた部分を指摘されて、私は驚いて椎奈の顔を見つめた。椎奈が眉をひそめる。

『…時間が無いのでは、なかったのか？』

指摘され、慌てて予習に取りかかる。その後も椎奈にいくつか教えてもらって、先生が来る前に、なんとか予習を終わらせる事が出来た。

授業の後、お礼を言うと、椎奈は鬱陶しげな顔で答えた。

『礼など言うな。今度からは、きちんと家でやって来る事だな。』

『だって、おかげで助かったし。椎奈って、頼りがいがある感じ。また助けてもらっていい？』

そう言うと、椎奈は一瞬目を見開き、すぐに顔を背けた。

『頼む前に、まず自分でなんとかする事を考えろ。私なんか頼ろうと考えるな。不愉快だ。』

言葉とは裏腹に、椎奈の顔は不快感を示してはいなかった。

『やだ、絶対頼む。その代わり、椎奈に何かあったら、私が助けてあげる。』

『人に助けてもらうつもりは無い。私は、自分の事は自分で責任を取る。』

やたらと強い口調で言い切られたけれど、その時の椎奈がすごく独りに見えて。何かあったら、どんな小さな事でも良い、力になるうと、その時心に決めた。

契約。よろしくね。

『…成る程。面白い少女達よ。確かに、勇者たる素質である、力は無い。だがそなた達には、力が無い代わりに、強い心を持っているようだ。』

オオカミがしばらくの沈黙の後、そう言った。フクロウが頷く。

『良いだろう、力を貸そう。このような希有な魂を持った少女、私も興味を持った。』

真顔でそんなことを言われて、なんだか恥ずかしくなったけれど、とりあえず尋ねた。

「契約、してくれるんですね？どうやるんですか？」

『互いに触れて、名を呼び合う。』

「…それだけ？」

「そなた達がするのは、それだけだ。」

拍子抜けしたけれど、とりあえず頷いて、詩緒里と繋いでいた手を離し、オオカミの方に歩み寄った。詩緒里も、フクロウの方に歩み寄。

オオカミに近づいて、見た目以上にふさふさなその毛並みに、最初はただ背中に触ろうと思っていた私の気持ちちが、大きく方向変換した。

首に腕を回し、ぎゅっと抱きつく。

『…リナ・コウダ。確かに触れるとは言ったが、そこまでしろとは言っていない。』

「だって、気持ちいいから。別に、問題ないでしょ？」

「里菜…。まあ、里菜らしいけれど…。」

詩緒里が、フクロウに差し出された羽に軽く触れながら、溜息まじりにそう言った。詩緒里の訴えんとする事をあえて無視して、オ

オカミに言った。

「それはそうと、私の事は、里菜で良いから。それで、貴方の名前は？」

尋ねると、オオカミは溜息をついてから、答えた。なんだか、最初の印象よりも、遥かに人間くささを感じた。

『：ユトウルナ、だ。』

「：ん？まさか、女の子だったの？」

ちよつと驚いて聞き返すと、首肯が返ってきた。てっきり男だと思っていたので、意外。

「んー、じゃあ、ユウって呼ぶね。」

ユウから絶句する気配が伝わって来るけれど、私の中ではもうユウ以外の呼び名はあり得ないので、諦めてもらおう。

「えっと、貴方の名前は？」

呆れた顔で私を見やっていたフクロウが、我に返って詩緒里に答えた。

『ミキストリだ。』

ミキってよぼう。心の中で強く思うと、案の定心を読んだらしく、物言いたげな目でミキがこちらを向いた。少しして、諦めた顔。私に何を言っても仕方が無いという境地らしい。

にやりと笑った。甘い。

「あ、では、ミキと呼びますね。」

今度はミキが絶句した。そう、詩緒里は、多分私の影響だと思うけれど、友達にニックネームを付けるのが好きだ。

：流石に、私も詩緒里も、椎奈や旭先輩にニックネームを付ける事は出来ないけど。

『：：：それでは、契約を結ぼう。リナ、私が言うのを、そのまま詠唱しろ。』

気を取り直したユウが、私に改めてそう言った。りょーかい、と

頷き、ちらつと視線を詩緒里に持っていくと、詩緒里も同じような会話を交わしていた。

『こちらに集中しろ。―我、リナ・コウダは、ユトウルナと契約を交わす事を望む。』

「：我、古宇田里菜は、ユトウルナと契約を交わす事を望む。」

ちよつと迷ったけれど、自分の名前には、それなりにこだわりがあるから、日本式で名乗らせてもらった。

ユウはきちんと、私の意図を察してくれた。

『：我、ユトウルナは、コウダ・リナと契約を交わす事を望む。リナの望みが叶うように、力を貸し与えよう。』

ユウがそう言った途端、首に回した腕を伝わって、暖かいものが全身に回った。心地よさに身をゆだねていると、まるで眠るときのように、周りがぼやけ、すうっと気が遠くなった。

『必要な時には、呼ぶが良い。いつでも力になろう。』

「ありがと、ユー……」

夢見心地で呟いて、私は意識を手放した。

覚悟（前書き）

遂に旭の一人称です！
なかなか機会が無くて、今まで1人だけ一人称が無かったので、ずっと気にしてたので、一安心。

覚悟

光が収まって最初に目にしたのは、広大な草原。周囲には、誰もいなかった。

「椎奈、古宇田、神門。どこにいる。」

声に出して名前を呼んだが、答えは帰って来ない。

どうやら、引き離されてしまったようだ。

もしも4人が4人ともバラバラになったのだとしたら、椎奈が何をし出すか分からない。最悪、アドラスと名乗る少女の術を打ち破るべく、攻撃魔術を構築しかねない。

そうなる前に事態を打開する方法に頭を巡らせるが、そもそもが相手の術中にいるのだ、状況に流されるしか選択肢は無い。

『―汝が、キヨウヘイ・アサヒか。』

名前を呼ばれ、振り返ると、若い男が立っていた。

青い髪に、深碧色の瞳。一目で、人ならざるものだと分かった。

だからといって、椎奈が妖と呼ぶモノのような陰の気は、一切感じなかった。

「そうだが、お前は？」

逆に問い返すと、男は一瞬目を見張り、すぐに意地の悪い表情を浮かべて頷いた。

『成程、類い稀なる力の持ち主よ。気に入った。』

我が名は、ミハエル。汝が今いる世界の神だ。』

「……………」

咄嗟に取るべき態度が見つからず、黙り込んだ。そんな俺の様子を見て、ミハエルは満足げに笑った。

——どうやら、俺の態度に一矢報いたかったようだ。

困った性格の神に内心溜息をつきながら、俺は問い掛ける。

「神よ、ここはいつたい、どこなのですか。」

『敬語を使わずとも構わん。私は汝が気に入ったのでな。』

ここは、神官の作る虚構世界。本来ならばここで、この世界の精霊と契約を交わす事で、勇者は力を得る。だが、汝は既に、その力を制御する術^{すべ}まで得ている。この世界の精霊とは、相容れぬ。そこで、我の出番という事よ。』

「どういう事だ？」

『我は、汝の力をこの世界に適応させるべく、汝の前に現れた。…否、それだけではないな。我は、ともすれば、汝の力を目覚めさせる手助けを出来るやも知れぬ。』

「何…？」

意味が分からない。既にこの身に宿る力を目覚めさせるとは、いったいどういう事か。

『汝はまだ、知る必要は無い。それよりも、汝、我と契約する気はあるか？』

唐突な申し出だったが、俺は即答した。

「契約しよう。」

余りに迷いのない口調に逆に戸惑ったのか、ミハエルの返答が一拍遅れた。

『…よいのか？ 汝程の知識があれば、神と契約を結ぶという事がどういう事か位、理解しておろう。』

何故俺の知識量まで分かるのか興味があつたが、今は問いに答える事を優先した。

「この世界で生きていく為には、俺の力が必要だ。折角この身に宿る力、この世界で使えないのでは意味が無い。神と契約を結べば、それが叶うのというのならば、喜んで契約を結ぼう。」

『面白い男よ。それに、なかなかひたむきでもある。』

からかうような口調でそう返され、こいつは本当に神なのかと、疑念が生じた。

『シイナの巫女に忠誠を誓う者よ。その意味を、本当に理解しているとは思えないが、それでも、その危険性は分かっておろう。それでも汝は、その力を、己の為だけでなく、巫女の為にまで使うというのか？』

椎奈の事への問い掛けに、俺が迷う事など無い。そもそも、彼女の側にいる事の意味を全て受け入れて、俺は椎奈の側にいるのだから。

——だが。「シイナの巫女」という呼称に、理解していないと言われた事に。普通の人間が持つ感情など、とうの昔に消え失せたはずの俺の心が、ざわついた。

だからだろう、知らず知らずのうちに、語調は鋭いものになっていた。

「俺はシイナの巫女とやらは知らないし、誰かに忠誠を誓った覚えも無い。俺は、椎奈の側に居続けると約束した。その約束を遂げる為に、力を求める。それだけだ。」

『干渉しようなんて、馬鹿げた事を考えるな。互いに、そんな事を求めている訳ではないだろう』

『旭の思いなんか、興味ない』

夕べ言い放たれた言葉が、脳裏に浮かんで、消える。

椎奈の言う通り、俺は彼女の抱えているものなど、分からない。

椎奈は言おうとしないだろうし、俺も詮索しようとは思わない。少しだけ垣間見た過去から覗く闇を掻き回して、椎奈の傷に触れたくはなかったからだ。

——それでも。いつか、椎奈が心を許せる存在になりたいと、椎奈を守る存在になりたいと、願うから。俺は、力が——欲しい。

『…ふふ。なかなかいい返事だ。

良いだろう、契約を結ぼう。』

神は満足げに笑みを漏らした後、片腕を掲げた。手首を飾る腕輪が、淡く光った。

『我、ミハエルは、ここにいる若者と契約を交わす事を、ここに誓う。』

彼の名は、旭梗平。』

名を呼ばれた途端、全身がぴくりとも動かなくなる。声を出す事すら、叶わない。

「っ、……！」

息を呑む俺を意に介さず、神が続けた。

『彼の望む力を、我、ここに与えん。彼の力が、彼の願いを叶えん事を願う。』

我は、彼の為に助力を惜しまん事を、ここに約束しよう。』

神が言葉を唱え終わった途端、俺の中で、脈動が生じた。全身が熱を持ち、脈動の度に生じる何かが、まるで外に出ようとしているかのように、身の内で荒れ狂った。

「……！……！！」

声にならない悲鳴が口から漏れる。

俺の様子を、神は、何故か優しげに見える笑みを浮かべたまま、見つめていた。ゆっくりと歩み寄り、俺の胸―心臓の真上に、触れた。

「……………！！」

圧倒的な力が流れ込んだ。それは、俺の中で荒れ狂う何かとぶつかり、混ざり合い、大きなうねりとなって、全身を駆け巡った。視

界が真っ白に染まり、俺の意識は飲み込まれ、何も分からなくなつた。

求めるものは、力（前書き）

椎奈がようやく出番です。

思った以上に長くなってしまいました…

求めるものは、力

天御中主神。日本神話で、天地開闢の際に高天原に最初に出現した神とされており、宇宙の根源の神、あるいは宇宙そのものと言われている。

ほとんどのものが存在すら知らない、伝説上の神と知り合いなのは、私の身に流れる血筋の為だ。

それは良いとして、問題は。

「何故貴方がここにいらっしゃるのですか!？」

日本の最高神が、何故異世界にいるかだ。

『何故とはつれない言葉だな。三年前に会って以来、どうしているかと気にかけていたというのに。』

「いえ、そういう問題ではなく。ここには既に、世界を統べる神もおわします。そこに貴方がいらっしゃれば、この世界の均衡が崩れてしまう事位、お分かりでしょう。」

『…ああ、あの童^{わっは}の事か？ちゃんと許可を得てここにいるから、巫女が心配する必要はない。それに、ここは神官の作る虚構世界。影響を受ける事はあるまいよ。

それよりも、シイナの巫女よ。現状を、巫女は正しく理解しているのか?』

神が突きつけてきた鋭い尋問に、思わず息を詰める。

『巫女の推察通り、あの三人は巫女に巻き込まれてこの世界に来了。その上で、自らの意志でここに残る事を選び、力を求めた。巫女の子すべき事は、何だ?』

「…ここに、残ると、選んだ?」

聞き間違いであってほしいと、強く願った。しかし、神は容赦しない。

『自分たちが巻き込まれたと理解した上で、な。巫女よ、彼らは巫女が考えているよりもずっと強い。あれはおそらく、何を言ってももう引くまい。』

…それで？ 巫女の求めるものは、何だ。』

目を、強く閉じた。激しい自責の念を押さえ込んでから、神を真っ直ぐ見据えて、言った。

「…彼女達を、旭を、守る力を。貴方の協力を賜りたく、存じます。」

巻き込んでしまったのならせめて、傷つけない。この身が災いをもたらすのならば、その災いが彼らに降り掛かる前に、払いのける力を。その為ならば、神とだって契約を交わしても構わない。

——たとえそれが、禁忌に触れる事だとしても。

そう言うと、神は凄絶な笑みを浮かべた。

『契約を、結ぶか。この世界でも。』

その言葉に無言で頷いて、その場で跪いた。

「…我はシイナ。我、目の前におわします天御中主神と、契約を結ぶ事を祈り奉る。」

『我、天御中主神、シイナの巫女と契約を結び、巫女の願いが叶う

べく、我が力を貸し与える事を約束しよう。』

神の言葉が終わると同時に、凄まじい熱が体内を駆け巡る。目を閉じ唇を噛み締めてそれに耐えると、熱は首の周りに集結し、消えた。

目を開け見下ろすと、首には落ち着いた色調の石がぐると巡る首飾りが下がっていた。胸元に当たる位置には、ほのかに輝く翡翠の細いクロス。

『その首飾りが、巫女の力をこの世界に適応させる。そして、それを介して、我が力を貸し与える事も出来よう。…それにしても、よく耐えたな。二度目とはいえ、人の身に耐えられるものではないはずなのだが。』

クロスに軽く触れつつ、後半の言葉は無視した。

神の言葉通り、身の内に巡った熱はこの身を苛めた。悲鳴を上げる事も、のたうち回る事も出来ない程だった。それでも意識を保ったのは、逃げる権利など無いと考えたから、そして、ある事に気が付き、それどころではないと判断したからだ。

立ち上がり、刀印を結ぶ。目を閉じると、魔力の流れを感じた。流れをたどると、思った通りの魔法陣。

『ほう、気付いたか。力を付けたな、巫女よ。』

感心したように呟く神に、一度目を開け向き直った。

「私は私に出来る事をします。それでは天御中主神、失礼致します。」

『何かあったら、呼ぶがよい。私は巫女に責任があるからな。』

神の声がふと曇る。首を横に振ってみせてから、息を深く吸い込み、術を発動させた。

周りの世界がひび割れ、青い光が当たりに満ち始める。その中で、私ははっきりと言った。

「感謝しています、ご尽力いただいた事に。全ての元凶は、私です
から。」

返事を聞く前に、視界は完全に青く染まった。

一触即発

突如として閃く青い光に、私は我に返った。

いつの間にか、祈り場に戻っていた。儀式を始める前そのままの位置に突っ立っている。

「里菜…」

詩緒里に呼ばれて横を見る。いつもの顔がそこにあって、ほっとした。

よかった、戻ってきたんだ。

前を見ると、旭先輩もいた。更に安心感が強くなる。

続いて椎奈のいた所に目をやって——凍り付いた。

完全な無表情。その身から漂い出て来る怒気は、見るもの全てを震撼させた。

抜き身の刀のように冷酷な輝きを放つその目は、エリーさんを真っ直ぐ見据えている。

「…神官。何故こんな真似をしたか、答えてもらおうか。」

低く問いつめる椎奈の声を聞いて、息を呑んだ。一切の感情が抑制されたその声は、しかし、激しい怒りがにじみ出ていた。

「い、一体、何の事—」

「とぼけるな。儀式に使われる術が終わりに近づくと同時に、私達
の精神に干渉しようとしたな。」

耳を疑った。椎奈が続ける言葉が、やたらと耳に残る。

「元の世界に関わる情報を記憶から消す事で帰る手段を奪い、この
国に忠誠を尽くすように意識を操作。『勇者』という操り人形を得

ようとした、という訳か。」

エリーさんが目を見開く。その表情には、まぎれも無い恐怖とともに、凶星を指されたものの特有の驚きがあった。

「私は、そこにいるサーシャを通して言ったはずだ。余計な真似をすれば、容赦をしないと。口ただとでも思ったのか？」

笑みを含んですら聞こえる声でそう言って、椎奈が右手を握り込み、人差し指と中指だけを伸ばし、胸の高さに構えた。それは、昨日騎士の1人が攻撃の構えを見せた時と同じ姿。

椎奈の体から、目に見えない何かがゆらゆらと漂い出て見えた。

殺される、と思った。

エリーさんも、ここにいる神官達も、騎士も、王も、椎奈は躊躇う事無く殺すだろう、そう感じた。

止めなければ、そう思うのに、体は動かない。詩緒里も、攻撃されようとしている人々も、椎奈1人が放つ殺気にのまれ、一歩も動く事が出来なかった。

今、椎奈を抑えられるのは――

「なっ！」

椎奈が、まるでたたたらを踏むように、驚いた声を出す。急に視界を遮られ、敵が見えなくなったからだろう。

旭先輩が、左手で椎奈の目を覆い、椎奈の一步前に立ちはだかった。

「椎奈、落ち着け。」

「旭……」

「落ち着け。感情的になるな。」

旭先輩の静かな声に、椎奈は見る見るうちに落ち着きを取り戻していった。

当たりに漂う冷たい殺気が完全に消え失せる。エリーさんや神官達が、その場でへたり込むように腰を落とした。戦い慣れたはずの騎士達も、辛うじて立っている様子だ。

「この国の王よ。俺たちは、協力すると約束したはずだ。約束を果たした後、元の世界に帰る事は保証されると思っていたが？」

何事も無かったかのように問い掛ける旭先輩に、ようやく自分を取り戻した王が答えた。

「――すまなかった。君達が本当に手を貸してくれるのか、不安だったんだ。」

「こちらの自由を奪う理由にはならない。昨日椎奈が言った通り、俺達は無理矢理連れ去られた状況だ。その上帰れなくなるともなれば、協力する気も失せる。それくらいは理解できていると思ったが。」

淡々と相手を弾劾する旭先輩に、王が立ち上がり、王冠をとって頭を下げた。

「本当に申し訳ない。だが、その上で頼む。この国を、民を、救ってほしい。」

それを見た騎士や神官達が、慌てて跪き、王に倣った。

流石に調子が良いはしまいかと思ったが、彼らも必死なのだろうと自分を無理矢理納得させた。

「じゃあ、今後絶対、こんな事しないと約束して下さい。貴方達を疑ったりしたくはないけれど、今も椎奈がいなければどうなっていたか……。もうこういうのは、嫌です。」

「約束しよう。」

そう言って杖を取り出す王を、椎奈が止めた。

「貴様に魔術を使わせたくはない。旭の命を人質に取り、まだ満足しないのか。」

そう言って、握り込んだままだった右手を口元に当て、何事かを呟いた。

一筆書きの星が現れて、王の杖に張り付いた。

「貴様が私達に危害を与える、あるいは、元の世界に戻る可能性を揺るがそうとした時、その杖が貴様の最愛の者の命を奪う。杖を替えようと、替えた杖に効力は移る。覚悟しておく事だな。」

その言葉に、王が狼狽した表情を浮かべた。それを無視して、椎奈は踵を返し、祈り場を後にした。

出遅れた私達は、慌ててその場にいる人たちに頭を下げ、椎奈を追った。

距離（前書き）

ちよつと今回は重いですね。
ここからしばらく、シリアスな場面が続きます。

距離

「椎奈！」

呼びかけに、椎奈の返事はない。振り返る事すらせず、椎奈は廊下をひた歩く。

「椎奈、どうして―」

「話は後だ。」

里菜の言葉を遮り、椎奈はなお歩き続ける。

階段を下り、私達が止めてもらっている客室のある階よりも更に1つ下まで降りて、再び廊下を歩く。

今どこにいるのかも、どこへ向かおうとしているのかも分からないまま、ただひたすら椎奈の後を追った。

ようやく、椎奈は小さな扉の前で足を止め、周囲を確認するようなそぶりを見せてから、扉を開け、私達に入るよう促した。

中に入ると、先程の祈り場を小さくしたような部屋が目に入った。ただし、王様が座っていた位置に玉座は無く、周りよりも高くなっている。はいなかった。

「ここ、どこ？」

「神官達が普段、魔術の練習を行う為の場所。常に清めてあるようだな。」

問い掛ければ、知りたい事を教えてくれる。いつも通りの椎奈に、ようやくほっとした。

――先程、祈り場での椎奈は、本当に怖かった。自分に向けられた怒りではないのに、膝が震え、声も出ないほどだった。どうして

高校生になったばかりの彼女が、そんな迫力を身につけなければならないのだろう。怖いと同時に、悲しかった。

「椎奈、あそこまでする必要、ある？あれじゃ、椎奈のやっている事は、王様と同じだよ。」

里菜が椎奈を非難した。先程の魔術の事だ。やはり里菜は、あれが嫌だったらしい。どこか悲しげな顔をしていた。

「そうだ。」

けれど椎奈は、そんな里菜を真っ直ぐ見据えて頷いた。里菜が、ショックを受けた顔で黙り込む。

「私は、王がした事と同じ事をした。人の命に関わる魔術を行ったんだ、その程度の覚悟は王にも出来ている。どうも侮られていた節はあるがな。」

「けど、それを言ったらー」

無意識にそう漏らすと、椎奈がこちらを向いた。その目は、何の感情も映していない。思わず息を呑んだ。

「そうだ、同じ事をされる可能性がある。今私達が置かれている状況とは、そういうものだ。常に命の危機にさらされ、罠の気配に警戒する。「勇者」など、彼らにとって政治の道具でしかない。生き残りたければ、時には非情になる事も必要だ。」

「椎奈ー」

「これからも、こういう事は数えきれない程ある。直接その手で人を殺さねばならない事もあるだろう。古宇田、神門、そして旭。それを理解した上で、お前達は契約を結んだのか？」

「えっ……」

声を漏らしたのは、私か、里菜か。旭先輩は、黙ったままだ。

「何で分かったの？」

里菜の問い掛けに、椎奈が呆れた目を向けた。

「気付いていないのか？」

そういつて、里菜の手首を目で示した。つられて見てみると、里菜の手に、綺麗な青色の腕輪がはまっていた。自分の手首を確認すると、里菜のものよりも繊細な作りの、銀色の腕輪。刻まれた羽の模様が、うっすら光っていた。

「その腕輪から、古宇田と神門に魔力の供給がされている。そんな繋がりには、契約以外にあり得ない。」

冷たい声に顔を上げると、怒った顔をした椎奈と目が合った。背筋を冷たいものが這い上がる。

「二人は元々、何の力も持っていなかったはずだ。だが何を思ったのか、契約した相手はお前達に力を与えた。本来、力というのは、それを受け入れるだけの器を持つ者に現れる。適正も無く力を得るのは、危険だ。与えた方も与えた方だが、それを考えもせずを求める方もどうかしている。そして、先程言ったように、ここから先、血にまみれて戦わなければならないという事を理解していたとも思えない。」

昨日も言ったが、もう一度言う。古宇田、神門、手を引け。近いうちに元の世界に帰る方法も見つかるだろう。お前達は帰れ。」

「椎奈は、どうするの？」

答えは分かりきっていたけれど、聞かずにはいらなかった。

「私は残る。旭にかけられた魔術がある以上、な。解く方法が見つかればさっさと帰るが、あの魔術を解く方法は元の世界にも無かったから、望みは薄い。」

「…だったら、私も残る。私は私の意志で、ここに残って、戦う。」

里菜が強い口調で言い切った。真っ直ぐな目をした里菜を、椎奈は冷めた目で見やった。

「情に流された判断は身を滅ぼす元だぞ。大体、あの程度の魔術で動揺しているようでは、私としても足手纏いだ。」

「……っ」

その言葉を聞いた里菜は目を見開き、傷ついたような顔で俯いた。「古宇田の考えは正しい。だが、そのお人好しは諸刃の剣だ。これから先何が待っているのか分からない状況で、そんな危ういものを抱えたまま戦う事はできない。私にも、仲間の欠点を補って戦うだけの余裕は無い。古宇田が間違っているのではなく、その正しさを守ってやれる程の力が、私に無いだけだ。」

だからだろう、冷たい口調で告げられた言葉の意味に気付けなかったのは。

椎奈は、里菜や私が邪魔なのではなく、私達を守りながら戦う事は出来ないと言っているのだ。自分が力不足なのが悪いのだと。

「…でも、椎奈だって旭先輩だって、無事でいられる保証なんて無いんでしょ？ それなのに、見捨てて帰る事なんて、出来ないよ。」

言葉を探しながら懸命に言うと、椎奈はうんざりしたような顔で答えた。

「情に流されるなど言っただが？ 私はお前達が帰った所で、見捨てられたなどとは考えない。それでも気が済まないと言うのなら、この世界に来てからの記憶を全て消しても構わない。覚えていなければ、いらぬ罪悪感に囚われる事も無いだろう。」

「椎奈！」

珍しく旭先輩が厳しい声で名を呼んだ。けれど、椎奈はそれを無

視した。黙って、私達を真っ直ぐ見つめている。

あっさりと、全てを忘れれば良いと言われた。椎奈の秘密も、先輩の秘密も、ここであつた事も、全て。ショックで頭が真っ白になった。

――椎奈にとって、私達はその程度の存在なの…？

否定して欲しいその問いは、しかし、聞けば肯定が帰って来るだろうと容易に想像がついた。

3ヶ月の付き合いだけれど、椎奈は、私達には心を開いてくれたと思っていた。博識な椎奈に、何度も手を差し伸べてもらった。それなりに心を許してくれたのだと、信じていた。

でもそれは、所詮思い込みで。結局椎奈は、あまりにしつこい私達に仕方なく手を貸してただけだったのだ。

目頭が熱い。視界がにじんで、周りがぼやけて見えた。その中で妙に鮮明に見える椎奈の顔は、無表情で、私の涙に少しも心を動かされていないように見えた。

止められない激昂

『…否。シオリ、その者はお前達に、危険な目にあって欲しくないのだ。』

不意にミキの声が部屋に響いたかと思うと、腕輪の銀色の光が急に強くなった。光はやがて、ミキの姿になった。ただし、さっき見たときよりも小さい。

『リナも泣くな。私はリナの決意を尊重する。』

ユトウルナの声も聞こえてリナの方を見ると、ユトウルナもまた、やや小さい姿でリナの手をなめていた。

「誰だ。」

椎奈の短い誰何が響く。険しい目でミキを見据える椎奈は、また戦う姿勢を見せていた。

『我等は、この世界の精霊の主。シイナとやら、貴殿に危害を与えらるつもりは無い。』

ミキの返答に、椎奈はゆっくりと右手を下げた。視線をユトウルナに向ける。

「この世界の精霊の主だからその判断か？古宇田がここに残った所で、魔王を倒せる可能性が上がる訳ではない。無駄に古宇田を煽るな。」

『我はただ、この少女の決意を支えたと心に決めているだけだ。…しかし成る程、シイナと聞いてもしかやとは思ったが、貴殿がシイナの巫女か。』

ユトウルナの最後の言葉を聞いて、椎奈の表情が変わった。苛烈な眼光が精霊の主達を射抜く。

「：貴様、何を知っている。」

精霊の主を貴様と呼ぶその態度にはらはらしながらも、聞き慣れない呼称に戸惑った。

『我等は詳しくは知らぬが、我等の神は全て知っている。そうだな、人間。』

ミキに急に話を降られたのは、旭先輩。意味も分からないまま旭先輩の方を見たけれど、その顔からは、何を考えているかは分からなかった。

「どういう事だ、旭。」

椎奈の詰問に一度視線を投げ掛けた後、旭先輩はミキを見据え、静かに答えた。

「俺は何も知らない。だが、そちらがそう言うのならば、そうなのだろう。」

要領を得ない答えに、何故かミキは満足したらしく、椎奈に向き直った。

『シイナの巫女よ。我等は、この少女達の願いを叶えるべく、力を貸し与えた。1つ懸念を解消しよう。この者達には、我等の力を使いこなすだけの素質がある。巫女が思うような事にはなるまいよ。：その他の懸念は、解消できぬがな。』

この言葉に、椎奈の肩がわずかに揺れた。そんな椎奈を見て、ユトウルナがミキの話を引き継いだ。

『この世界にもたらされし、新たな脅威。今度の敵は今までとは違う。この新たな脅威に対して、シイナの巫女を始めとして4人も召還されたのには、必ず意味がある。天の定めに逆らう事に意味が無

いというのは、貴殿が一番知っておろう。』

「…黙れ。」

『この世界に招かれし、シイナの巫女よ。貴殿に選択肢はあるまい。それが分かっているからこそ、貴殿は—』

「黙れ！」

椎奈の叫びと同時に、ユトウルナの体に無数の赤い線が現れた。

「ユウ！！」

里菜が悲鳴を上げる。旭先輩が椎奈の右手を抑え、椎奈の視界からユトウルナを隠すように立った。

ユトウルナは里菜を制して、なおも言い募る。

『何を動揺しているのだ？貴殿で選んだ道筋だろう。情に流されるなどは、貴殿の言葉だ。』

「黙れと言っている！貴様に分かったような口を聞かれる筋合いも無ければ、古宇田や神門に私の事を告げる権利も無い！」

椎奈が叫び返す。再び前に出ようとして、旭先輩に押し戻された。

『…ああ、そういう事か。所詮貴殿も、自己憐憫に浸りたい愚か者という訳か。』

ユトウルナの蔑むような言葉を聞き、椎奈の激昂が急に収まった。静まり返った部屋の中で、椎奈は静かに口を開く。

「そこまで言うのなら答えろ。貴様は、契約がもたらす危険性について、古宇田達に説明したのか。」

ユトウルナもミキも、急に黙り込んだ。椎奈は更に言葉を重ねた。

「説明していかないだろうな。慣れない力の行使がどれだけ体力を削るかも、魔術を使うとき、一歩間違えば自らに跳ね返り死ぬ事も。私が自己憐憫に浸っているというならば、貴様らのそれは自己満足

だ。古宇田達の為ではない。」

目を見開く里菜を横目に見つつ、ユトウルナは答えた。

『そうかもしれぬ、そうでないかもしれぬ。だが、シイナの巫女よ。我等に契約を破棄するつもりは無い。契約の破棄には、両者の同意が必要である事は分かっておろう。貴殿に選択肢が無いというのは、そういう事だ。』

椎奈が齒を食いしばった。険悪な二人を宥めるように、ミキが真剣な口調で言った。

『我等も危険性は理解しておる。その危険は、我等が全て請け負おう。シオリに危害が加わらぬよう、約束しよう。』

『我也同じだ。それに引き比べ、巫女の覚悟はどうなのだ。リナに危害が及ばないと、貴殿こそ約束できるのか？』

「自分は契約相手を戦場に押し出しておいて、それを私1人のせいにするつもりか？」

相も変わらず喧嘩腰のユトウルナに、椎奈も厳しい口調で言い返す。ユトウルナのそばで、里菜が頭を抱えていた。

『言っただろう、危害が及ばぬよう、全力を尽くすと。私の力が及ばずリナが傷つくとすれば、それは巫女の――』

最後まで言い終える前に、ユトウルナが吹き飛び、壁に叩き付けられた。ミキが怒ったように羽を打ち鳴らす。

『巫女よ、やめよ！ユトウルナもだ！』

「……知っているか？契約は、両者の同意が無くとも、他方が死ぬ事によって破棄できる。縁も思い入れのない世界の大精霊が二人程いなくなるが、私には関係ない。そもそも私は、貴様らのような異形とこの先も行動を共にするなど、願い下げだったからな。好都合だ。まとめてこの世から消し去ってくれる。」

ぞっとする程冷たい声でそう言う椎奈は、先程よりも更に激しい殺気を漂わせ、制止しようと肩をつかむ旭先輩の手を振り払い、ユトウルナが良く見える位置まで歩を進めた。

『巫女よ、冷静になれ！その行動のもたらすもの位、分かっておろう！』

「椎奈、ユウ！やめて！！」

ミキと里菜が必死に制止しようとするけれど、椎奈もユトウルナも耳を傾けない。再び立ち塞がろうとする旭先輩を、乱暴に押しつけた。その力に、旭先輩は大きく体勢を崩した。

ユトウルナもまた、駆け寄ろうとする里菜を見えない壁で制し、身を低くして、いつでも跳躍できる姿勢になった。

構えた椎奈が、深く息を吸って、口を開いた。

止められない激昂（後書き）

詩緒里は固まったままです。…というか、この空気の中制止しようとする里菜と旭がすごいんです。

争いは未発に、そして

その時。

『―やめよ。』

救いの声が、降り注いだ。

厳かな声が響くと共に、椎奈から立ち上る殺気が嘘のように消えた。見えない何かに無理矢理押さえつけられたように、椎奈はその場で片膝をつく。その姿勢のまま、椎奈が顔を上げた。その端正な顔に、今まで一度も見つた事のない表情が浮かんだ。その表情は―驚愕。

『初めて会うな、シイナの巫女よ。我が名はミハエル。この世界の創世神だ。』

青色の髪に、綺麗な緑色の目の、若い男の人。その自己紹介に、もはや驚きを通り越してパニックになった。

ミキとユトウルナが、慌てたように頭を下げた。出遅れた私と里菜は、顔を見合わせ、どうするべきかと大慌てした。

『氣を使う必要は無いよ、異世界の少女達。我等の民の都合でここに来た者に、我を敬う理由も無かろう。』

神様の言葉に、どうしようかともう一度顔を合わせ、とにかく頭を下げた。

「あ、あの、初めましてっ。古宇田里菜です。そっちは私の親友で、

神門詩緒里です。」

「神門詩緒里です。」

慌てながらもまず名前を名乗り、私を紹介する里菜に、こんな時でも里菜は里菜だなあと、少し落ち着く自分がいた。

そんな私達を興味深げに見つめていた神様に、旭先輩が話しかけた。

「神よ、このような所に気安く現れていいのか。」

『問題ない。ここはきちんと「場」が作られている。』

「……………待って下さい。」

二人の会話に、椎奈が割って入る。やけにゆっくりと言葉を紡ぐ椎奈は、何かを恐れているように見えた。

「……………この世界の、神よ。これは、どういう事ですか。」

『随分と曖昧な問いかけをする。私が現れたのは巫女達を止める為だ。そして、後は巫女の考えている通りだ。』

椎奈の顔が蒼白になった。どこか悪いのではないかと心配になるような血の気の無い顔を、旭先輩に向けた。旭先輩の目をしばらく見つめ、それからゆっくりと視線を下げ、胸元で止めた。そこには、鈍く輝く銀色のクロスが、鎖に下がって揺れていた。

旭先輩は、そんな椎奈を無言で見つめている。

『シイナの巫女よ。それよりも今後の事だが、私もミキストリやユトウルナと同意見だ。ここに集まった4人は、それぞれの役目を持って、この世界に来了。今更引く事は出来ない。』

椎奈は、旭先輩から視線を外し、再び神を見上げた。血が通っているとは思えない色の唇から、言葉が紡がれる。

「役目、とは。」

『それは言えぬ。神の言葉が世界に大きな影響を与えてしまうのは、どの世界も同じ。』

シイナの巫女よ。ミキストリやウトウルナは、その場の気分で彼女達と契約を結んだ訳ではない。その星宿を視て、それに相応しいと認めた上での契約だ。彼らと、いや、巫女にとってはその少女達とという事になるな。彼女らと共に、進んではくれまいか。』

神様の言葉に、椎奈が一瞬目を閉じた。再び目を開いた時、その顔からは、何の感情も読み取れなかった。

「仰せのままに。」

抑揚の無いその言葉に頷き、神様はミキとウトウルナに向き直った。

『聞いた通りだ。お前達は、かの少女達を支え、巫女や彼とともに、己の役割を果たせ。』

『御意。』

ミキとウトウルナが同時に答えた。それに満足げな表情を浮かべた神様は、再び旭先輩に向き直った。

『我に用があるときは、ここか、先程の祈り場で我を呼ぶとよい。汝とは相性が良さそうだ。』

「そうか。」

短く頷く旭先輩に微笑み、神様はその場で消え失せた。

『シオリ、何かあったら呼ぶがよい。』

『リナもだ。いつでも呼んでくれ。』

そう言って、ミキとウトウルナも姿を消した。

後に残ったのは、4人と、気まずい沈黙。

「戻るぞ。私たちを捜している奴らが、そろそろここに来るだろう。」

」
椎奈が始めに口を開いた事で、少し空気が軽くなった気がした。
「そうだね。ねえ、椎奈。どうしてここが分かったの？」

場を明るくする為に聞いてみると、椎奈がぶっきらぼうな口調で答えてくれた。

「昨日、探査の術を使った。この城の地図は既に頭に入っている。」
「相変わらずの記憶力だなあ。じゃあ、道音痴の私は、椎奈の後ろをついて回らないと。」

里菜の明るい声―付き合いの長い私には、空元気だとすぐに分かったけれど―に、椎奈が溜息をついた。

「後で地図を書いてやるから、覚えろ。いちいちついて来られたら迷惑だ。」

そう言っただけで椎奈は身を翻し、足早に扉へと向かった。椎奈についていけないと迷うのは分かりきっていたので、急いでその後が続いた。いつもと変わらない態度を取る椎奈に、少し安堵を覚えながら。

争いは未発に、そして（後書き）

読んで下さっている方々、本当にありがとうございます！

作者は本当に未熟なので、これから温かく見守っていただけると、この上ない幸せです。

久しぶりの、おしゃべり（前書き）

ちょっとシリアスお休みです。

こういうときは、やっぱり里菜の出番ですね。

久しぶりの、おしゃべり

部屋に戻ると、サーシャさんが待っていた。

「お帰りなさいませ、コウダ様、カンド様、シイナ様、アサヒ様。昼食はいかがなさいますか。」

そう聞かれて、もうそんな時間なのだとようやく気が付いた。

虚構世界に行っていた？時、どれくらいの時間が経っていたのか全く分からないのと、さっきまではそんなことを意識する余裕すら無かったのとで、どうも時間感覚が狂っている。

でも、そう言われてみれば、確かにお腹が空いた。

いただきます、と言おうとしたけれど、椎奈の方が先だった。

「古宇田、神門、先に食べていろ。私は旭と話がある。」

返事も待たずに旭先輩の腕を掴み、椎奈に割り当てられた部屋へと向かった。

「えーっと…。」

2人つきりで話がある、というのは、何の不思議も無いんだけど、どうもこう、付き合っている男女の雰囲気が無いのは、どうなんだろう。

「里菜、どうする？」

詩緒里に聞かれて、我に返る。

「食べててって事は、まあ椎奈の事だから、時間が掛かるんでしょ。素直に食べてよっか。お腹空いたし。」

「…里菜、最後のが本音ね？」

凶星。付き合いが長いせいで、詩緒里に建前とかごまかしは通じない。まあ、私もその方が楽なだけだ。

「それでは、お二人の分を先に用意させていただきます。」

苦笑気味のサーシャさん。だって、お腹空くじゃない！

「「お願いします。」」

詩緒里と言葉が重なり、思わず顔を見合わせて苦笑する。

それにしても…。

椎奈は、旭先輩に何の話なんだろう。何となく、さっきの神様の事が関係している気がするけど。

あのときの椎奈の顔は、目に焼き付いている。強い衝撃を受けたような、そして、どこか痛そうな、顔。

心配だし、いろいろ聞きたい事はあるけれど、きっとそれは、立ち入ってはいけない話。椎奈が話してくれるまで、待とう。

「そう言えば、椎奈の首飾り、綺麗だったね。」

不意に詩緒里にそう言われ、急いで記憶を掘り返す。

ほとんどが物騒な椎奈とあの時の蒼白な顔で占められた記憶の中に、見慣れない、暗めの色の石を数珠つなぎにした首飾りがちらついていた。確か、旭先輩と同じように、クロスがついていたはずだ。

「うん、椎奈によく似合ってた。」

それは確かだ。大人びた椎奈に、あの首飾りはよく似合う。それを言うなら、旭先輩のクロスなんて、イメージにぴったりすぎて怖いけど。

そう言うと、詩緒里に苦笑された。その頬は、やや赤みが差している。姿を思い出して赤くなるなんて、本当に純情だなあ、と思う。ただ、それは口にしてはいけない事だ。だから、さりげなく話題を変えた。

「ねえ、午後はどうする？」

「うーん、城内を見てみる？」

「あ、良いね。じゃあ――」

お昼―スープとパン、サラダ。どれもあっさりめで、日本人の私には合う―を食べながら、詩緒里と予定を話し合った。ドアの向こうでは、どんな話をしているんだろう、と思いを巡らせながら。

久しぶりの、おしゃべり（後書き）

なんだかんだと、毎日更新ですね、私。どこまで続けられる事か…。あれですね、書ける時に書いておこうというものです！

禁忌と、それぞれの覚悟

部屋のドアを開け、旭を中に放り込む。ドアを閉め、こちらの様子を探られないよう、術を使って完全に遮断した。

振り返る。勢い余って転んだらしい旭が、静かにこちらを見上げていた。その冷静さが、更に私の怒りを煽る。

「説明してもらおうか。」

「何をだ。」

「誤魔化すな。」

立ち上がりながら聞き返す旭に、一步詰め寄った。そのまま掴みかかりたい衝動を全力で抑え、震える声で問いつめた。

「何故、神と契約などした…！」

人が神と契約をするのは、禁忌だ。確かに、人を創るものである神と契約すれば、願いを叶えるだけの力を得るだろう。だが、そもそも、絶対的な立場のものと創られたものが契約関係を結ぶなど、許されるはずが無い。キリスト教やユダヤ教では、神と民が契約を結んだが、それはあくまで信仰の規律を保つ為。個人の願いの為に契約することは、あってはならないことだ。

それを無視して契約を交わせば、歪みが生じる。その歪みは、当然非力な人間に襲いかかる。大抵の人間はそれに耐えきれず、契約の際に死ぬのだが、生き残ったものは、生き筋が変わる。一生を神に捧げたようなものなのだから当然だが、歪められた生き筋は、人には重すぎる運命をもたらす。たかだか人間の願いを叶える為には、重すぎる対価だ。

旭は、それを知っているはずだ。知っていて、禁忌を犯した。それは私にとって、許容できない事実だった。

「何故だ。答えろ、旭！」

黙ったままの旭に、堪えきれずに大声を出した。

旭の答えは、簡潔で、迷いの無いものだった。

「必要だからだ。」

「な……」

「俺は椎奈と違って、こちらの世界では力を使えなかった。椎奈の力もある程度の制限を受けていたようだが、俺は全く駄目だった。そして神は、契約すればこの世界で力を使えるように出来ると言った。だから契約した。」

淡々と説明する理由は確かに筋の通ったものだったが、納得するわけにはいかなかった。

「旭、神との契約は禁忌だ。それくらい知っているだろう。どれだけ重い対価を支払うのかも、分かっていたはずだ。旭がしたのは、欲しいものがあるからと人を殺すようなものだ。人を殺すということとの真の重さを、知っていてな。そんな理由で、旭はそんなことをしたのか。」

「それは椎奈も同じだろう。」
「っ！」

間髪入れずに返ってきた反論に、息を呑んだ。

「その首飾りの意匠は、神と深い関わりを持つ証。力の流れを見れば、契約の証である事くらい、俺でも分かる。自分も禁忌を犯して

おいて、他人を非難するのか？」

「：私は、かつての世界で結んだ契約を、この世界で結び直しただけ。今更変わらない。かつての世界で望んだものは、対価を支払って余りあるものだった。だが、旭は違うだろう。」

「椎奈、契約を結んだ相手は、向こうの世界の神なのか？」

「ああ。ミハエルと言ったか、あの神に許可は得たらしい。それにあれは虚構世界。影響は無いそうだ。」

旭の懸念―私が抱いたものと同じだ―を解消してから、話を戻した。

「私のことはどうでも良い。旭、神との契約を、ただ力が欲しいからと言う理由で望むなどという愚行、旭らしくない。何を考えている。」

そう言うと、旭は1つ息をついた。私の目を真っ直ぐ見つめたまま、旭は。

「俺は椎奈との約束を守る為に、力を求めた。」

言っではならないことを、言った。

胸に強烈な痛みを覚えた。何か言わなくてはと思うのに、言葉が出て来ない。

「俺は椎奈の側に居続けると、決して消えたりしないと、約束した。前に言われたな、椎奈といえることは常に命の危険に晒されているのと同義だ、と。俺もそれは、今までである程度理解したつもりだ。少なくとも、自衛の手段も持たずに、約束を果たすことは出来ない、

という事位はな。王の魔術がある以上、俺がこの世界に残ることは決定事項だ。椎奈も残る気でいるのは、見れば分かった。ならば、椎奈の側にいる為には、力が必要だ。この世界で使えない俺の力が、神との契約で使えるようになるのなら、俺は迷わず契約を結ぶ。俺にとって、椎奈との約束は、禁忌を犯すよりも、重い。それだけのことだ。」

「…馬鹿、野郎。」

そんなものの為に。私などとの約束の、私の弱さのせいで拒めなかった約束なんかの、為に。彼は、旭は、禁忌を犯したと、言うのか。

———こんな、生きる価値もない、化け物の側にいる、為に。

「……こんなことなら、約束など、しなければよかった。」

手遅れだと分かっている、後悔せずには、自分を責めずには、いられなかった。

旭が残らなければならぬなら、自分だけでも帰るべきだった。その方が彼は安全だ。いや、旭が力を使えないと気付いていたなら、王と約束などさせなかった。それ以前に、約束などしなければ、そもそも旭はここに来ることすら無かった。

私が帰っていれば。気付いていれば。約束しなければ。

———私さえ、いなければ。

「椎奈。」

呼ばれて顔を上げると、旭がすぐ側に立っていた。名すら無い、私の、すぐ、側に。

「言ったはずだ、俺はお前が欲しいと。俺は俺のエゴで、椎奈との約束を取り付けた。だから、この契約は、俺が俺のエゴを通す為のものだ。椎奈が自分を責める必要は無い。」

違う。激しく首を横に振った。肩にかかった、温かい手を、どける。

『俺はお前が欲しい。』

その言葉は、その手は、私が欲しかったもの。けれど。

「…ソレに近づいたものは、不幸になる。ソレは、災い。ソレに近づいてはならない、心を向けてはならない。近づけば、心を向ければ、災いが降り掛かる。」

何度も言われ、忘れまいと心の中で繰り返したその言葉を、口ずさんだ。

「椎奈―」

「私は、化け物だ。化け物と結んだ約束など、守らなくて良い。守るべきじゃ、無い。」

「椎奈、それは違う。」

「違わない。私は、名前を捨ててようやく人の振りを出来るようになった、化け物だ。」

…けれど、旭が禁忌を犯したというならば。私は、旭を守る。これ以上、旭の人生をめちゃくちゃにしてたまるか。」

「椎奈！」

今日は、2度も旭が声を荒げるのを聞いた。本当に珍しい。だが、それ以上耳を貸すつもりも無かった。

「…過去は変えられない。旭の結んだ契約も。ならば、未来を変えてみせる。本当は、私がいなくなるのが一番だけど、神に残ると言った以上、ここに残るしかない。だから、せめて旭達の災いを、私が受け止める。」

それは、決意。それは、宣言。

誰にも撤回などさせない。それが、私に出来る唯一のことだから。

「旭。死ぬな。」

その言葉にありったけの想いを込めて、私は部屋を去った。

禁忌と、それぞれの覚悟（後書き）

今回はかなり重いですね、すみません。
次は少しほのぼのした感じ…かな？

届かぬ想い（前書き）

今日はいろいろあって、更新が少し遅くなりました。すみません。
重いのはここで一旦終わりです！長かった…

届かぬ想い

目の前で扉が閉まるのを見て、息を吐き出した。

「…全く、お前は。」

初めて会ったときから、少しも変わらない。

「何故、何もかも1人で背負おうとする。」

何をして、裏目に出てしまう。少しでも力になりたくてとった行動は、ことごとく彼女が抱え込んでしまう。

『ソレに近づいたものは、不幸になる。ソレは、災い。ソレに近づいてはならない、心に向けてはならない。近づけば、心に向ければ、災いが降り掛かる』

まるで呪いのようなその言葉を聞いたとき、自分がどれだけ何も知らないのか、思い知らされた。

だが、それでも。

「お前が何であろうと、どんな過去を抱えていようと構わないと、それでも共にありたいと、言っただろう。」

全てを受け止めると、だから共に来いと。それに対して、頷いたのは、椎奈自身だ。

「それで出て来る言葉が、約束を守るべきじゃない…か。」

どれだけ自分を追いつめれば、気が済むのだろう。

「俺はお前に、人生をめっちゃめっちゃにされた覚えなど、無い。」

むしろ、俺は――

ノックの音で我に返った。ドアが開く。

古宇田と神門が、おそろおそろといった様子で、顔を覗かせた。

「あの…。お昼、食べます？」

「椎奈は？」

古宇田の問いに問いで返すと、2人は顔を見合わせた。

「出てっちゃいました。あの、止めた方がよかったですか？」

「止めても止まらないだろう。」

「…確かに。」

苦笑いを浮かべる古宇田に、再び聞く。

「昼食はまだあるのか？」

「え、はい。それで、食べるならもう少し下げないまま置いておくと、サーシャさんが。」

妖―この世界では魔物と言うべきか―からの言伝に、軽く頷く。

「俺は貰う。椎奈の分は、いらないだろう。」

「じゃあ私達、城内探検してるので。」

そう言って2人は再び顔を引っ込めた。

道が分からないのではなかったのか？と思ったが、気にしないことにした。

もう一度息を吐き出し、椎奈の部屋を後にした。

届かぬ想い（後書き）

重いというより、ひたむき……？
どうも適切な言葉が思い浮かびませんが。
とにかく、旭は一途です。

聡明な少女（前書き）

今日はちよつと早めに更新です。
雰囲気も少し変わる…かな？

聡明な少女

城の中庭に出る。昨晚出た所とは違い、観賞を目的にした庭なのか、随分と花が多かった。

深呼吸を繰り返す事で、身の内にある重いものを吐き出す。

今、後悔や自己嫌悪に陥っている余裕は無い。旭が死なない為に必要なものは、力。それはどうしようも無い事実だ。そしてそれは、古宇田や神門も同じ。だから彼らは、契約した。―そして、私も。ならば、これからすべき事は、訓練だ。古宇田や神門はそもそも魔術の知識が皆無だし、力を制御する方法すら知らない。旭はその点問題無いが、魔術だけでは生き残れない。武器を手にして戦う術を、彼は持っていない。それは古宇田や神門も同じ。つまり、魔術の習熟と、武術の修得が必要という事だ。

「本当に、それまでこの国は持つのか？」

魔術は才能次第で、人によっては力に目覚めた瞬間から使いこなせるが、武術は長期の研鑽があって初めて使えるものになる。2、3ヶ月やそこらで何とかなるとも思えない。

「最悪、魔術による後方支援に止める…か。」

だが、それはかなり危険だ。少なくとも、術と共に武術を学ぶのが当然だった私には、無茶としか思えない。

「…彼らを、傷つけない。傷つくのは私だけで良い。」
もし、彼らが傷つく可能性があるのなら、その時は――

「…そこにいるのはどなた？」

思考が負のスパイラルに落ち入りかけたのを止めたのは、茂みの影から投げ掛けられた幼い声だった。

振り返ると、フリルの多い、だが決して嫌みにはならないドレスを着た少女が、丁度姿を現す所だった。

「尋ねる前に自分が名乗るのが、礼儀だと思うが？」

そう言うと少女は一瞬目を丸くしたが、すぐに淑やかな笑みを浮かべ、淑女の礼をした。

「名乗り遅れました、申し訳ありません。私はエルド国の王、ライアスⅡデルⅡエルドの第一皇女、ソフィアⅡミアⅡエルドと申します。」

礼儀正しい相手には、礼を尽くしなさい。懐かしい声が耳元で聞こえた気がして、私は反射的に胸に手を当て片膝を付き、頭を垂れた。

「これは失礼致しました。このたびこの世界に召還されました、椎奈と申します。」

「あら、これはご丁寧にありがとうございます。でも、そんな事をする必要はありませんから、立って下さいな。」

ソフィアはにっこり笑って立つように促して来る。失礼にならないよう、ゆっくりと立ち上がった。

「シイナ、というのね。父上から聞きました、凄い力の持ち主だと聞いた通りでしたわ。こうやって近くにいただけで、気圧されてしまいそう。」

そう言いながらも、ソフィアに気後れしている様子は見受けられない。見た所10歳程だが、落ち着いた物腰と大人びた口調には、

風格すら漂っていた。

「力を制御し切れていない未熟者だけです。王女にご負担をおかけしてしまい、申し訳ございません。」

軽く頭を下げると、ソフィアは小さく首を傾げた。

「どうしてそんなに礼儀正しいのですか？私は貴方よりも年下ですし、無理矢理連れ去った国の王女に、敬意など持つはずも無いでしょう？」

聡明な少女だ。あの傲慢な王から生まれたとは、とても思えない。こういう少女の疑問には、誠意を持って答えねばなるまい。

「それは、王女が私に丁寧に接して下さるからですよ。私は、礼儀正しい相手には、誰であろうといくつであろうと、礼を尽くすようにと教わりましたから。」

「素敵なご両親ですね。」

そう言ってソフィアはにっこりと笑った。悪意は全くと分かっているからこそ、その言葉は胸に突き刺さった。

「ですが、これでは堅苦しくて仕方ありません。堅苦しい言葉使いはもう飽き飽き。どうか、シイナが一番慣れた言葉遣いで話して頂戴。」

意識して表情を作っていたため、こちらの内心は悟られなかったようだ。代わりに、言葉遣いを変えるように要求されてしまった。それもわざわざ、砕けた口調で。

少し迷ったが、10歳の少女にそこまで気を使われては、従うしかないまい。

「分かった。」

頷くと、ソフィアは嬉しそうな顔になった。そのまま私の手を取り、近くの石に腰掛け、私にも座るよう促した。

聡明な少女（後書き）

すみません、変な所で…
中途半端に長くて、切りづらいんです。

会話と慰め（前書き）

：流石に、前回の所で切るのは、読んでいる方に申し訳ないので、石を投げられないうちに更新しました。

会話と慰め

「シイナ、向こうの世界はどんな風なの？」

待ちきれないという風に、ソフィアが問いかけてきた。

返答に詰まる。この少女に、私のような血にまみれた、裏の裏を生きているものに、何を教えろというのか。

少し迷って、無難な答えを選んだ。

「そうだな、こちらの世界は、国によって随分違う。言葉も歴史も文化も違うから、一概には言えないが…、私の住んでいた国では、王はいるにはいるが、政治に口を出す事はない。国の象徴として祭り上げられている。」

「じゃあ、誰が政治を行うの？軍？」

目を丸くして尋ねるソフィアに、首を振ってみせた。

「いや、国民が選んだ複数の代表者が、話し合いで決める。それに、国の要となる決まりを変える時には、国民に賛否を問う。」

「どうやって？」

「成人したものが、選んだ代表者や賛否を紙に書いて、役人に出す。役人がそれを集計して、多く賛同を得た意見のみが通される。」

専門用語を避けたとはいえ、小学5年生に議会制民主主義を説明した訳だが、ソフィアは苦もなく理解できたようだ。

「でも、それって凄い数のはずだわ。何日も掛かるんじゃない？」

「いや、半日も掛からない。」

「どんな魔術を使っているのかしら。」

その言葉に、首を振ってみせた。

「私達の世界では、魔術は公には認識されていない。私の知っている限りでも、そういう魔術は無いな。」

「魔術が、知られていない？では、シイナはどこで学んだの？」
触れられたくない所を指摘され、返事が一拍遅れた。

「：同じ術者に教わった。私達の世界は魔術が普及していない代わりに、科学が発展している。」

「カガク？」

強引に話を戻したが、幸い、聞いた事も無い単語に気をとられてくれた。

「そうだな、魔術無しで魔術が出来るような事を可能にする。薪を使わずに火をつけたり、食べ物や冷やす事で保存したり。」

だが、余りこの世界に影響を与える知識を教える訳にもいかなないので、曖昧な説明に止めた。

「同じように、計算も短い時間で出来るのね。」

「そう。」

この賢い少女は、それをすぐに理解したようだ。追求して来る事は無かった。

「……………椎奈、何してんの？」

不意に声を掛けられ振り返ると、驚いた顔をした古宇田と神門がこちらを凝視していた。

「見て分からないか？話をしている。」

「や、そーだけど。何か随分親しげだね。」

その指摘に、多少後悔した。確かに、年に似合わぬ聡明さに興味を持ち、私にしては関わりすぎた。ついさっき、旭と関わりを持ちすぎてしまった事に後悔したばかりだというのに。

そこまで考えて、先程まであれほど重かった気分が軽くなってい

るのに気が付いた。後悔も、焦りも、嘘のように静まっている。

「たまたま会ったから、少し相手をしていただけ。親しげと言われる程ではない。」

古宇田、神門、こちらはソフィアⅡミァⅡエルド、この国の第一皇女。王女、リナ・コウダとシオリ・カンド。私と同じくこの国に召還された2人だ。」

紹介すると、古宇田と神門は慌てたように頭を下げた。

「初めまして、古宇田里菜です。」

「神門詩緒里です。」

「初めまして、リナ、シオリ。私の事は、ソフィアと呼んで下さいな。」

ソフィアも、丁寧に礼をした。

「で、古宇田達は何をしている？」

「城内探検、のはずだった。」

「…迷ったのか。」

「ご名答♪」

「地図を書くまで待てなかったのか…」

堂々と言い切る古宇田に、溜息をつくしか無かった。

「我が国の城は、侵入を防ぐ為に、迷うような構造になっているから、無理も無いわ。」

ソフィアが笑いながらフォローした。

「ついかな、残念。昼食は下げちゃったからね、夕食まで諦めなさい。」

古宇田の言葉に、肩をすくめてみせる。

「私はそもそも昼食は食べないからな、問題ない。旭は？」

「椎奈、体に悪いよ…。旭先輩は、私達が出て行く時にお昼を食べ始めたはず。今どこにいるかは、分からない。」

神門の忠告を無視し、ソフィアに振り返った。

「私はもう、彼女らと部屋に戻る。王女も、抜け出してきたのだろう？ そろそろ戻らないと、探していると思うぞ。」

「…ばれてたのね。」

「護衛も侍女も連れないで歩く王族がどこにいる。」

ソフィアが首をすくめた。

「じゃあね、ソフィアちゃん。道覚えたら、またここに来るから、その時會おうね。」

古宇田が手を振った。神門もそれに従う。

「ええ、楽しみにしているわ。…シイナ。」

手招きされたので、かがみ込む。耳元でソフィアが囁いた。

「少しは、気が晴れた？ 最初声を掛けた時、随分落ち込んで見えたけど、大分顔が明るくなったわ。」

驚いてソフィアの顔を見ると、にっこりと笑い返された。

「魔術は使えないけれど、昔からそういうのは何となく分かるの。少しでもましになったのならよかったわ。」

「…参ったな。」

本当に参った。まさか、10歳の少女に慰められるとは。

しっかりせねばと自分を叱咤して、私は立ち上がった。

「またね、シイナ。リナとシオリも。」

「待たねー！…って、こら椎奈、ちゃんと答えてあげなさいよ。」
返事をせずに歩き出した私を、古宇田が見とがめた。

「古宇田、彼女は王女。余り心を許すな。」

「そんな、子供相手に…」

眉間にしわを寄せる古宇田に、忠告する。

「子供と侮ると、痛い目に遭うぞ。少し話をしただけだが、かなり頭の回転が速い。気を抜くと、こちらに不利な情報まで開示する事になる。」

「でも椎奈、楽しそうだったよ。」

神門が、小さな声で言った。目を向けると、視線を彷徨わせながらも、言葉が続けた。

「椎奈があそこまで話してるの、珍しい。それも、初対面なのに。」

痛い所を突かれた。確かに少し、無防備過ぎた。ああまで気を許すのは、自分の為にも、相手の為にもならない。距離を置き、知人やクラスメイト程度に止めなければ、取り返しのつかない事になる。――旭のように。

再び後悔が襲ったが、何故かソフィアの笑顔が浮かび、負の感情が掻き消えた。

「…彼女は、情動操作系の魔術師だな。まだ覚醒はしていないが。眩きを耳聴く捉えた古宇田と神門が、感嘆の声をあげる。

「凄いな、覚醒もしていない魔術師の事まで分かるんだ。」

「だから椎奈を手なずけられたんだあ。」

「古宇田、いつ私が手なずけられた。ただ話をしていただけだと言っている。」

そう言って、立ち止まった。目の前には、私達の部屋の扉。

「うわ、もう着いた。あれだけ歩いたのが嘘みたい。」

古宇田の眩きを黙殺して、扉を開け、中に入った。

会話と慰め（後書き）

王女は可愛いです。椎奈はその無防備さと聡明さにうっかり気を許してしまいました。

魔術書と地図（前書き）

椎奈と旭がさりげなく目立っています。

魔術書と地図

部屋に入ると、真っ先に旭と目が合った。下手に言葉を交わしたくなくて、目を逸らした。

旭はそんな私の様子など気にも掛けず、声を掛けてきた。

「椎奈、サーシャからの伝言だ。訓練は明日から行うと。」

「分かった。…それは何だ？」

仕方なく返事をして、旭の手元の本の山に気が付いた。

「サーシャに持ってきてもらった、この世界の地誌と、魔術についての書だ。」

「……旭先輩、まさかそれ、ずっと読んでたんですか？外にも出ずに？」

古宇田の呆れ気味な問いに返ってきたのは、無言の首肯。

「読み終わったものを読んでも良いか？」

「ああ。」

手渡された2冊を受け取り、自分の寝室に向かおうとした。

「ここで読め、との事だ。」

だが、旭の言葉に行動を中断する。

「何故？」

「魔術書が部屋に与える影響が強いからだ。開いてみれば分かるが、どの本も強い魔力が込められている。寝室で読むには適さない。」

言われて開いてみると、確かに魔力の波動を感じた。この強さでは、中途半端な知識で臨んだり、魔力を敏感に感じ取るものが読んだりすれば、正気を保てないだろう。おそらく、神官達は何らかの魔術を自分に掛け、影響を受けないようにして読んでいるはずだ。

そんなものを貸す方もどうかしているが、何の対処もせず平然

と読んでいる旭も旭だ。やはり、魔への耐性が桁違いに強い。

「古宇田達はしばらく読むな。これは、ある程度魔術を学んでからで良い。」

そういつて旭の座るテーブルに腰掛け、私も読む事にした。

「：えっと、私達は夕食まで、何をしていれば良いのでしょうか？」
「自分で考えろ。」

古宇田のわざとらしい問いかけ―何故あんな言い方をするのかは分からないが―に、当然の答えを返すと、古宇田は本を取り上げてきた。

「読むな！」

慌てて取り返すと、据わった目で言い返してきた。

「城内見て回りたいから、先に地図書いて。」

確かにそういう約束はしたので、仕方なく本を閉じる。

紙を捜そうとすると、旭が手渡してきた。

「これは？」

「サーシャに貰っておいた。」

：地図を書くと言っていたのを、覚えていたらしい。

あれだけ拒絶した後でここまで気を使われると申し訳ないが、素直に好意は受け取っておく。

紙を見ると、本に使われているのと同じものだった。つまり、魔力に対して耐性があるという事だ。

刀印を結ぶと、神門が横から尋ねてきた。

「前から気になってたけど、それ、何？」

「刀印と言って、術を発動するときに組む。詠唱は時に省略できるが、これを省略する事は出来ないな。」

それを誰かから学ぶ事無しに成し遂げた男がここにいるが、とりあえずは言わないでおく。

「だが、この世界では杖を使う事が多いようだな。人によって必要なものは違う。私が刀印だったというだけ。」

「ありがとう。ごめんね、邪魔して。」

首を振って神門の謝罪を受け流し、紙を刀印で指した。昨日調べた城内の構図と、立ち入らない方が良い場所を頭の中で描く。真っ白だった紙に、頭の中で浮かべた通りの地図が浮かび上がった。

「便利…。」

「凄い…。」

感心しているらしい古宇田達に地図を手渡す。呆れている雰囲気
の旭は無視。

「この×印を付けている所には近づくな。図書室は行くのは良いが、まだ本に触れるな。後は好きにしろ。」

「分かった。ありがとうー！」

やたらと明るい声で礼を言い、古宇田達は再び城内探索へと向かった。

魔術書と地図（後書き）

…ええ、ずれてますよね。特に椎奈。気まずかった割に、本の魅力に負けてます。

何故旭が呆れていたのかとかは、いずれ。

新たな決意（前書き）

今回は2人の大事な話です。
上手く書けているといいのですが…

新たな決意

2人が出て行った後、気まずい沈黙が訪れた。

「椎奈。」

そのまま読書に逃げ込もうした所で旭に呼ばれ、諦めて顔を上げる。

私の目を真っ直ぐ見据える旭の目には、怒りも失望も無い。ただひたすらに冷静で、真摯な瞳。

「俺は言った。お前が何者であろうと、俺は、お前に近づく事で起るであろう全てを受け容れようと。その上で、お前が欲しい、俺は決して、消えたりはしないと。椎奈もそれを受け容れ、側にいると約束した。違うか。」

「…違うない。」

2ヶ月前に言われた言葉だ。忘れるはずが無い。いや、一生忘れる事は無いだろう。

その言葉に、その強さに、その真摯な想いに惹かれて、私は旭の側にいると約束した。それが、彼を地獄に突き落とす所行だと、分かっていたのに。

「約束を破る気など無い。お前が抱えているものなど、俺は知らない。それで構わない。無理に聞こうともしない。だから、…約束などするのではなかったなどと、言うな。」

静かに言われて、堪えきれずに俯いた。

薄々は勘付いているだろう私の過去を、それでも聞こうとしない

というその優しさに。冷静さを失いかけた時、止めてくれるその手に。際限なく甘えてしまっていると、自覚している。

分かっている。約束にしがみついているのは、自分の方だ。

――それでも。

「…怖いんだ。」

漏らすのは、消えない感情。

「消えないと、言ってもらっても。いつか、旭がどうしようも無くぼろぼろになって、消えてしまうのではないかと。」

彼の言葉を信じると決めたのは、私なのに。それ以上に、己の背負う業の深さが、彼を飲み込んでしまいそうで。

「旭は、怖くはないのか？こんな、…化け物と一緒にいて。いつ命を奪われるか分からない日々を、送っていて。こうして巻き込まれて、禁忌まで犯すはめになって。…これからも、何があるのか、分からないのに。」

離れてしまえば、旭は、こんな目に遭う事は無いのだ。

「私さえいなければと、私から離れたいと、どうして思わない。」

答えを聞くのが、怖い。顔を上げる事が出来ない。

目を閉じる私の耳に、静かな声が滑り込んだ。

「俺は、お前と共にありたい。その為なら、どんな代償を払っても惜しくない。」

その声が紡ぐ言葉は、独りでいるべきだ、彼から離れるべきだという決意を揺るがせて。胸の奥で、何かが動いた。

それは、ずっと前に諦めたもの。―他者を求める心。

「生きるというのは、それ自体がリスクだ。人はそのリスクを意識しないが、常に危険に晒されているのは誰もが同じ。俺は、椎奈と共にいる事で、それが少し顕著なだけだ。怖がる理由など、無い。」

迷いの無いその言葉に、顔を上げる。旭の目を見て、どきりとした。

深い湖の水面のようなその瞳に、微かに見えるのは――虚無。

旭と出会った頃、よくその感情が彼の目に現れていたのを思い出す。いつのまに、彼はその色を映さなくなったのだろう。

「これから何があるのか、分かるものなどいない。神すら時に、未来を読み違える。そんなものに恐怖する程、俺は愚かではない。」

すぐに虚無を消した旭の目は、先程よりも強い意志の光を湛えていて。私の持つ闇を掻き消してくれるのではと幻想を抱く程、美しかった。

「旭……」

胸が詰まって、言葉が出て来ない。

「俺が消えないと言い切るのは、確かに根拠の無い事だ。だが、約束というのも、そもそものが根拠の無い、単なる未来への期待。だが、俺が椎奈を想う気持ち、約束を守ろうとする意志が、揺らぐ事は無い。…たとえばお前が、俺を拒絶したとしても。」

息が止まりそうになる。

それでも、私は。彼から距離を置く事など、拒絶する事など、本当に出来るのだろうか。

「軽々しく、化け物などと言うな。椎奈は、人間だ。そんな事、椎奈が1番分かっているはずだ。」

何故、旭は。これほどまでに、私が欲しい言葉を投げ掛けてくれるのだろう。何故、これほどまでに、私の虞れを鮮やかに切り裂くのだろう。

「1人で抱え込むな。俺に出来る事は少ないかもしれない。だが、何もかも自分のせいにして、独りになろうとするな。俺と共に、来い。―側に、いてくれ。」

最後の言葉に込められた感情を、読み違はずも無く。

旭はそれきり何も言わず、私の答えを待っている。

目を閉じ、自分に繰り返し問いかける。

後悔しないか。その罪を、本当に理解しているか。罪を犯す、覚

悟があるのか。

私の中の理性が囁く。旭の事を本当に想うのならば、これ以上彼が不幸になる前に、離れるべきだと。それが正しいのは、誰よりも私がよく分かっている。

——けれど。何度そう言い聞かせても、私の心は、差し伸べられた手を求めている。たとえその罪を背負う事になろうと構わないと、それでも旭を失いたくないと、ただひたすら願っている。

——ああ、全く。いつから私は、こんなに愚かになったのだろう。：こんなに、旭を好きになってしまったのだろう。

目を開ける。ずっと私を見つめ続けていたに違いない旭に、小さな声で言った。

「きつと、これからまた、旭を危険な目に遭わせる。大怪我をさせるかもしれない。旭の大切なものを奪うかもしれない。：旭が、消えてしまうかもしれない。全て、私がもたらす災い。私の罪だ。」

一度言葉を止め、勇気を奮い起こした。声が震えないよう、喉に力を込める。

「：それでも、旭が私を求めるというのなら。側にいる事を、許してくれるのなら。……私も、旭の側にいたい。罪を犯してでも、旭と共にありたい。」

ようやくそこまで言い切って、私は下を向いた。情けない話だが、これ以上、旭の顔を見る勇氣はなかった。

かたりと、椅子を引く小さな音がした。気配が近づいて来る。それでも顔を上げる気にはならない。

不意に頭の上に、暖かいものが乗せられた。驚いて、反射的に顔を上げてしまう。旭と視線がぶつかった。

旭はその目に、常には無い、優しい光を宿して、私を見つめていた。今まで見た事の無いその視線に、何故か慌てている自分を自覚。

「…お前1人に罪を背負わせるつもりは無い。椎奈が背負っているものを、恐れているものを知った上で、椎奈を求めているのだから。椎奈が俺の為に罪を犯すというならば、俺も同罪だ。言っただろう、1人で抱え込むなど。」

「でも…」

「俺は、椎奈の側にいられるだけで良い。だから、自分1人を責めるな。」

そういつて旭は、私の頭をゆっくりと撫でた。くすぐったさに首をすくめながら、黙って頷く。

本当は、もっと言いたい事がある。旭の言葉にどれだけ救われたか、私が彼に、どれだけの想いを抱えているか。伝えるべき事は、何一つ言えていない。

けれど、こんなときばかり、言葉が見つからない。何を言って良いのか、分からなかった。…そんな言葉を、習う機会も、必要も、無かったから。

出て来るのは、こんな言葉だけ。

「…子供扱いするな。」

「ああ。」

そう言いながらも、頭を撫でる手は止まらない。されるがままに、私は、心の中で呟いた。

——なあ、旭。旭は、私の過去を知っても、こうして側にいてくれるのだろうか。私が、今までどれだけの命を奪ったのか、その惨さを、罪深さを知ってなお、私を恐れないでいてくれるのだろうか。

疑問の形をとりながらもそれは、祈りとなって私の中で反響した。

新たな決意（後書き）

あのーですね、作者は恋愛は経験が無いので、きっとこう、ずれているとは思いますが…。寛容な心で見守ってやって下さい。出来ればアドバイス待ってます。

私的には、よくもこの2人はこういう事を照れも無く言えるものだなと思います。

助力と、保留（前書き）

一気に真面目さが大暴落します。
…里菜ですからね……

助力と、保留

道を間違えたみたいです。

「マズいよね…。」

「…来ちゃ駄目だって、言われた所だね。」

詩緒里と顔を見合わせる。

「怒られるよねえ…。」

溜息が漏れるのを、止められなかった。

辺りを見回す。空気が淀んでいて、いやな感じ。一体どうしてお城の中に、こんな所があるのだろうか。

そこは、がらんと広い部屋。けれど、壁にはなんだかよく分からない道具がたくさんかかっているし、床はあちこちに黒っぽいシミがあるし、とにかく不気味なのだ。

今すぐもとの道を引き返すべきなのだけど。

「どうしてこんなにドアがあるのよ!」

何度目か分からない嘆きを、自棄になって叫ぶ。

そう。この部屋には10以上のドアがあって、閉めるたびに位置が超高速で入れ替わるのだ。何度か開けたり閉めたりしたけれど、元の道につながるドアが見つからない。

「どうしよう? 夕食の時間まで戻らなければ、探してくれるとは思うけど…、待つ?」

詩緒里の提案は常識的なものだけれど、はつきり言って避けたい。

「探す人が、椎奈だよ? 地図まで貰ったのにさ。」

「…やっぱり、怒られるかな。」

「椎奈に叱られるのは、嫌だなあ。」

何せ、椎奈だ。あのいつもの無表情のまま、怒気もあらわに叱られたら：

しばらく立ち直れそうにも無い。

「じゃあ、さ。さっきから、少し考えていたんだけど。」

「何？言ってみて！」

椎奈の説教を避けられるのなら、何でも良い。

「ミキかユトウルナを呼んで、相談するっていうのはどうかな。」

…盲点だった。

「精霊の主を、道に迷ったからって呼ぶのもどうかと思ったんだけど…」

「背に腹は代えられないよ。」

躊躇う詩緒里にきっぱりと言って、私はユウを呼び出した。

腕輪が輝き、ユウが現れる。

「…やっぱり、小さい？」

さっきも思ったのだが、最初に合ったときよりも小さくなっている気がする。最初はオオカミサイズだったのが、今では柴犬くらい。『力を抑える為に、この大きさなのだ。…しかしリナよ、呼び出してまず口にするのがそれなのか？』

「良いでしょ、ずっと気になってたんだから。…じゃなくて、お願いがあるの。」

『何だ？我はいつでもリナの力になるぞ。』

「あのね、ここから出て、安全な所まで移動したいの。迷子なんだ。」

そう言うと、ユウが項垂れた。

『：リナ。そこに持っているのは地図だろう。何故迷うのだ。』

「しょうがないじゃん、迷っちゃったんだから。」

言い切ると、ユウは溜息をついた。

『ならば、我よりミキストリの方がよからう。シオリとやら、呼ぶがよい。』

「あ、はい。」

詩緒里は頷いて、ミキを呼び出した。

ミキは現れると同時に、溜息をついた。

『シオリ、リナ。ここは危険だ。どうやったらこんな所に迷い込むのだ。』

まだ迷ったって言ってないのに。

『とりあえず、ここから出ればよいのだな？』

ミキの言葉に頷くと、ミキは羽を強く羽ばたかせた。

突風に、思わず目を閉じる。

次に目を開けた時、私達は、ソフィアちゃんに会った庭に戻っていた。

「凄い！ミキ、ありがとう。」

『シオリもそのうち使えるようになるう。詳しくは巫女に聞くがよい。』

詩緒里の賞賛に、ミキがまんざらでもない顔でそう言った。

「ねえ、私にもできるかなあ？」

ユウに聞くと、ユウは首を傾げた。

『水属性の魔術には、余り移動魔法が無い。我もそれほど得意でも

ないしな。だが、我が知るのは魔術の中でも3派あるなかの1つ。あの男や巫女の方が詳しかろう。相談してみたらどうだ。』

精霊の主に苦手とかあっていいのだろうかと思ったけれど、聞かなかった事にした。代わりに、1つだけ注意。

「男じゃなくて、祖先輩。それに、椎奈は椎奈だよ。」

ちゃんと呼んであげて。そう続けると、ユウとミキは顔を見合わせた。

『…そうか、2人は何も知らぬのだな。』
とミキ。

『シイナという言葉は余り好ましいものではない。だからこそ、あえて避けているのだが。』
続けたのはユウだ。

「どういう意味？それに、シイナの巫女って、何なの？」
疑問をぶつけると、ユウが口を開いた。が、それよりも早くミキが言葉を発した。

『必要があれば、巫女が話すであろう。我等から言う事ではない。我等も、全てを知っている訳ではないしな。』

ユウは、ミキをちらりと見た。少し考え込み、頷く。

『…そうだな。リナ、すまぬが忘れてくれ。』

「…分かった。」

渋々頷いた。余り気持ちのいい話題では無いようだ。

それにしても、と思う。よく考えてみると、私達は椎奈の事をほとんど知らない。家族とか、普段の生活とか、椎奈は全く口にしな
いのだ。

今度聞いてみよう、と心に決めて、ユウに向き直った。

「もう聞かない。でもユウ、2度と椎奈と喧嘩しないでね。」
ユウは一瞬顔を顰めた後、頷いた。

『リナがそう望むのなら。』

「ありがと。じゃあ、またね。」

そう言って手を振ってみせると、ユウは尻尾を振って、その場から掻き消えた。

振り返ると、ミキも丁度消える所だった。

「…戻ろうか。」

外は次第に暗くなってきている。夕方をすっ飛ばして、夜と云っていい時間な事は間違いない。そろそろ夕食の時間だ。

詩緒里の提案に一も二もなく頷いて、私達は部屋への道を歩き出した。

助力と、保留（後書き）

おかげさまで、アクセス数が1000pvを超えました！読んで下さっている方、本当にありがとうございます！！

作者は「まだまだ未熟」という表現を使うのもおこがましい程の初心者ですが、これからも精進していこうと思いますので、よろしくお願いします。

初めて見る光景（前書き）

昨日初めて感想をもらってうきうきしてしまっている作者です。
これからも頑張っていきますので、些細な事でもいいので、感想いただけると大感謝です。

初めて見る光景

部屋に戻ると、椎奈と旭先輩は、私達が出て行ったときと全く同じ位置で、読書に没頭していた。違うのは、旭先輩の側にあった本の山が随分小さくなっている事と、椎奈の隣にその分大きな山が出来ていること。

…もうあんなに読んだのかな。

横を見ると、里菜が呆れ返った顔をしている。まあ、言いたい事は何となく分かる。

要するに、付き合っている2人が言葉も交わさず、ただひたすら本を読んでいるという事に、一言言いたいのだろう。私は、椎奈達らしいなっと思うけれど。

いきなり、椎奈が立ち上がった。そのまま私達を振り返り、歩み寄って来る。

どきりとした。もしかして、私達があ部屋に迷い込んだ事が、ばれていたのだろうか。

椎奈は、たくさん魔法を知っているみたいだから、私達が危ない所に行った時に分かるような魔法を使っても不思議ではない。

里菜も同じ事を考えているらしく、顔が強張っている。

椎奈が、私達の目の前で立ち止まった。私達を静かに見つめる。

「ごめん、椎奈！」

里菜が大きな声で謝って、頭を下げた。出遅れた私もそれに倣う。

「…何の話だ？」

けれど、不思議そうな声が頭上から降ってきて、頭を上げた。小さく首を傾げた椎奈と目が合った。

「よく分からないが、謝られる事をされた覚えは無い。古宇田達が帰ってきたから、そろそろ夕食なのか、聞こうと思っただけ。」

その言葉を聞いて、里菜が安堵の声を漏らす。

「良かった…。怒られるかと思った。」

「：怒られるような事をしたのか。」

椎奈が半眼になって里菜を見つめた。里菜が、口を小さく開けて静止する。

：完全に墓穴を掘っちゃった。

「：そう言えば、先程大精霊達の波動を感じたな。ミキストリの方か？あの魔術は。攻撃魔術ではなかったから、何の魔術かまでは気にしなかったが、何の為に彼らを呼んでまで、魔術を使ったんだ？」

「あははは…」

里菜が視線をうろうろさせながらごまかし笑いをした。

勿論そんな事で誤魔化されてくれる椎奈では無く。結局私達は、近づくなど言われた部屋に入った事を、白状する事になってしまった。

「どうして地図があるのに迷うんだ。」

「「ごめんなさい。」」

冷たい目で睨まれ、素直に謝る。

「：まあ、良い。もう近づくな。」

溜息まじりにそう言われ、ほっとした。この程度で済んで、本当によかった。

不意に、椎奈がすつと視線を滑らす。そのまま部屋中を見回し、眉間にしわを寄せた。

「…ええっと、椎奈さん？今度は一体……」

おそるおそる尋ねる里菜を無視し、椎奈は旭先輩の方を振り返った。

私もそちらに視線を向けると、机の上にあった大量の本は、部屋の片隅の棚に積まれていた。その周りが、なんだかぼんやり光って見える。

いつの間に？それに、あれは何？

そう思ったけれど、椎奈の行動に思考が中断された。

椎奈は旭先輩に小さく頷いてみせると、刀印を組み、口の中で何かを呟いた。

清冽な風が私達の周りを吹き抜けた。冷たいけれど、気持ちのいい風。

続いて、椎奈が手を2回叩いた。パンパン、と不思議な程部屋に響き渡る。

音の反響が終わった時、部屋の空気が凄く軽くなっているのに気が付いた。

「椎奈、今、何したの？」

「本から漏れ出た魔力が部屋に充満し、淀み始めていたから、修跋の術で空気を清めた。」

椎奈の答えに、納得した。

「瞬間空気洗浄機だね。」

里菜の言葉に、椎奈が微妙な表情を浮かべる。うん、私もちよつと違うと思う。

「じゃあ、あの本は？」

「旭の魔術だ。移動させた後、周りに結界を張る事で、本から漏れ出る魔力が部屋に影響を与えるのを防いでいる。」

椎奈の答えに感心した。魔法ってやっぱり便利だというのが1つ、旭先輩に聞かなくても、何をしたのか分かる椎奈も凄いというのが1つ。

「それにしても、旭。サーシャに何て言って、本を持って来させたんだ？ あれは、かなりの魔術師の、それも直筆の書だろう。」

椎奈の問い掛けに、旭先輩は椎奈に顔を向けた。静かに口を開く。「この世界の事について書いてある書と、城で一番詳しい魔術書を頼んだ。」

「：つまり、あれは『原書』だったのか。」

頷く旭先輩。椎奈が溜息をついた。

「旭の非常識さには、大概慣れたつもりだったけど…。」

「椎奈に言われたくはない。」

里菜と無言で視線を交わす。2人の意見は一致した。

…私達、邪魔な気がする。

こうして「普通の会話」をする椎奈達を見るのは、初めてだ。内容はよく分からないけれど、伝わって来る空気は、とても親密だ。見ているだけで、意味も無くドキドキする。

お昼に2人が部屋で話し合った後、椎奈が部屋を飛び出した時の、椎奈の追いつめられた顔や、旭先輩の少し辛そうな顔を思い出す。あの時何を話したのかは分からないけれど、喧嘩に近いものだったのは間違いない。お城を見て回る前に部屋で会話していた時も、ぎくしゃくした雰囲気や椎奈から感じたし、旭先輩も、いつもと少し違った。それもあって、私達は2人を残して部屋を出た。話し合いたいなら、私達を気にせず話し合えるように。

けれど今は、それが無い。むしろ、こっちに來る前についていた、下校のときに見たよりも、距離が近づいたように見える。いつもいつも他人を遠ざけているような感のある椎奈にとって、それは凄く良い事だ。友人として、素直に嬉しいと思う。

…けれど。ほんの少しだけ、胸に痛みを感じた。

恋愛の形（前書き）

進みません。

恋愛の形

その時、ドアがノックされた。椎奈が会話を中断し、ドアに歩み寄り、引き開けた。

「コウダ様、カンド様、シイナ様、アサヒ様。夕食でございます。サーシャさんが、カートに料理を乗せて入ってきました。」

「あ、良かったー。私もうお腹ぺこぺこ。」
里菜がものすごく嬉しそうな声をあげた。

「…古宇田、昼食を食べて、まだそんなにお腹が空くのか？」
呆れ顔の椎奈に、里菜が言い返す。

「当たり前でしょ。っていうか、椎奈はお腹が空いてない訳？お昼抜きのくせに。」

「別に。数日食事抜きでも平気。」

「椎奈、それは体に悪すぎるよ。」

庭で言ったのと同じ事を、よりはつきりと言った。

「そうそう、詩緒里の言う通り。明日からは椎奈もちゃんとお昼食べなさい。」

里菜が大きく頷いた。

「要らない。入らないから。」

「またそういう…」

「必要な分だけ食べれば良いんだ、無理に3食摂る必要も無いだろう。…それより、席に着かないといつまでたっても食べられないぞ。良いのか？」

「良くない！」

里菜が即答して、慌てて席に着いた。肩をすくめて、椎奈も座る。椎奈は旭先輩の正面、里菜がその横。つまり。

「ほら、詩緒里も早く座って。」

里菜が手招きする。その笑顔を見れば、確信犯なのは間違いない。

空いている席は、旭先輩の隣だけだ。はっきり言って、座る勇氣はない。

でも、里菜が変わってと言うのも不自然だ。2人には私の気持ちを話すつもりは無い。

「しーおーりー。早く早く、おーなーかーすーいーたー!」

喚き出した里菜に、椎奈の冷たい視線が突き刺さる。

「古宇田、恥ずかしいとは思わないのか。」

「だってお腹空いた。詩緒里、ほら早く!」

しょうがない。緊張しながら、旭先輩の隣に歩いていった。

不意に、旭先輩が立ち上がった。何事かと立ち竦むと、椅子を引いてくれた。

「:あ、ありがとうございます。」

「いや。」

どぎまぎしながらも、なんとかお礼が言えた。顔が赤くなっている事を祈るばかり。

「:知らなかったな。旭、意外と紳士な真似をする。」

興味深げな声が聞こえたけれど、そちらを向く勇氣はなかった。

「ああ。」

普通に答える旭先輩も旭先輩だ。

「それでは、夕食の準備をさせていただきます。」

一幕を微笑ましげに見ていたサーシャさんがそう言うてくれたお

かげで、助かった。

ほっとして顔を上げると、椎奈の横顔が目に入る。いつも表情の無い椎奈の感情を察するのは簡単ではないけれど、怒っていないのは確かなようだ。どうやら、さっきは本当に声のままの感想しか持たなかったみたいだ。

この世界に来た時もそうだった。旭先輩に支えてもらってしまっただけ、椎奈は私が何を気にしているのか、分からなかったみたいだった。

自分を想う旭先輩の気持ちに、自信があるから、という事でもないと思う。単に、そういう事を考えないらしい。

「詩緒里、食べないの？」

里菜に声を掛けられて、我に返った。既に給仕は終わっていて、サーシャさんはいない。みんなも食べ始めている。慌ててナイフとスプーンをとって、食べ始めた。

恋愛の形（後書き）

詩緒里が緊張しまくります。

椎奈は余り独占欲がありません。正直、旭が何しても、別に…といった感じです。

旭は…さて、どうなんでしょうね。

食事時のバトル（前書き）

勿論この4人ですから、普通のバトルではありません。

食事時のバトル

椎奈が昼食を食べないのは、諦めた。多分、何を言っても聞かないだろうし。

けれど、けれどだ。もし貴方の目の前にいる友達が、朝はロールパン1個とスープのみ、昼は抜き、夜も一般的な女子高生が一度に食べる量の半分も食べていないとなれば、

「椎奈、それは少なすぎ!ちゃんと食べて!!」

と言うだろう。

「普段からこのくらいだ。別に我慢している訳でも食欲不振という訳でもないのだから、問題ないだろう。」

「…椎奈、問題あるよ、それ。」

詩緒里の援護射撃を得て、更に言い募る。

「体に悪い。というかそれ、絶対栄養不足になるって。それでお腹が空かないの、おかしい。」

椎奈は取り合わない。

「栄養バランスは考えて食べている。必要最低限の摂取量は抑えてある。おかしいということはない。」

「おかしいって! 私なんか、今日一日で椎奈の5倍以上は食べてるもん!」

「太るぞ。」

それは禁句です。そんな真顔で素っ気なく言う台詞じゃありません。せめてこう、冗談めかせて欲しい。

流石に絶句して椎奈を見つめると、首を傾げてこう言ってきた。
「どうかしたか？ 余りが欲しいならやるぞ。」

一気に脱力する私を、椎奈は無表情で観察している。詩緒里の同情的な視線が唯一の救いだ。

ちなみに旭先輩はというと、食事が始まってからは終始無言。私達の言い争いに至っては、見て見ぬ振りだ。

でも、私は気付いてる。椎奈の食事が普段からこれ位と聞いたとき、わずかに眉を曇らせた事を。

うん。第2ラウンドは、旭先輩に任せよう。

「旭先輩も心配でしょう？ 何か言っておいて下さい。」

旭先輩がようやく顔を上げた。何故俺に話を振るって顔をしているけれど、当たり前だと思います。

旭先輩特有の、冷たい瞳が椎奈を捉える。

「：魔力を保つ為にも、それなりに食事をとるべきだ。」

椎奈が意外そうな顔をして旭先輩を見た後、さらりと答えた。

「それは魔術師の話。私達術師はむしろ、食事を絶つ事で霊力を高める。まあ普段はしないが、そこまで食事が増える事も無い。」

「詭弁だ。大体、昨日からさんざん術を使っている。あれだけ使えば、霊力を補う為に食事をとりたくなって普通だと思うが。」

旭先輩が椎奈の主張をばっさと切り捨てて。椎奈が肩をすくめた。

「あの程度、どうってこと無い。普段に比べれば少ない方だろう。」
「探査、術解除、逆探査、アドラスの魔術の無効化、王への呪い、

ユトゥルナへの攻撃、盗聴防止、地図、場の浄化。どこが少ない。相当霊力を消費したはずだ。」

椎奈が少し驚いた顔をした。

「…気付いていたのか。」

「当たり前だ。」

割って入るのは無粋だと思う。2人の空気がそうと告げて来る。けれど、もう我慢の限界だった。

「ちょっと待ってね、椎奈。どこから聞けば良いのか分からないんだけど。」

「何だ？」

2人の会話を整理してから、学校で質問する時のように片手を上げた。

「1、魔力と霊力の違い。2、魔術師と術師の違い。3、普通の魔術師達の使える魔術の量。4、なんか羅列された術？の説明。これを馬鹿な私でも分かるように説明願いたいのですが。詩緒里、なんか追加ある？」

「無いよ。里菜、凄い。」

詩緒里が惜しめない賛辞を送ってくれた。ありがとう、頑張ったよ。

「…そうだな。明日からの訓練で説明するつもりだったが、今してしまおうか。」

そう言ってナイフとフォークを置こうとする椎奈を、

「ストップ！何そのまま誤魔化そうとしてるの！」

「椎奈、ちゃんと食べて。」

私と詩緒里で慌てて止める。

「だから、要らないと言っている。」

「…ねえ、椎奈？無理矢理口に詰め込まれるのと自分で食べるの、どっちが良い？」

あくまで食べようとしないう椎奈に、遂に実力行使に出る事にした。隣から身を乗り出してみせると、椎奈がうんざりした顔をした。

「何故そこまでして食べさせたいんだ…。」

「食育は大事です。」

高校の家庭科の先生の言葉をそのまま借用すると、椎奈が溜息をついた。

「満腹だと言っているものを食べさせる事の、どこが食育だ。大体あれは、そういう意味ではないだろう。」

「…椎奈。おそらく古宇田は、何を言っても食べさせる気でいるぞ。」

思わぬ旭先輩の援護射撃に、大きく頷いてみせる。椎奈は私を睨みつけてから、旭先輩の方を向いた。

「そう思うなら、止めて欲しい。正直迷惑。」

「断る。椎奈の食事は、どう考えても少ない。明日から術の練習をする気なのだろう。その調子では体を壊すぞ。」

ここに来て、椎奈が今日一番の大きな溜息をついた。そのまま、食事を再開する。

勝った！

…いやまあ、諦めたんだろうけれど。味方無しだもんね。

食事時のバトル（後書き）

椎奈が珍しく口で負けています。
里菜は今まで勝てた為しがなかったなので、ちよつと感動していますね。

魔法論議と非常識（前書き）

今回、以前に旭が呆れていた理由が明らかになります。

魔法論議と非常識

「…説明するぞ。」

完食した代わりに青い顔になった椎奈が、説明に移った。

誤解の無いように言っておくけれど、夕食の量はそれほど多くはない。旭先輩も私も、パンはお変わりした。高校生には、物足りない位。どうしてそんなに小食なんだろう。

「まず、1つ目と2つ目だが、それは単なる区分の違いだな。魔力を練って魔術を用いるのが魔術師、霊力を練って術を用いるのが術師だ。まあ、実際は私の言う術も魔術のうちの1つ。それに、私の用いる術には魔術の要素が含まれている。」

「…よく分かりません。」

「まあ、魔術のうちの1つに術があると思えばいい。そうだな、日本では、西洋から来た魔術を魔術と呼び、日本古来の魔術を術と呼ぶと思えばいい。本当は仙術や方術など、術にもいろいろあるが、私の学んだものはそれらを一緒にしていた。旭の魔術は、純粹に西洋魔術だが、元となる力は霊力の気が強い。」

最初の説明が破綻している気がする。無言で抗議の視線を送ると、椎奈は肩をすくめた。

「ああ、旭は特別だ。霊力持ちは術しか使えないと私も習っていたが、どうも違ったようだ。言ってしまうえば、魔力と霊力の境界はかなり曖昧だ。その気になれば魔力持ちにも術は使えるだろうし、霊力持ちは魔術を使う事も出来る。通常は理論破綻して狂うがな。」
最後にさらっと怖いことを言う椎奈。

「椎奈に特別と言われるのは不本意だ。そもそも、普通の術師は方術1つを習得するのに一生をかけるものなのに、方術に加え仙術を修め、更に理論の難しい魔術に手を出すなんてどうかしている。」

旭先輩の抗議に、椎奈は眉をしかめた。

「霊力を持つものは、神霊降臨術、除霊など、方術や仙術に関わる力を先天的に持っている。霊力を使いこなした上で理論を学べば大した事は無い。大体、始めに魔術に手を出したのは旭だろう。あれほど相性の悪いものを平然と扱えるという事に私は驚いたぞ。」

「うん、2人が常識外れなのはよく分かったから。で、残りの説明よろしく。」

放っておくといつまでも続けて、訳の分からない専門的な話に突入しそうだったので、無理矢理止めた。

非常識と言われて眉間にしわを寄せたが、直ぐに説明を再開してくれた。

「私はそれほど術師や魔術師を知らない。私に言わせれば、一人前の術師が全ての術を使えるのは当たり前だな。」

「魔術師は比較的少数の魔術を修め、威力や精度を上げる事を目指す者が多い。中には、一種類の魔術理論を応用させるだけというものもある。」

椎奈の言葉に、旭先輩が付け加える。

「やっぱ、ガス欠みたいに霊力や魔力が切れちゃう事もあるの?」

「霊力、魔力切れは死に直結するがな。まあ、その前に術、魔術が使えなくなるから、死ぬ事は滅多に無いが。」

椎奈が頷く。安心していいのかどうか。

「通常は、大規模魔法を3回も使えば限界だな。アドラスなら6、7回は使えそうだが。」

「エリーさんって、凄いですね…。」

旭先輩の言葉に、詩緒里が感嘆した。詩緒里、大事な事を聞いてないよ。

「これ、多分さっきの4つ目と関係ある気がするんだけど。椎奈達はどうなの？」

椎奈が口を開く前に旭先輩が答えた。

「先程俺が挙げた、椎奈が使っていた術のうち、初級の術はユトウルナへの攻撃と場の浄化。探查、逆探查、王への呪いは中上級に位置し、術解除、魔術無効化は最高難度とされる。盗聴防止と地図に至っては、魔術である上、地図は理論無しの概念的なものだから、余程習熟していないと使えないはずなのだが。大規模魔法を10回使っても倒れないだろうな、椎奈は。」

「旭も10回くらいなら何とかなるだろう。旭が使った魔術も、初級ではあるが、強度は異常に強い。そうだな…、古宇田達には、核シェルター並みと言えば通じがいいか？」

「もう何でもいいです…。」

ほら、やっぱり非常識じゃない。

「でも椎奈、いつそんなに術を使ったの？逆探查とか術の解除とか盗聴防止とか、やってる所見た覚えが無い。」

詩緒里が首を傾げて聞いた。そう言えばそうだ。

「…だから驚いたんだ。逆探查も術の解除も、見ていたものはいない。旭は、部屋から庭にいた私の霊力の流れを解析した。相当の霊視力と知識が無ければ出来はしない。2ヶ月やそこらで習得するとはな。」

呆れ顔の椎奈に旭先輩が一言反論。

「2ヶ月で概念魔術の域に達する事もありえないだろう。」

「ね、ねえ、盗聴防止は？いつやったの？」

もう聞くのも疲れてきたから、もう1つだけ質問。

「今もやっている。」

「へ？」

「この部屋に始めて来たとき、神官達の練習部屋で話したとき、そして今。いつ誰に聞かれるか分かったものではないから、この手の話をする時は必ず使っている。」

「成程…。」

確かに便利。元の世界に帰るとか帰らないとか、あの話を聞かれちゃったら大変だっただろうからね。

「他に何か聞きたい事はあるか？まあどうせ、明日から学ぶ事にはなるが。」

「ううん、もういいよ。助かりました、ありがとうございます。」

椎奈にきちんと礼を言ってから、私と詩緒里は部屋に戻った。椎奈達はと言うと。

「もう少しで読み終わるから、そうしたら寝る。」

との事。どれだけ読むのが早いものよ。

魔法論議と非常識（後書き）

旭と椎奈の実力の一端、ですね。

これがどれだけ凄いのかは、里菜達が魔術を学んでいく中で分かる事でしょう。

初めての訓練（前書き）

今回長めです。

旭が…

初めての訓練

翌日。朝食を終えた私達は、初めての訓練に参加する事になった。

「訓練は、午前は騎士団の方々と共に体を鍛え、午後は神官の方々と共に魔術を学んでいきます。勿論、皆様に何かご希望があれば、いつでも変更可能です。」

「サーシャ、午後の魔術の練習だが、私達だけで行う。古宇田も神門も完全な初心者だ。神官達とやる意味が無い。」

サーシャさんの説明に、早くも変更を求める椎奈。サーシャさんは一瞬視線を椎奈に送った後、伝えておくと了承してくれた。

「あの、サーシャさん。私達、武術も完全に未経験なのですが、騎士団の方々にご迷惑ではありませんか？」

里菜が片手を上げて尋ねると、サーシャさんが丁寧に教えてくれた。

「騎士団の方々は基礎練に力を入れております。武術の経験は問わないとの事です。」

「え、じゃあ、武術の練習はしないんですか？」

驚いて聞いてみる。てっきり、剣をずっと振るとか、そういう訓練だと思っていたのに。

「いえ、勿論それも行います。ですが、基本から教えて下さるそうですよ。」

それを聞いてほっとした。里菜も同じ顔をしている。

ふと心配になって、椎奈に尋ねた。

「椎奈はそれで良いの？練習になる？」

「この国の剣は私達の世界のものと違うようだからな。どの程度種類があるか分からないが、どのみち始めのうちは慣れる為にも基本

は大切だ。問題ない。」

納得して頷いた。何故か後ろから、旭先輩の溜息が聞こえて来た。振り返ったけれど、旭先輩が何を考えているのかは分からなかった。椎奈もちらりと視線を送ったけれど、何も言わずにまた前を向いた。

そうこうしている間に、ざわざわと人の話し声が聞こえてきた。何だか、次第に熱気に包まれていくような感覚を覚える。

サーシャさんが、廊下の突き当たりにある扉を開けて、私達を入れてくれた。

目の前に広がるのは、運動場。ただし室内で、私達の学校の運動場2個分はありそうだ。

運動場には、動きやすい服装をした人たちが50人くらいいた。皆とても大きな体をしている。驚く事に、4分の1くらいが女性だった。

入り口近くで気圧されて突っ立っていると、中でも一番大きな体をした男の人が近づいてきた。

「勇者様ですね。お待ちしておりました。私はアドルフヘラー、近衛騎士団第一隊長です。皆様の指導を担当させていただきます。よろしく願います。」

赤い目に茶髪のアドルフさんは、昨日までは会わなかったけれど、一目で強そうな印象を受けた。

「リナ・コウダです。よろしく願います。」

「シオリ・カンドです。お世話になります。」

「キヨウヘイ・アサヒだ。」

「シイナ。」

4人がそれぞれ自己紹介する。名前の順序をこの世界に合わせた方が良くと椎奈にいわれて、皆で示し合わせてこう名乗った。

「コウダ様、カンド様、アサヒ様、…シイナ様、ですね。よろしく願います。それでは早速練習に入りますが、王の言う事には、私達と同じ内容を、との事なのですが…。」

椎奈の名前の前で少し戸惑った後、アドルフさんはすぐに練習の説明を始めた。けれど、途中で言葉を濁らせる。

どうしたのかと里菜と顔を見合わせていると、椎奈が一步前に出た。

「練習内容をまとめた紙などはあるか？」

友好さを一切感じさせない口調に一瞬眉をひそめた後、「こちらです」と一枚の紙を椎奈に手渡した。紙は、黄色っぽい、分厚い紙。椎奈はそれにざっと目を通して、頷いた。

「まあ、こんなものだろうな。私達は構わないから、遠慮せずに始めてくれ。」

「…畏まりました。」

疑わしげな視線を私達に投げ掛けた後、アドルフさんは全員に集合をかけた。騎士さん達は、私達の目の前に、あっという間に整列した。

「全員、揃ったな。では、紹介する。」

この度、勇者として異世界から召還されたコウダ様、カンド様、アサヒ様、シイナ様だ。今日から我々の訓練に参加する。仲間として、いろいろと教えて差し上げるように。皆様、後ろに入ってください。」

アドルフさんの言葉に従って、一番後ろに並んだ。

「それでは、今日の訓練を始める。まず始めは、時間走だ。30分間走ってもらう。」

長距離走か…。短距離よりは得意だけど、30分も走った事は無い。大丈夫かな…。

里菜をちらっと見ると、こっちはやる気満々。里菜は陸上部で長距離専門。やる気にならないはずが無い。

椎奈はいつもの無表情。どうでも良いって感じかな。

旭先輩は、…渋い表情を浮かべていた。

どうしたのかな？と思っていると、前からごおっという音が聞こえてきた。

視線を向けると、アドルフさんが火を出していた。

「なお、一周に掛けていい時間には制限がある。男性は一周目が2分、一周増す事に10秒ずつ増やす。女性は一周目が2分半で、後は同じだ。遅れると火傷させるから、そのつもりでいてくれ。ああ、心配しなくても治療術で治せるから、直ぐに訓練に復帰できる。」

……ものすごく物騒な時間走だった。

「…マズいよ、詩緒里……。」

里菜が囁いてきた。

「里菜は平気でしょ？走るの早いもん。」

すると、旭先輩が疲れたような声で聞いてきた。

「…神門、このトラックは目算で400メートル程。学校のトラックの倍だ。神門は普段、1週をどのくらいのペースで走る？」

「………1分、30秒………。」

「その場合、3分30秒は掛かると思うよ？疲れるから。」

「無理だよお……。」

里菜の言葉に、泣き出しそうになった。

「俺も無理だ。1週目からな。そもそも、ヘラーの態度で嫌な予感のはしたのだが。」

旭先輩が嫌そうな表情を浮かべている。

：忘れてた。そう言えば旭先輩って、運動そんなに出来ないんだっけ。いつも一緒にいる、運動神経の固まりのような…池上先輩とは、正反対って聞いた事がある。

「椎奈も止めようよお……」

泣き言が漏れたけど、今更どうしようもない。

「それでは、スタートラインに着いてくれ。では……始め！」

無情にも、アドルフさんがスタートの合図を出した。誰もが一斉に走り出す。騎士の人たちも、みんな顔が必死だ。慌てて走り出す。

ペース配分とか、考えている余裕は無さそうだ。1週目から脱落は、したくない。

必死で走っているはず、なのに、あっという間に他の人と差がつき始めた。流石の里菜も、私を氣遣う余裕は無いから、前の方を走っている。

不意に、騎士さんの1人が速度を落として話しかけてきた。

「嬢ちゃん、大丈夫か？そのペースだと、1週目から間に合うか微妙だぞ？」

「微妙じゃなくて間に合いません……」

本気で泣きそうな私に、気の毒そうな表情を浮かべ、こっそり囁いてきた。

「じゃ、1つアドバイス。魔術で少しでも自分の背を押せ。スピードをつけるだけなら、十分訓練になるし、最初だから見逃してもらえさ。ちょっと見本見せてやっから、やってみろ。」

そう言って騎士さんは、十字を切って、呟いた。

『救いの風よ、我が力の糧となり、我を走らせたまえ。』

ふわっと風が流れて、騎士さんのスピードが上がった。あっという間に遠くなっていく。

……私、魔術使えないよ……………。

しゃがみ込んで泣いてしまおうかと思ったその時、不意に声が聞こえた。

（シオリよ。我が力を貸そう。）

（ミキ…？）

（幸い我は風の属性。シオリがイメージしてくれれば、実現できる。

）

（…ありがとう！）

もうズルにも程があるけれど、里菜の言う通り、背に腹は変えられない。

さっきの騎士さんみたいに、風に背中を押されて速く走れるよう願う。

途端、背中に風が当たって、足が自然と進むようになった。周りの景色が流れる速度が増す。なんとか時間内に1周できた。

「脱落者は、5人か。覚悟しろよ。」

その言葉に後ろを見ると、旭先輩の姿が目に入った。

…言葉通り、間に合わなかったんだ。

そういうとアドルフさんも十字を切ってから、唱えた。

『正義の火よ、彼らに反省を』

「どんな呪文よ！」

前の方から、里菜の突っ込みが入った。里菜、元気だね…………。

アドルフさんの目の前に火の玉が現れ、5人に順番に飛んでいった。騎士さん4人が、順番にその場で転げ回る。

最後の火の玉が旭先輩に飛んでいった、その時。

旭先輩が、火の玉に目を向けた。瞬間、火の玉が消える。

唖然とした空気が流れる中、平然と走り続ける旭先輩はふと私を見て、目を細めた。それから、何かに納得した表情になった後、急にスピードが速くなった。

私を見て、真似する事にしてみたいだ。あっという間に私に追いつく。

「名案だ、神門。精霊の魔術か。」

私と会わせて走りつつ、話しかける旭先輩。

「はい。騎士さんに、教えて、もらいました。でも、いいん、ですか？火の玉、消して」

息を切らしながら、ちょっと不安になって聞く。

「魔術を使っっては、いけないとも言われていなければ、火傷しなければならぬとも、言われていない。」

旭先輩も少し息を切らしつつ、平然と答えた。

「要は、間に合えば、良いん、ですよ。」

「その通りだ。」

2人で頷き、そのまま走り続けた。

初めての訓練（後書き）

はい、すみません。ですが、特に旭と詩緒里は必要ですから…
こんな感じがちよつと続きます。

実力差（前書き）

流石にこの話を2日に分けるのもちよつと…
という訳で一度に投稿します。

実力差

4周目の後半、何だか急に疲れを感じた。

（ミキ、これ何？）

（魔術を使っているとはいえ、慣れない速度で走っていれば、疲れる。時間に余裕はあるようだから、速度を落としても良いぞ？）

要は疲れただけらしいので、もう少し頑張る事にする。理由は：一緒に走っていたいから。いいよね、そのくらい。

「詩緒里、大丈夫？疲れてるよ。これでちょっと回復して。」

速度を落として私と並んだ里菜に、背中を叩かれた。途端、体が軽くなった。

「これ、何？」

「ユウの魔術。さっきやってもらったの。あ、旭先輩も。」

そう言って里菜が旭先輩の腕に触れる。

「助かる。」

ものすごく心のこもった言葉だった。普段なら、絶対に聞けないような声だ。

「アサヒ様、脱落です！」

2度目の火の玉が飛んで来る。前より大きくなっていたが、大して近づく事も無く消えた。

「ああっ、魔術のクラスが上がったんですよ？火傷くらいして下さい！！」

アドルフさんの側で治療を受けている騎士さん―私にアドバイスしてくれた人とは違う人―が、何だか切実な声を上げた。

「いやに決まってる、よねえ。」

「だね。」

里菜の言葉に、頷く。

「あのクラスを受ければ、古宇田も神門も、巻き込まれる。椎奈が怒るのだが、分かっているの、だろうか。」

旭先輩の心配はそっちだった。…うん、確かにそれは考えて欲しい。

「まあ、少し速度を、上げた方が良いか。」

旭先輩が呟いたとき、私達3人に等しく風が当たり、また少し早くなった。

「…流石にマズく、ありませんか？」

そう聞くと、旭先輩は簡潔に答えた。

「駄目とは、言われていない。」

「ですね。ありがとうございます。」

里菜がはっきりと頷く。まあ、いいよね。

「…何でも良いが、余り目立つな。」

不意に、疲れたような椎奈の声が聞こえた。視線を巡らすと、目の前を駆け抜けていった。

「…今、抜かれ、ました？」

「そのようだ。」

旭先輩の答えを聞いて、ミキに聞いてみる。

（ミキ、今私達のスピードどの位？）

（アサヒ殿の制限時間に、ギリギリ間に合うくらいだ。…巫女はどうやら、女子の制限の半分程度で走っておるようだな）

ミキの言葉を2人に伝える。

「えっと…術を使ってるん、ですよね？」

里菜の言葉に、旭先輩は首を振る。

「いや。」

「……抜かれたん、ですか？」

「神門。椎奈を常識の枠内で、捉えるな。」

「……分かり、ました。」

椎奈との差、1週以上。しかも、こっちは魔術のハンデ付き。

…椎奈が私達に戦うの無理だって言った理由、分かった気がする。

実力差（後書き）

…まあ、高校生はこんなものですよ（？）

明日も二話投稿、ですかね…

こういう事をするからストックが無くなるのですが…

休憩

結局、30分が終わったとき、火の玉は合計4回飛んで来た。途中から旭先輩についていくのが楽だと知ってずっと一緒―詩緒里の為にちよつと離れたけど―だったから、一度も当たらなかったけど。

ただし。忘れていた事があった。私達、風に押されてたとはいえ、男子のペースで走った。10週ちよつと、つまり、4キロ以上。

と、いうわけで。

「き、きつい……」

ユウに回復魔術を5回に制限された―魔力の問題らしい―為、かなり疲れが残った。

更に言うとなあの魔術、意外と効き目が小さい。1回目は良かったけれど、3回目からは、少し息が楽になった、かな？位。体力回復にはならなかった。

トラックの端で座り込んで、もう10分。未だ息がしんどい。

走り慣れた私で、これ。詩緒里は途中で倒れたから、アドルフさんに魔術を掛けてもらってかえって元気だけど、旭先輩が隣でぐったりしている。

「…まあ、始めてでそれだけ走れば十分だろう。1週間もすれば慣れる。」

ストレッチをしている椎奈がこちらに視線を向けて言った。

ちなみに椎奈は、終わった直後こそ息が切れていたけれど、2、3分で回復してた。体力底なし……

「……椎奈、私達3人とも倒れると思ってたでしょ。」

「古宇田はギリギリ行けるかどうか、と見ていた。まさか旭が走り切るとはな。」

あっさり認める椎奈に、旭先輩の口から溜息が漏れた。

「だが、旭。少しは詠唱の真似事をしろ。目立って仕方が無い。」

「その余裕は無い。」

「…普通は逆だ。」

堂々と言い切る旭先輩に、今度は椎奈が溜息をついた。

「…椎奈、魔術を使うなどは、言わないんだね。」

詩緒里が意外そうな声で言った。うん、それは私も思った。てつきり怒られるかと。

「実戦では、魔術を使って戦う。体を動かしつつ魔術を併用する良い練習になる。それに、ただ生真面目だけでは勝てないからな。」

椎奈の言葉は、珍しく優しく聞こえた。

「しかし、頑張ったなあ。最初その嬢ちゃんが泣きそうな顔をしていたから、どうなる事かと思ったが、何の何の、根性あるじゃねえか。」

いきなり割って入った声に、驚いて振り返る。椎奈と旭先輩は氣付いていたらしく、無反応だ。

「あっ、アドバイスありがとうございました。おかげで怪我せずに済みました。」

詩緒里が頭を下げたのを見て、ああ、この人が魔術使うの教えたんだ、と分かった。

「どういたしまして。…だがその兄ちゃんよ、どうやって火の玉

防いだんだ？魔術、じゃねえよな？嬢ちゃんも、呪文唱えてねえし。どうやったんだ？」

…兄ちゃんって、旭先輩…だよな。

まあ、同じ高校生だし、この人多分40代くらいだし、間違っ
てはいないけど、ちょっとなあ。

「…彼らは魔術を知らない。契約主に魔力だけ流して、魔術を展開
してもらっている。まだ訓練を一切行っていないからな。」

不意に椎奈が口を開いた。その内容に、あれっと思う。

「へえ…。前の世界にゃ、魔術はねえのか？」

「こちらの世界では、魔術とは人間の意志を森羅万象に適用するこ
とによって何らかの変化を生じさせることを意図して行われる行為、
その手段、そのための技術と知識の体系、およびそれをめぐる文化
と定義されている。この世界のように、手から火を出したりという
のも一応魔術と呼ばれるが、お伽噺上の代物だと認識されている。」
「へ、へえ……。」

旭先輩の解説に、騎士さんが煙に巻かれて頷いた。うん、私もつ
いていけなかった。それにしても旭先輩、まだ元気ですね。

「…じゃあどうして、精霊を介して魔術が使えるって知って、実行
してんだ？」

「知識はある。そして今の訓練、私は魔術を使っていない。」

椎奈が肩をすくめる。椎奈、わざとそういう言い方してるよね？

「…そーいやそーだな。それであの早さってのも驚きだが。」

「走り慣れているだけだ。」

納得した様子の騎士さんに短く返して、椎奈は立ち上がった。

「休憩終わりだ。全員、集まれ。」
アドルフさんの声が聞こえた。

「やれやれ、まだ続くんだよな…。」
騎士さんも立ち上がった。そのまま歩き去る。

「出来るかなあ…。」
詩緒里が立ち上がる。魔術のおかげで実に元気だ。

「何をしている、古宇田、旭。行くぞ。」

「…立てません……………」
椎奈に促され、旭先輩は立ち上がったけれど、無理。

「…だから、直ぐに座るなど言ったんだ。ユトウルナに魔術を使っ
てもらえ。」

呆れ気味にそういうと、椎奈は旭先輩とさっさと行ってしまった。

…いや、分かってたけどさあ。椎奈、鬼。

休憩（後書き）

さて、次を更新すべきか、やめておくべきか…
本当に、進んでないんですよね…

第三者の目（前書き）

自分で読んでみて、やっぱ投稿する事に。
これは無い…

第三者の目

「…それでは、これで午前の訓練を終了する。解散！」

「よっしゃあ、お昼だあ！」

アドルフさんの言葉に思わず叫ぶと、椎奈からの、体の熱も吹き飛ばすような冷たい視線に突き刺された。詩緒里は苦笑している。旭先輩は無反応だ。

でも、喜んでいいと思う。時間走の後も、筋トレ（いつも部活でやっているのの軽く倍はあった）とか、ステップ（私は3回、旭先輩は5回、詩緒里は10回転んだ。難しすぎ）とか、後なんかよく分からないのをあれこれと、とにかくたくさんやらされた。とにかくきつくって、もうふらふらだしお腹空いたし眠い。休みを喜んで何が悪い！

「：嬢ちゃん、急に元気になったな。お疲れさん。」

時間走の後もいろいろとアドバイス―ズルする方法―を教えてくれた騎士さん―セヴェリオ―ピルロって言う名前だそうだが、笑いながら話しかけてきた。

「とにかく終わりましたから！お昼食べて体力回復です！！」

「まあ、それが一番だわな。：だが、余り騒ぐと怒られるぞ？」

そう言ってセヴェリオさんが視線をスライドさせた先には、相も変わらず冷たい目で私を睨む椎奈がいた。

「古宇田、恥をかくのは1人の時だけにしてくれないか。」

「いいじゃない、みんな笑ってるんだし。訓練やり切ったんだもん、

ハイにもなるよ。」

「…言っておくが、午後は始めは剣術の訓練だからな。」

椎奈の言葉に、目を見開く。

「…午後は魔術の練習じゃないの?」

「先程、ヘラーから予定を聞いたら、今日は午前いっぱい基礎練だ、剣は午後の始めの方に行くから、それに来てくれと言われた。」

その言葉に項垂れる。明らかにがっかりしている私を見て、セヴェリオさんが苦笑した。

「まあ、頑張れ。大丈夫、最初は振るだけだろうから、午前程はきつくはないさ。そうだろう? 兄ちゃん。」

「……。まあ、そうだ。慣れるまでは危なくて、それ以外は出来ない。」

振り返って椎奈を仰ぎ見るセヴェリオさんの問い掛けに頷くのを見て、ほっとした。

それにしても……

「…セヴェリオさん、椎奈は女の子です。髪も長いでしょう?」

詩緒里が私たち全員の気持ちを代弁する形でそう言った。

「姉ちゃんだったんか!? いや、髪の長い男の神官とか多いから、その口かと思ったんだが。」

目を真ん丸にして驚くセヴェリオさん。椎奈がやや苦い顔をした。

「後、私と詩緒里と椎奈は同じ年で、旭先輩はイッコ上です。」

私達が嬢ちゃんで、椎奈が姉ちゃんだだったので、それに抗議すべ

くそう言った。

「……年を聞いていいか？」

もはや呆然としているセヴェリオさんの言葉にちょっと顔を顰めてみせてから、答えた。

「私達が16、旭先輩が17です。」

口をあんどぐりと開けて固まるセヴェリオさん。一体いくつだと思っていたのか、じつくり聞きだしたい。

「…古宇田、早くしないと昼食を摂り損ねるが、それでもいいのか？」

渋い顔でそのやり取りを聞いていた椎奈が、いきなり話を打ち切った。

「良くない!!」

昨日も言ったなこの台詞、と思いながら、私は椎奈の後を追った。

「後で一体いくつだと思っていたのか、聞かせてもらいますからね。」と囁くのを忘れずに。

第三者の目（後書き）

椎奈は男の子と見られていたようです。まあ、言葉遣いを考えれば、仕方がありませんね：

：ですが、旭がちよつと気の毒です。普段そういう雰囲気、出さないから：

いえ、作者がそうさせているのですが（笑）

武器選び

昼食をとって少し寝た後、私達は闘技場という所に集合した。ちなみに、さっきまでいた部屋は、鍛錬場というらしい。

闘技場は、剣道場に似ている。板張りで、ラインが引かれている。違うのは、ラインの形が丸、という事位かな。

地図と旭先輩のおかげで迷わずに闘技場にたどり着き、奥に入ると、そこには既に椎奈が待っていた。

椎奈は、私達と一緒にシャワーで汗を流した後、どこかに行ってしまったのだ。お昼を食べない、って言うのは、どんな時でも例外ではないみたい。

私達が近づくなり、椎奈が口を開いた。

「この国には、割と多くの種類の刀剣があるらしい。どれか1つを選んで練習するように、との事だ。」

そう言って、後ろを目で示す。覗き込むと、いろんな形の剣がずらりと並んでいた。

「椎奈、剣って、どう違うの？どれが良いとか全然分かんない。」

片手を上げて言った。選べと言われても、どこから手をつけて良いのかが分からない。隣で詩緒里も頷いている。顔は、ちょっと不安そうだ。

「そうだな。古宇田も神門も、余り大きなものには手を出すな。重すぎて、制御が出来ないからな。持ってみて、少し重い位がいいだろう。あるいは、リーチの長いもの。使いこなせば、その方が良

い。女は体格でどうしても劣るから。旭：は、学校で剣道をやったか？」

「少しな。だが、実用的なレベルにはほど遠い。」

「まあ、そうだろうな。けど、もしも竹刀の振り方に慣れてしまったのならば、あれに近いものを探せ。まだいくらでも他のものに適応できるというならば、何でも良い。ああ、ただ、余り刃の大きいものには手を出さない方が良い。あれは、使いこなすまでに時間が掛かる。」

「分かった。」

旭先輩は頷いて、直ぐに物色し始めた。椎奈の説明を頭の中で繰り返しながら、私達も探す事にする。

少しして、柄が長くて刃が少しカーブしたものが目に入った。手に取ると、思ったよりも軽い。しかも持ちやすかった。

「私これにする。」

そう言って椎奈に見せた。椎奈が意外そうな表情を浮かべた。

「確かにリーチの長いものが良いとは言ったが…、扱いに慣れるまで、少しかかるぞ？」

「私、おぼあちゃんが薙刀の師範で、ちょっとだけ習った事があったの。」

そう言っって、昔習った構えを取ってみせる。椎奈が感心したように頷いた。

「ああ、それなら問題無さそうだ。それでいけ。」

椎奈の許可ももらったので、詩緒里の刀探しに付き合う事にした。

「どれも同じに見える…。」

「いや、だいぶ形は違うから。」

詩緒里の頼りなげな呟きに突っ込みながらも、言いたい事はよく分かる。私はたまたまおばあちゃんに習っていたから良かったものの、そう出なければ途方に暮れていたに違いない。

ずらりと並ぶ剣の中には、日本刀のようにカーブのあるもの、西洋剣のような真っ直ぐで細いもの、やたらめったら刃の部分が大きいものなど、本当にいろいろある。こういう世界って、西洋剣しか無いっていうイメージがあったから、ちょっと意外。

「…ん？ 椎奈、これってどう使うの？」

30センチくらいの長さで、真ん中に持ち手のある剣だった。何だか、振り回したら危なさそうだ。

「へえ、こんなものまであったか。」

それを見た椎奈が、興味を引かれたように呟いた。私の手から取り、少しもてあそぶ。

「使ってみせるのが一番だろうが…、人が多いな。」

椎奈が溜息をつくので振り返ると、いつの間にか注目を集めていた。騎士さん達が少し離れた所で、私達を囲むようにしてこちらを見ている。

「姉ちゃん、それ、使えるのかい？」

セヴェリオさんが椎奈に尋ねた。他の人たちも驚いたような顔をしている。

「…まあ、似たようなものは扱った事がある。真似事くらいは出来

るだろう。」

そう言うと、人垣が割れた。奥には束ねた藁が3つ。やってみろという事らしい。

椎奈は軽く息を吐くと、歩き出した。面白そうなので、詩緒里とふたりでついていく。

「古宇田と神門は、そこで止まれ。完全には制御出来ない。」

椎奈はそう言って、立ち止まった私達の所から更に10歩程歩いて止まった。それでも藁からは、まだ結構距離がある。少なくとも、あの場所からでは切る事は出来ないはずだ。

椎奈は、剣の感触を確かめるように持ち手を回した後、藁を見つめて息を細く吸い、止めた。誰もが息を潜めて椎奈を見つめている。

しばしの沈黙。

白く細い腕がしなり、ヒュンと風を切る音が闘技場に響いた。続いて、鈍い音が3度。

椎奈がもう一度腕を振った。その手には、さっきの剣が握られている。

藁は、上4分の1くらいがすっぱり切り落とされていた。

「お見事！」

誰かが声を上げた後、騎士さん達が一斉に拍手しだした。つられ

て、私と詩緒里も手を叩く。

椎奈は周りの賞賛に面食らった顔をした後、肩をすくめて私達の元に戻ってきた。

「まあ、こういうものだ。一度に多数を相手にするには便利だが、戻って来ないと丸腰になる。何より、正確に投げるには練習が必要だな。神門はこれにするのか？」

「……うん、無理だと思う。」

詩緒里が苦笑して首を振った。うん、こんな危ないブーメラン、やだよね。

その言葉に椎奈は軽く首を傾げたが、何も言わなかった。他の剣に目を移した後、1つを手にとった。

「なら、これはどうだ？」

日本刀に似た剣だった。でも、日本刀より細いし、持つ部分が柄に向かっていくうちに少し細くなっている。

「苗刀、というべきか。日本刀より軽量で扱いやすい。使用目的も広い。割と扱いやすいと思うぞ。」

そう言って、椎奈は剣を詩緒里に手渡した。詩緒里はおそろおそろの受け取り、何度か振った。見た感じ、振り回されている感はない。

「うん、これなら出来るかも。」

そう言って、詩緒里はほっとしたように笑った。椎奈が頷く。

「出来れば、さっきのと両方扱うと良い。神門の魔術属性は風だろう。魔術で操れば、かなり応用範囲の広い武器になる。」

「あ、そっか。うん、やってみる。」

詩緒里が感心したように頷いた。私も、その手があったかと密かに驚く。

「旭は決まったのか。」

「ああ。」

そう言って旭先輩が手に持った剣を示した。やたらと柄の長い刀、と言えばいいのだろうか。私の選んだ薙刀を、柄を短く刃を長くすればああなるだろう。

「…長巻か。考えたな。」

いや椎奈、別に知識がある訳ではないと思うんだけど。

「少し振ってみたが、扱いやすい。これなら俺でも何とかなる。」

「一般の剣術とは少し異なるが…、まあ大丈夫だろう。薙刀術に近い。」

そう言って、椎奈が頷いた。

私は薙刀、詩緒里は苗刀―って、よく分からないけど、旭先輩は長巻―これも分からない―と決まった。詩緒里は投げ武器も一応手に取った。

武器選び（後書き）

こっちも登場人物紹介をするべきかどうか…
最近増えてきたなあとは思いますが。

拘り（前書き）

おかげさまで2000PVを超えました！本当にありがとうございます！！

これからも少しずつ頑張って参りますので、応援よろしく願います！！

拘り

「で、椎奈は？」

「…それが問題なんだ。」

そう言って椎奈が溜息をついた。ちょっと意外。真っ先に決める
とばかり。

「こんな事なら、決まった武器を修めるのではなかった。正直、ど
れも違和感が勝る。」

そういえば椎奈は、確かに先程から手に取って、振っては置き、
を繰り返していた。そうか、自分が今まで使っていたものが無いの
か。

「あんな変わった武器、あるはずも無いのは分かっている。他のも
の、使えない訳ではないが…。」

「普通の日本刀じゃ無いの？」

日本刀を構える椎奈って、イメージにぴったりなんだけど。

「だったら苦労しない。」

「そうだねえ。」

日本刀っぽいものならいくつかある。けれど椎奈はそれを手に取
らない。

不意に椎奈が、何かに気付いたように一点に目を止めた。近づき、
手に取る。

「…あるものだな。」

ちよつと感心したように呟く椎奈が持つのは、真っ直ぐな刀だった。結構長めで、詩緒里のよりも太い。

「直刃で諸刃、この重さ。こんなものを作る奴が、この世界にもいるとはな。」

椎奈が鞘を抜いた。鈍く光る刀身は、確かに峰が無い。軽く振った時の音からして、結構な重さがありそうだ。

「まあ、これなら良いか。」

そう言つて頷くと、椎奈は刀を鞘にしまった。

「…それにするの？」

「ああ。」

おそろおそろ聞く詩緒里に、あっさり頷く椎奈。旭先輩は驚いた様子が無い。使った所を見た事があるのだろうか。

それにしても…随分と物騒な感じの刀だなあ。

「お待ち下さい。」

不意に声が聞こえて、私達は一斉に振り返った。そこには、若い騎士さんが、厳しい表情で椎奈を見つめていた。

「その刀は、この世界でも特別なものです。異世界から来た方に、気安く扱って欲しくない。」

ザワリと、不穏な空気が闘技場に生じた。他の騎士さん達も、戸惑った表情を浮かべているものの、椎奈がそれを使うのを快く思っていないのは明らかだ。

椎奈は少し眉を上げ、さらりと言った。

「妙なことを言う。私はヘラーから、どれでも好きなものを使って良いと、選択権を与えられた。貴方達にあれこれ言われる筋合いは無い。」

「その刀は特別です。魔術師として特に優れ、神に選ばれた者のみが見える神剣。部外者に扱われていいものではない。」

敵意を剥き出しにするその言葉に、ちよつとむつとした。その部外者を連れてきたのはそっちじゃない！

「…神官であり、至高の魔術師のみが見える武器、か。これは言う程使い勝手の良いものではないんだがな。飾りか？」

椎奈が不可解だと言わんばかりの表情でそう言った。自分も使ってるんじゃないの？

「飾りとは無礼な！これは魔術を纏わせて攻撃でき、魔物の氣に冒される事の無い刀！ただの刀とは別格だ！」

椎奈の言葉に怒りだす騎士さん。余程思い入れのある刀みたい。

椎奈はと言うと、その言葉を聞いて眉をひそめ、刀をもう一度鞘から出した。

「…これに、そこまでの魔術耐性があるとは思えないのだが。2、3度使えば砕けるぞ。」

「それは椎奈の基準だ。」

椎奈と旭先輩が、私達にだけ聞こえる小声で会話を交わす。

「いや、この世界で最も優れた魔術師が使うのならば、これでは弱すぎる。」

「どれくらいの強度なの？」

納得できないと言った風情の椎奈に尋ねてみると、椎奈が首を傾げてから、答えた。

「アドラスでも、一度の戦いで、もしかしたらその途中で、使用できるものではなくなるだろうな。どう見ても飾りにしかない。」

「じゃあ、椎奈がこれを使うのはどうして？」

「私はこれを使った剣術を修めているというのがひとつ、これを使えば印を組む事無く効率よく術を使えるというのがひとつ。」

「あれ？壊れちゃうんじゃないかったの？」

「刀に霊力を流し込めば、碎ける。私の使用方法は、それとは別だ。」

「へー、いろいろあるんだね…。」

「…あの、椎奈、里菜。騎士さんとの話の途中だよ。」

詩緒里がおそろおそろ声を掛けてきた。振り返ると、騎士さんは頭から湯気を出すんじゃないかっていうくらい怒っている。

椎奈は刀を鞘に納め、騎士さんに語りかけた。

「まあともかく、私はこれにすると決めた。使いこなせれば問題あるまい。」

「ふざけたことを！セヴェリオから聞いた、貴方は魔術を使えないと！そのような役立たずにその刀を持つ資格は無い！！」

椎奈の火に油を注ぎ込むような態度に、騎士さんが大声を出した。他の騎士さん達も、不穏な空気を強く漂わせ始めている。

にもかかわらず、椎奈は平然と言葉を返す。

「成程、確かに私は、この国の魔術は使えない。だが、この刀の属性―貴方が言うものが真実ならば、だが―を考えても、私はこれを使いこなす事が出来る。貴方方が何と言おうと、私はこれ以外を使う気は、無い。」

「この、得体の知れないガキ風情が―！」

その言葉を聞き、詩緒里の方を向いて言った。

「椎奈がガキって言われるのを聞けるなんて、貴重かも。」

「…里菜、今気にする所はそこなの？」

「え？他に何かある？」

「…古宇田、神門。お前達は、ある意味怖いもの知らずだな。」

私と詩緒里の会話を聞いて、椎奈が呆れた口調でそう言った。椎奈に言われる事じゃないと思うんだけど…。

騎士さんを見ると、何か手を変な所に上げたまま、固まっていた。何だか、怒り最高潮って感じ。どうしたのかな？

「…侮辱に対して、怒るでも無く傷つくでも無く感心されたから、呆けている。」

よく分かっていない私を見て、椎奈が見かねた様子で教えてくれた。

「はあ。でも、貴重だと思うんだけど。」

「緊張感が欠落しているのかと思ったら、危機感が欠落しているようだな。」

椎奈が溜息まじりにそう言うので、もう一度騎士さんを見ると、剣を抜いて、こちらに走ってきていた。

おお、もしかして切り掛かろうとしてる？

それはそれで凄いけど。だって……

「椎奈、ちょっと良い？」

「何だ？」

それに対して刀を抜こうとした椎奈に声を掛ける。椎奈が怪訝そうな声を挙げて振り返るけど、私はもう駆け出していた。

「おい、古宇田！」

慌てた様子の椎奈の声。大丈夫だよ。

騎士さんは、思わぬ乱入に一瞬戸惑ったけど、迷わず私に標的を変えた。私が椎奈の仲間だからなのか、切り掛かってきたからなのか。どっちでもいい。

タイミングを計って、私は下段に構えていた薙刀を一気に振り上げた。鈍い衝撃が手首に伝わる。

薙刀は狙い通り、騎士さんの手首を峰打ちした。剣が横に吹っ飛ぶ。

驚きに棒立ちになる騎士さんから距離を取って構え、言ってみた。

「この程度で椎奈に偉そうな口をきくななんて、100年早い！」

「……里菜、言ってみたかったんだね、その台詞。」

絶妙のタイミングで詩緒里から声がかかった。だって、劇でもなかなか無い台詞だし。

「……このガキ！」

勿論そんな事情を知らない騎士さんは、侮辱されたと思ったらしい。十字を切って……って、ちょっと！

「『灼熱の火よ、彼の者に――』ぐあっ！」

呪文を唱えようとする騎士さんを、薙刀の刃の付いているのと反対側で思いっきり突き飛ばした。防具の上からだけど、不意打ちだったせいか、吹っ飛んだ。

床でぐったりしている騎士さん。かなり痛そうだけど、はっきり言って、あの近距離で火を浴びせようとした奴に、同情の余地はなかった。

拘り（後書き）

里菜は意外とやるんです。

ところで、詩緒里が後半、2回里菜にツツコミを入れています。が、実はこれ、現実逃避です。どういう意味かは…次回分かります。

激昂

その時、部屋の温度が急激に下がった、気がした。冷気の出所は、間違いなく私の後ろ。

「…ここでは、剣術の鍛錬を行うと聞いてきたのだが。私の記憶違いだったか？魔術の使えない者相手に中級の火属性の魔術を使うとは、随分紳士的だな。」

冷気の出所が、ドライアイスよりも冷ややかな声で語りかけた。ゆっくりと気配が近づいて来るのが分かる。

騎士さん達と一緒にそのまま固まっていると、冷気が直ぐ横で立ち止まった。横目で見て、直ぐに目を逸らした。

私は思う。魔物も魔王も怖くない。そんなよく分からないものより、今の椎奈の方がよっぽど怖い。

椎奈は、薄く笑みを浮かべていた。椎奈は普段、笑顔を浮かべない。椎奈が笑ったらさぞかし綺麗だろうなって思っていたけれど、これなら無表情でいてくれた方が良かった。

「私は王に伝えたつもりだったのだが。こちらに危害を与えようとした場合は、容赦しないと。ああそれとも、ここの訓練では、相手に殺傷性の高い攻撃をするのが常識なのか？それなら私も認識を変えなきゃだな。」

優しげに紡がれる言葉に、返事は無い。それはそうだろう、今何か言える人物なんて、私は1人しか知らない。

その1人を振り返って、後悔した。光速で前に向き直る。詩緒里の縫るような視線が追いかけてきたけれど、私にはどうしようもない。

旭先輩の目が、凶眼と化していた。苛烈かつ物騒な眼光が、騎士さんを射抜いている。椎奈を止めるどころか、一緒になって攻撃しかねない様子だ。

何でそんなに怒ってるの!?

詩緒里と同調して、心の中で叫ぶ。

前に私達が危なかったとき、旭先輩は椎奈を止めた。あの時は冷静そのものだったのに、何故か今は怒り絶頂。

椎奈の気配だって、殺気では無く、冷気だ。相手が弱く―私でも何とかなるんだもん、激弱だよ―危険性が低かったからだと思う。にもかかわらず、旭先輩は今まで見た事の無い、強い怒りを見せている。

(…リナよ。アサヒ殿は、先程の騎士の発言以来、ずっとあの様子だ)

何で何でとパニックっていた私に、ユウが語りかけてきた。騎士さんの発言?

大急ぎで記憶を巻き戻す。呪文を唱える姿、十字を切る姿、私に悪態、走って来る所、椎奈に―

（…もしかして、椎奈に「得体の知れないガキ」って言ったから？）
（そうだ。「役立たず」と言った時点で少し不穏な気配はしていた
が）

やっぱり旭先輩も、椎奈を侮辱されたら怒るんだね…。ちょっと
感動。

って、止める人無し！？

ここは決死の覚悟で止めるべきかと思ったその時、入り口から声
が響いた。

「何事ですか？」

アドルフさんだった。椎奈の冷氣に怯えているのは見え見えだっ
たけれど、それでも声を掛けてきた。

「大した事ではない。ここの剣術の訓練が、魔術を併用し、初心者
に火属性の魔法を浴びせるようなものだ」と知り、認識を新たにして
いた所だ。」

椎奈が相も変わらず優しい口調で答えた。普段の口調の方が怖く
ないのはどうしてだろう。

「…なんですか？」

アドルフさんの顔が一気に険しくなった。

「言葉の通りだ。先程彼が、古宇田に向かって中級の火属性の魔法
を浴びせようとした。まあ幸い、隙だらけの雑魚だったから古宇田
が防いだが、そのような訓練を行うのがここの常識ならば、私とし

でも態度を変えねばなるまいと思ってな。」

「：アーロン、それは本当か？」

険しさを増したアドルフさんが、倒れたままの騎士さん―アーロンさんと言うらしい―に詰め寄った。

「何なら魔術解析を行ったらどうだ？ 貴方ならそれが可能だろう。」
椎奈が淡々と言った。アドルフさんの対応がまともだった為か、冷気が随分と収まってきている。

アドルフさんは私を振り返った。問うような視線が送られてきたので、はっきりと頷く。

「この人最初、椎奈に切り掛かろうとしていて。私が薙刀で弾いたら、魔術を使おうとして来ました。咄嗟に吹っ飛ばしちゃいましたけど。」

「：いや、寛大な処置、感謝いたします。本来なら、大怪我させられても文句は言えません。」

アドルフさんが深々と頭を下げた。私と、椎奈に。

「この騎士団の隊長として謝罪申し上げます。あの愚か者にはきちり言い聞かせておきます。本当に申し訳ありませんでした。」

ちらっと椎奈を見ると、既にいつもの無表情に戻っていた。静かに口を開く。

「今回は何も無かったから良いが。ヘラー、魔術は殺傷性が非常に高い。ああいう戯けにはしばらく教えない方が良いぞ。そんなものより、あの悲惨な剣術を何とかするべきだ。」

：許してはいるんだけど、ものすごく辛辣な批評だった。まあ、お城を守る騎士が、私みたいな初心者にあっさり負けるのは確かにマズいよね。

「あ、私も別に良いです。魔術使おうとした時には焦りましたが、私が防げる程度だったんで。」

これが詩緒里相手に、詩緒里が怪我していたとしたら、一切の情け容赦なくぶっ飛ばしていたけれど。…あ、いや。その人の命があれば、だな。

激昂（後書き）

誰も気付かなかった怒りに始めから気付いていた哀れな詩緒里。それはまあ…、怖いですよね。

里菜は友達思いですから、詩緒里が怪我したら怒ります。…ただし、里菜が言う通り、その前に椎奈が黙っていません。

交渉とすれ違い

「…椎奈、その刀の件はどうするつもりだ。」

いつも以上に低い声が後ろから聞こえてきた。その声を聞けば、まだあの目をしているのが容易に分かったので、絶対に振り向かない。

旭先輩の声に、椎奈とアドルフさんが同時に振り返り、同時に驚いた顔をした。アドルフさんは怯えが多分に含まれているけれど、椎奈は純粹にびっくりしていた。

―椎奈、気付いてなかったんだね。

「……ああ、そうだったな。ヘー、私はこれを使うつもりだが、その戯けを含め騎士全員が反対しているようなのだが。」

未だ驚いた顔のまま、椎奈がアドルフさんに持っていた刀を見せた。いつの間にか鞘から抜かれていた理由は――考えるまい。

「…貴方は、これが使えるのですか!？」

更に驚くアドルフさん。椎奈が頷くと、少し考えた後、こう言った。

「それは確かに、この世界の人間にとって、特別なものです。ですが、貴方がこれを使えるというのならば、構わないと思います。」

「隊長!ですが…」

「黙れ。」

アールンさんの反論を、アドルフさんが一言で黙らせた。アドルフさんは真剣そのものの表情で椎奈に言った。

「ただし、ひとつお願いがあります。本当にそれを使いこなせるのかを、見極めさせていただきたい。」

椎奈が意外そうな顔をした。

「構わないが…、方法は？」

「私と手合わせ願いたい。」

「断る。」

アドルフさんの自信に裏打ちされた申し出を、椎奈は速攻で取り下げた。

「私は無駄な戦いを好まない。それに、私達は剣術の鍛錬をしに来た。なのに今日は、素振りさえ出来ていない。私や古宇田はともかく、旭と神門は初心者だ。少しでも練習させたいこの状況で、模擬戦をしている時間など無い。」

「ならば、その使用は認められません。」

アドルフさんが、先程とは打って変わって敵意の含んだ目をしていった。どうやら、あの刀は余程特別なものらしい。だったら最初から選択肢から外しておけば良かったのに。無ければ椎奈だって諦めただろうし。

椎奈は溜息をついて、言った。

「要するに、使えたと証明すれば良いのだろうか？ならば、あれを使おう。」

そう言うのと椎奈は、さっき使った藁を指差した。

「ヘラー、貴方はあれに、貴方が出来る限り最高の防御魔術を掛ける。私がこの刀で、それを打ち破る。貴方の魔術の上からあの藁を切る事が出来たら、使いこなせると言っていいたいだろう。」

「ちょ、ちょっと待て、姉ちゃん！」

セヴェリオさんが慌てたように椎奈に声を掛けた。

「隊長は、この国でも5本の指に入る魔術師だ！それも、防御魔術は隊長の十八番！いくらその刀を使っても、魔術も使えない姉ちゃんが破るのは無理だ！」

アーロンさんがそれに続いた。

「異世界から来た勇者と呼ばれているからといって、いい気になるな！我々の与り知れぬものなどが、隊長に偉そうな口を叩くんじやない！！」

私なんかに負けたくせに偉そうな人だ。流石に腹が立ったから、一言言ってやろうと、口を開いた。

その時、くつと低い笑い声が響いた。椎奈、では無い。

「…椎奈、そろそろその馬鹿共に、現実を見せてやったらどうだ？情報が漏れるのを恐れるのは良いが、実力が無いように思われると、今後に影響する。」

憐れみさえ含んだようなその声に、ゆっくりと振り返った。

振り返っちゃいけないって思う時に限って、首が勝手に振り返って、ホラーとかでよく言うよね。私は初めてそれを体験した。

「魔王」が、そこに立っていた。隣で詩緒里が、泣きそうな顔をしている。こっちに逃げて来る事も出来ない様子だ。

「魔王」―旭先輩は、口元を僅かに歪め、先程よりも更に苛烈な光をその目に宿らせて、言った。

「アーロン、と言ったな。先程から貴様、随分と分かったような口を聞くが、貴様が何を知っている？他人を侮辱するからにはそれだけの根拠があつてしかるべきだが、貴様にそれはあるのか？」

旭先輩が、いつもよりも遥かにゆっくりと言葉を紡ぐ。一言一言に、相手を黙らせるだけの威圧が込められていた。

アーロンさんは、さっきの椎奈よりも遥かに濃密な怒気に当てられて、顔が蒼白になっている。アドルフさんも、今度ばかりは何も言えないようだ。

で、これを止められる椎奈はと言うと…呆気にとられていた。どうして旭先輩がそれほど怒っているのかさっぱり分からない、と言った様子。私でも分かるのに。

旭先輩の言う分かったような口というのは、間違はなく「得体の知れないガキ」だの「与り知れぬもの」だの、椎奈を指す侮辱だ。

つまり旭先輩は、アロンさんが椎奈を侮辱したから怒っている。誰が聞いたってそれくらい分かる、のだけれど、肝心の椎奈がそれを分かっていない。

今度こそ、止める人がいない。何かいい方法…あ、そうだ！

急いでユウに話しかけた。

（ねえユウ、椎奈とこうやって口に出さずに話できる？）

（…今なら届く、やってみよ）

ユウの力を借りて、椎奈に話しかける。

（椎奈、聞こえる？）

椎奈の腕が、ぴくりと動いた。

（古宇田か。どうした）

通じた！ユウに感謝しながら、椎奈に話しかける。

（旭先輩を止めて。あのままだと攻撃しかねない）

（旭がそういう事をするとは余り思えないが…。そもそも、旭は何故怒っているんだ？旭が怒っている所なんて、初めて見た）

椎奈から届く声には、戸惑いと驚きが色濃く見えた。私も初めて知った。椎奈って、天然だったんだ。

（それを説明するのも時間が惜しいから、とにかく止めて！）

（どうすれば止まるのかもよく分からないが…、ともかく話を進めようか）

相も変わらず困ったような響きで答えて、椎奈は声を張った。その声はいつも通り冷静だった。流石は椎奈。

「ヘラー、提案を受け容れるのかどうかは、貴方が決めろ。貴方が判断する事だ。」

椎奈の声に、アドルフさんが振り返った。未だ動揺しまくった顔をしていただけれど、少し考えて頷いた。

「：良いでしょう。私は、その刀を使いこなせるかを見たいだけです。シイナ様は異世界の方。我々の常識を押し付けるのも筋違いだ。たとえ魔術が破れなくても、刀の扱いが完璧ならば、認めましょう。」

「随分と寛大な判断だな。まあ良い。ただし、防御魔術は手抜きをしないでくれ。どれだけ時間をかけても良いから、貴方の全力で藁を守れ。」

「：分かりました。今まで部下がさんざん無礼を働いたお詫びとして、私の最大級の誠意を見せましょう。このままでは近衛騎士団として、余りに恥晒しだ。」

そう言うのと、アドルフさんの顔つきが変わった。今までは「隊長」だったのが、1人の「魔術師」になった。そんな感じだった。

「10分程いただきました。魔法陣を使う為、そのくらいの時間を要します。」

「分かった。」

椎奈が頷いたのを見て、アドルフさんが作業に取りかかった。何事か呟きながら、藁の周りに線を引き出した。

「戻ろう。魔術を使うのをじろじろ見るのは、無作法だ。」

椎奈が私にそう言って、旭先輩達に近づいていく。その勇氣に尊敬しながら、椎奈の後に続いた。詩緒里が、明らかにほっとした表情を浮かべている。

「：椎奈。まさかとは思うが、事ここに至って力の出し惜しみをするつもりではないだろうな。」

旭先輩が目を見詰めて椎奈を見据え、相変わらずの低い声で聞いた。椎奈は小さく溜息をついて、答えた。

「本来、ここで力を見せるつもりは無かった。余り目立つのも好ましくないからな。まあ、きちんと魔術は破るから安心しろ。私としても、この刀を使いこなせていないと見られるわけにはいかない。師匠の顔に泥を塗るつもりは無い。」

そこで一旦言葉を区切り、椎奈は眉をひそめた。

「だが、旭。何を熱くなっている？ただ雑魚が吠えているだけだ、私達がいちいち相手をする必要はない。感情的になるなどは、旭の言葉だ。」

「：椎奈は、何故怒らない。」

旭先輩が、不自然に抑えた語調で尋ね返す。椎奈は怪訝そうな顔で答えた。

「言ったはずだ、雑魚の言い分、それも負け犬の遠吠えなど、耳を傾けるだけ時間の無駄だと。旭が熱くなるほどの価値など、あの戯けには無い。」

「…お前は、」

「ねえ、椎奈。椎奈の師匠って、誰？」

いきなり割り込んだ私に、椎奈も旭先輩も面食らった顔をこちらに向けた。詩緒里でさえ、支持していいのかどうか、迷ったような顔で私を見つめている。

詩緒里の言いたい事は、分かる。これは椎奈と旭先輩の問題だ。私が入る余地など無いし、邪魔をするのなんてもってのほかだろう。

けれど。今2人には、大きな認識のずれがある。少なくとも椎奈が、旭先輩が怒っている理由が分からなければ、旭先輩の想いを受け止め、宥める事など出来ない。だからといって、今ここ、旭先輩の前でそれを説明する訳にもいかない。だから、やってはいけなさと分かっている、割って入った。

「……刀の師匠も術の師匠も、同じ人物だ。私はその人から戦う術を全て学んだ。師匠を侮られるような真似だけは、するわけにはいかない。」

面食らった顔のまま、椎奈が質問に答えてくれた。

「そっかー。凄い人なんだね。どんな人？」

今自分が出せる一番明るい声で聞いた。椎奈が困惑した顔で黙り込む。少しして、ゆっくりと答えた。

「立派な人物だった。実力も、その心も。師匠には、本当に多くの

事を教えてもらった。――私には、それを全て学び取る事は出来なかったがな。」

そう言う椎奈は、どこか遠くを見るような目をしていた。その目に映るのは――後悔？

その色に気付くと同時に、椎奈の言葉が過去形だった事に気付いた。つまり、その人は――

椎奈の剣術（前書き）

どうせなので、派手にしてみました。

椎奈の剣術

「シイナ様、お待たせしました。こちらの準備は整いました。」

その意味を察すると同時に、アドルフさんが声を掛けてきた。

「もう良いのか？」

椎奈が振り返って、アドルフさんに尋ねた。アドルフさんは、「魔術師」の顔のまま、自信を持って頷いた。

「今の私が出る、最高の防御魔術です。この国随一の神官にも張り合えるでしょう。」

「アドラスに対抗できる魔術、か。大きく出たな。」

そう言って椎奈は、刀を手には歩き出した。向かうのは、騎士さん達のいる先にある、藁の元。

私達も付いていった。旭先輩も、少し気持ちが鎮まったのか、雰囲気普段のそれに戻り始めていた。

（里菜、凄い）

不意に詩緒里の声が頭に響いた。すかさずユウの力を借りて、答えた。

（あれで良いかは、分からない。でも、あのまま話を続けてたら、平行線だと思って。：でもその分、椎奈に余計な事思い出させちゃった気もする）

（え？）

（気付かなかった？まあいいや、後で話すよ。その前に、椎奈に説明しなきゃだろうけど）
（そうだね）

詩緒里の苦笑混じりの返事が返ってきた時、椎奈が立ち止まった。私達も立ち止まる。

「ほう、これは…。予想以上だな。」

椎奈の口から感嘆の声が漏れた。旭先輩も、驚嘆の眼差しで藁の周りを見つめている。

藁を見てみる。ぱっと見、特にさつきと違うようには見えない。

だけど。何となくでしか無いけれど、言葉にならない、強力な何かが藁を守っている、そんな気がした。その何かは、儀式の時にエリーさんが見せたものに、どこか似ていた。

「防御魔術には、自信があります。貴方がどれほどのものを考えていたのかは分かりませんが、この国随一の魔術師でも、これを破るのは苦勞するはずです。」

アドルフさんの言葉には、実際に戦って自信をつけた者特有の響きがあった。

「失礼した。どうやら私は、貴方を甘く見ていたようだ。…これは私も、態度を改めなければなるまい。」

どこか楽しそうな声でそう言う椎奈の顔をちらりと見る。思わず息を呑んだ。

椎奈は、今まで一度も見た事の無い顔をしていた。好戦的な、強い意志の宿った顔。今まで見たどの顔よりも美しかった。

「ヘラー。最後に2つ確認したい。まず、この世界でのこの刀の使用方法は、魔術を纏わせて、つまり、魔力を込め、振りながら魔術を放つというものだな？」

「…その通りですが。」

唐突な問いかけに戸惑った顔のアドルフさん。何を今更って顔だ。

「そうか。ではもうひとつ。この刀、予備はあるのか？ いや、違うな。今私が持つこの刀は、この城にある中で最も強度の低いものだろう？」

「何故、それを……。」

明らかに驚いた顔のアドルフさんを見て、椎奈が満足そうに頷いた。

「それを聞いて安心した。」

そう言って、椎奈が刀を抜いた。藁を見据え、ゆっくりと構えた。

「椎奈。」

不意に、私の隣でその様子を見ていた旭先輩が、椎奈に声を掛けた。椎奈は目だけをこちらに向けた。

「壊すなよ。」

その言葉を聞いた途端、椎奈がちょっと不満げな顔をした。

「それくらいの加減は出来る。」

「そうか。」

…何だか、聞いてはいけない事を聞いてしまった気がするのですが。

椎奈達の会話を聞いた騎士さん達は、馬鹿にしたような顔をしている。若造が粹がって、て感じ？アドルフさんは、余程信頼されているみたい。

アドルフさんと言うと…表情が変わっていた。椎奈の様子に、何か感じたものがあるらしい。椎奈の構えを、食い入るように見つめている。

椎奈が藁に向き直り、構え直した。右手で刀を握り、左手は添えるように。背筋は真っ直ぐ伸びていて、体のどこにも無駄な力が入っていない。ほとんど素人の私が見ても、綺麗だと感じた。

椎奈が細く息を吸い込む。ブーメランもどきの剣を投げた時よりも、遥かに集中しているのが分かる。

不意に、不自然な風の流れを感じた。椎奈の周りの空気が震えて生じているかのような、不思議な風。

それを見た途端、騎士さん達がざわめいた。誰もが驚愕の表情を浮かべている。

椎奈の持つ刀が、うつすらと青い光を帯びだした。祈り場で見たのと同じ光。

椎奈が息を止め、完全に静止した。緊迫した空気が闘技場を占領する。

次の椎奈の動きは、見えなかった。

風が引き裂かれるような音が響き、続いて突風が巻き起こった。思わず目を閉じる。

次に目を開けた時に見たのは、何事も無かったかのように構えを解いた椎奈と、粉々になって床に舞い落ちる藁だった。

「…思ったよりも良い刀だったな、これは。」

椎奈がそう言って、手元の刀の柄を見やった。よく見れば、椎奈の周りに小さな金属が散らばっている。

「壊さない程度に加減をするんじゃないかったのか？」

誰もが言葉を失う中、平然と掛けられた旭先輩の言葉に、椎奈が顔を顰めた。

「刀の事だったのか？ 闘技場の事だと思った。」

旭先輩が溜息をついた。

「予備の確認をしたから、嫌な予感はしていたのだが…」

「あれほどの防御魔術だぞ。この程度の刀、碎ける位魔力を込めなければ破れない。」

「お、お待ち下さい！ 今、何をなさったのですか！？」

ようやく言葉を取り戻したアドルフさんが、椎奈達の会話を遮った。椎奈が首を傾げる。

「見ての通りだ。刀に魔力を込めて魔術を発動し、貴方の魔術を破った。」

その答えに納得できないらしく、アドルフさんがなおも言い募る。「馬鹿な！ 私が張った魔術は、多人数の魔術師から身を守る為のものです、それを刀の一振りで破ったというのですか？」

「見れば分かるだろう、そんな事。他に何かやったように見えただけ？」

私は何も見えなかったけどね。

「まあ、やり方はどうでも良い。それで？私にこれの――と言っても、替えを貰わねばならないが――使用を認めるのか、否か？」

実にどうでも良さそうにアドルフさんの追求をあしらうと、椎奈は刀の使用の是非を訊いた。

「……なあ、姉ちゃん。姉ちゃんホントに、16か？」

セヴェリオさんがおそろおそろ尋ねたその内容に、椎奈が眉間にしわを寄せた。

「私の国では一応、女性に年齢を聞くのは失礼に当たるのだが…、まあ、その通りだ。それでヘラー、どうするんだ？」

「女性」の下りで地味に驚く騎士さん達を無視して、椎奈がアドルフさんに重ねて問いかける。

アドルフさんは、いきなり姿勢を正し、騎士の礼をとった。

「今までの度重なる無礼、誠に申し訳ありませんでした。シイナ様は間違いなく、この刀を使うに相応しい方。どうぞお使い下さい。」
「理解してもらえてよかった。」

椎奈が肩の力を抜いた。余程あの刀にこだわりがあるみたい。使えと分かって、明らかにほっとしている。

これでこの場は収まった、と誰もが思った。

椎奈の剣術（後書き）

認識のずれが大きいですね。

ただし、口ではああ言っていますが、旭も刀が壊れる事は承知の上です。

誹謗とそれぞれの怒り

その時。

「魔物だ！ あれは、魔物に違いない！ あれだけの魔力を、人間が持てるはずが無い！」

アロンさんだった。椎奈を指差し、どこか怯えた表情で叫んでいる。当の椎奈は、興味の無さそうな顔をして、それを見やっていた。

「魔王を倒す勇者どころか、魔王の手先だ！ 今直ぐあの化――」

その瞬間、アロンさんが吹っ飛んだ。ユウの時よりも、遥かに速いスピードで壁に叩き付けられた。そのまま張り付けられたように動かない。みしみしと、嫌な音が聞こえて来る。

「……言っただが。他人を侮辱するには、それなりの根拠を持つと。そこまで言うからには、覚悟が出来ているのだろうか？」

凄まじい怒気を含んだ声が闘技場に響き渡った。椎奈の時に似た不自然な風が、更に激しく舞っている。

アロンさんは息が出来ないのか、だんだんと顔が青くなっている。

「旭、よせ！」

椎奈が叫び、バチツという音とともにアーンさんが床に落ちた。
椎奈が旭先輩の魔術を止めたらしい。

「椎奈、止めるな。あれを潰す。」

「よせと言っている！あの戯けに、旭の手を汚す価値はない！」

剣呑な声で物騒な事を言う旭先輩の腕を、椎奈が抑えた。

「アーン、いい加減にしろ！」

アドルフさんが怒鳴った。怯え切った顔のまま、アーンさんの
元に駆け寄る。

「アサヒ様の言う通りだ、何の根拠も無しに失礼な事を言うんじゃない！シイナ様に謝れ！」

「…でき、ません。隊長だって、分かっているでしょう。あの魔力
が、異常である事位。それを―」

「黙れ！」

アドルフさんが腕を一閃した。鈍い音がして、アーンさんがそ
の場で伸びる。

「旭、やめろ！」

なおも前に出ようとする旭先輩を、椎奈が押し戻した。

「ヘラー、今日のところは帰る。その戯けは二度と私達の前に姿を

見せさせるな。後、明日までに私の刀を用意しておいてくれ。」

早口にそれだけ言うと、椎奈は旭先輩を無理矢理部屋から押し出した。

2人が出て行くのを呆然と見ていた私は、詩緒里の声で我に返った。

「私達も帰ります。この剣はどうすれば良いですか？」

アドルフさんは心からすまなさそうな顔で振り返った。

「そちらに置いておいて下さい、私が管理します。それから、出来ればあのお2人に、謝って済む事ではありませんが、本当に申し訳ないとお伝え下さい。」

「分かりました。」

詩緒里と一緒に、闘技場の奥にあった棚に薙刀を置いた。いつの間にか預かっていたのか、詩緒里は旭先輩の分の剣もそこに置いた。

そのまま部屋を出ようとして、詩緒里が逆方向に歩いている事に気付く。

「詩緒里？ 出口、こっちだよ？」

「うん、もうひとつ用事。」

詩緒里が静かな声で答えるので、小走りで横に並び、一緒に歩いた。前を向いて気付く。向かっているのは、アーロンさんの所だ。

詩緒里は、アーロンさんの前で足を止めると、黙ってアーロンさんを見下ろした。アーロンさんは壁にもたれて座り込んだまま、顔を上げた。

「…さっきの発言で、何か言う事は？」

詩緒里が静かに問いかけると、アーロンさんは口元を歪めた。

「貴女は知らないのですか？人が持ちうる魔力には、限度がある事を。あの魔力はそれを遥かに超している。あの男性もそうですね。あれは間違いなく、人ではありません。知らなかったのなら、氣をつけた方が良い。あれは―」

ぱしっと、乾いた音が闘技場に響き渡った。詩緒里が、手を高々と振り上げて、アーロンさんの頬を張った音だ。

「…今のは、私が友人を侮辱された分です。」

もう一度手を振り上げ、先程よりも強く頬を打つ。

「今のは、旭先輩を侮辱した分。そして―」

「あ、ちょい待ち詩緒里。それは私もやりたい。」

三度手を振り上げた詩緒里に声を掛けると、詩緒里が振り返り、

頷いた。

2人で握りこぶしを作る。私は右、詩緒里は左。

掛け声も無しかったけど、全く同じタイミングで、私達はアーロンの顔を両方からぶん殴った。骨にひびが入る音がしたけれど、罪悪感はないだった。

「—今のは、椎奈が感じた痛みの方です。私達の力では、遥かに足りませんが。」

「まあ、旭先輩が随分やってくれたしね。これくらいで勘弁しといたげる。」

「ですが、次に椎奈達を侮辱する言葉が私達の耳に入った時には、椎奈に学んだ剣術の全てをもって、貴方を叩きのめします。」

詩緒里は最後まで静かな語調でアーロンさんを脅迫した。アーロンの顔に、恐怖が走る。

それ以上何も言わずに、私達は部屋を去った。

誹謗とそれぞれの怒り（後書き）

椎奈は幸せもの…と言っているのか微妙ですが。

平静と、初めての賞賛（前書き）

ごめんなさい、今回ちょっと短めです。

平静と、初めての賞賛

部屋の外で、椎奈が待っていた。腕を組み、無言で私達を見つめている。旭先輩の姿は、無い。

「椎奈、旭先輩は？」

詩緒里がそっと尋ねた。顔はとても心配そうだ。さっきまでの静かな怒りが嘘のよう。

「部屋を出るなり、何も言わずにさっさと行ってしまった。古宇田達を待たないといけないし、旭がここに戻ってきてまた騒ぎを起こすと厄介な事になるからな、ここで待機していたんだ。…それにしても、随分かったな。何をしていたんだ？」

椎奈が質問に答え、自分が今ここにいる理由まで説明してくれた。その顔に、怒りや哀しみは見えない。普段通りの椎奈だ。

「…あのさ、椎奈。ちょっと話を―」

「いや、いい。古宇田、ひとつだけ聞かせてくれ。先程―私が防御魔術を破る前の事だ―に旭が怒った理由は、「得体の知れない」、そして、「与り知れぬもの」、この言葉か？」

私の言葉を遮り、椎奈が質問の形で確認してきた。黙って頷く。それを見た椎奈は、額に片手を当てて溜息をついた。

「…あの馬鹿。」

様々な感情が渦い交ぜになった顔と声で呟いて、椎奈は身を翻した。

「行って来る。」

「場所は分かるの？」

旭先輩の所というのは聞くまでも無かったから、そっちの心配をした。

「ああ。旭の霊力は強いからな、少し気を凝らせば分かる。古宇田達は部屋に戻っていてくれ。後2時間もしないうちにサーシャが迎えに来るだろう。その頃までには戻れると思うが、戻っていないければ先に移動してくれ。大体の場所は見当がついているから、そちらで合流しよう。部屋までは帰れるな？」

「うん、大丈夫だよ。椎奈、早く行ってあげて。」

詩緒里がきっぱりとした口調で言った。顔は相変わらず心配そうに椎奈を見つめている。

「分かった。じゃあまた後で。」

椎奈は頷き、歩き出した。数歩も歩かないうちに、ふと何かを思い出したかのように立ち止まった。そのまま振り返る。

「言い忘れていた。古宇田。」

「何？」

いきなり指名されて、ちょっと緊張しながら答えた。

「先程の薙刀、見事なものだった。」

「え？」

耳を疑った。確かに上手く弾く事が出来たけど、それは相手が弱かったから。だからこそ、聞き違いだと思った。

「構えを見た時から、それなりに経験を積んでいるのは分かっていたが、走っていく時の薙刀の握り、攻撃の後の残身。どちらもきちんとして型を守った、流れのいい動きだった。隙も少ない。良い師匠

を持ったな。」

けれど椎奈は、重ねて私に賞賛の言葉をかけてくれた。その顔には、私を侮っている様子は無い。私の実力を認めてくれていると、分かった。

「…ありがとう。」

胸がいっぱい、言葉が上手く出て来ない。やっこの思いで、それだけを口にした。

「…礼を言われる事ではないのだが。」

そう言って椎奈は肩をすくめ、今度こそ振り返る事無く歩き去った。

平静と、初めての賞賛（後書き）

登場人物紹介、第一話の所に入れてみました。こういう風を書くべきがよく分からなかったもので、ちよつとぐちゃぐちゃですが…興味のある方は、見てみて下さると嬉しいですよ。

初めて知った、感情（前書き）

すみません、更新遅くなりました…

初めて知った、感情

数多く存在する魔力の流れの中から旭の霊力を探し出し、歩調を早めて追った。旭はかなりの速度で歩いている。少しずつ距離を縮めていくその途中で、旭の行き先は大体見当がついた。

裏庭の奥、常緑樹の森の中。そこで旭に追いついた。もう私の気配には気付いているであろう旭は、しかし立ち止まる事無く、森の奥深くへと入っていく。

15分程歩いただろうか、城からの目が完全に届かない所まで来て、旭はようやく立ち止まった。そのまま、近くにあった切り株に腰掛ける。

「旭。」

呼びかけに、返事はない。構わず近付き、旭の隣に座った。隣――つまり、互いの表情が見えない位置に。

そのまましばらく、自然が奏でる音楽に耳を傾ける。私は別に自然美を愛でるような感性など持ち合わせてはいないが、こういう場所が澄んでいる。普段から邪気や鬼気や妖気や瘴気に晒される事の多い私にとっては、身を清められるような気がする空間だ。素直に安らぐ事が出来る。

それに――こういう場所は、名と共に過去を捨てた私に、ほんの少し、郷愁を感じさせる。

旭もまた、こういう場所が好きだ。私のように、郷愁を感じるのだろう。―郷愁と言っても、私とは随分異なるものだが。

互いにしばらく澄みきった気を浴びた後、私は静かに口を開いた。

「らしくないな、旭。旭は他人に期待をしない。他人に期待をしないという事は、誰が何を言おうと何をしようと、どうでも良いという事。その旭が他人、それも、あんな戯けの寝言にあれほど怒るとは、夢にも思わなかった。」

「：お前は、何故平気な顔をしている。」

旭が怒りを抑えた低い声で、あるとき古宇田が遮った言葉を口にした。先程のように怒気を放つ事も無いが、未だ心中穏やかではないらしい。

こちらに来てから、旭の意外な一面に驚かされるばかりだと思いつつ、あえて軽い口調で答えた。

「まあ事実、私の霊力は規格外だ。旭だって、私のことを非常識だとよく言うじゃないか。旭は単に常識からずれていると認識するだけで終わるが、通常人間は、常識が通用しない相手を気味悪がるもの。この世界に於ける人間の理から外れた存在が魔物と呼ばれても、何も不思議ではない。」

再び怒気を露にしだした旭をそのままに、私は肩をすくめた。

「ああ、旭は始めてだったか？私が他の人間に、人ではないモノ扱いされるのを見るのは。そういえば以前の世界では、せいぜい妖が私を罵倒する位だったな。だが、私にとっては、あれが日常だ。」

旭がこちらを向いたのを視界の端で捉えた。物静かな瞳が私の横顔を見つめているのを感じながら、淡々と言葉を紡ぐ。

「旭は、私を化け物じゃないと言ってくれたな。だが、他者に災いをもたらすモノが化け物呼ばわりされるのは当たり前だ。化け物、妖、魔物、まあどう呼ぼうが自由だが、とにかく人の理に当てはまらないモノという事には変わりがない。旭だって、見る人が見れば、化け物の力を持つという事になるのかもしれない。…まあ私の場合は、旭のような「化け物と呼ばれる力」を持つ者達から見ても、化け物なのだが。」

内容だけ聞けば自嘲か同情を買う言葉と勘違いされそうだが、これが私の常識だ。今更この程度の事で傷つく心など、持ち合わせてはいない。

「お前は、」

「事実だ。私をある程度知った上で化け物と言わなかった人間は、いや、人間だけに限る必要は無いな、私というモノを知って化け物呼ばわりしなかった存在は、両手で数えれば指が余る程しかない。そして、その中で未だに生きている人間は、たった2人だ。それも1人は、神に愛されし者。私のもたらす災いごとき、浴びる心配の無い人間だ。そしてもう1人は、今私の隣にいる。その事自体が、奇跡だ。」

未だに不安は消えない。いつかまた、私のせいで傷つくのではないかと。彼から全てを奪い、死に陥れてしまうのではないかと。どれだけ否定されても、大丈夫だと言われても、胸の奥でいつも不安は燦っている。

「私は化け物。それは、私の周りにいる存在にとっても、私自身に

とっても、常識だった。それを否定した人間には、以前出会った。
「だが、私が化け物と呼ばれて怒ってくれたのは、旭が初めてだ。」
「…椎奈。」

「正直、驚いた。旭が怒るという事さえ驚愕に値するというのに、その理由が、私が人扱いされなかったからだ、なんてな。本当に驚いた。そして、――本当に、嬉しかった。」

喜ぶ資格なんて無いだろう。桁外れの霊力を持つ上、災いをもたらす私を恐れ、弾劾しようとするのは、生存本能上、どうしようも無く正しい。他人が私を化け物と呼んだからって、それを責められるはずがない。責めていいものでもない。

――だが、それでも。旭の激昂が、どうしようもなく嬉しくて。こんな私の為に怒ってくれる人がいるという現実が、信じられなくて。旭を止めるのが遅れてしまう程、心が震えた。

こんな時、どう言えば良いのだろう。嬉しさと、喜びと、この上ない安堵と。感じた事の無かった感情が胸の中で渦巻いている。どう言ったら、この感情を伝えられるのだろう。どうしても分からない。どれだけ考えても、思いつかない。

だから、拙い言葉を精一杯紡いだ。不器用で、要領を得ない内容である事は分かっている。16とは思えない程稚拙なもの、重々承知だ。

それでも、この想いを、ほんの一部でも伝えたくて。旭に、少しでも感謝を伝えたくて。今私に言える全てを、言の葉に乗せた。

―まだ、言霊を響かせる事は、怖くて出来ないけれど。いつかこの想いを伝えるのに相応しい言葉が見つかった時には、私はその言葉に言霊を込めてしまうのかもしれない。それがどれだけ危険な行為か、分かっているけど、なお。旭を危険な目に遭わせてでも、旭に想いを伝えたいと願ってしまう気がした。それほどに、先程の旭の怒りは、私の心を揺るがせた。

「…本当に、嬉しかったんだ。」

もう一度だけ繰り返して、私は口を噤んだ。少ししゃべりすぎたと気付き、恥ずかしくなったのがひとつ、感情が高ぶって、言葉に詰まったのがひとつ。

しばらく、耳に入るのは木の葉の擦れる音だけだった。

やがて、小さな溜息が微かに聞こえた。

「…全く、お前は本当に――」

「…え？」

旭の小さな呟きは、風に攫われて聞こえなかった。

「…いや、何でも無い。」

小さく首を振って、旭は私の肩に腕を回してきた。逆らわず、私は体を旭にもたせかけ、静かに目を閉じた。

聞こえるのは、自然の音と、互いの呼吸と、触れ合う所から直接響き伝わる鼓動。感じるのは、今まで知る事の無かった温もりと、この上ない安らぎ。

優しくて暖かい腕の中、自分が、どうしようもなく安心しきっているのを自覚しながら。私は、この温もりを失いたくないと、いつまでも彼の隣にいたいと、心から願った。

初めて知った、感情（後書き）

…自分で書いておいて胸焼け気味です…
本当にこの2人はよくまあ、照れもせず…

魔術講義（前書き）

ちよつと細かい話になります。

やはりこの世界の魔術について、触れない訳にはいきませんので、お付き合い下さい。

魔術講義

椎奈達が部屋に戻ってきたのは、時間ギリギリだった。

「遅くなった。」

表情1つ変えずに謝る椎奈。後ろの旭先輩も、何も言わない。

「ううん、どうせ私達寝てたし。馬に蹴られる気は無いし？」

里菜が楽しそうな口調で言った。ほんの少しだけ強張っていた空気が、あっという間に霧散した。こういう時、里菜は凄いなあ、と思う。

「…この世界で、私はまだ馬を目にしていない。古宇田は見たのか？」

けれど、大真面目に聞き返す椎奈に、里菜は肩を落とした。余りにも脱力しすぎて、里菜の言葉を聞いた時、ほんの一瞬だけ旭先輩が動揺したのにも気付いていない。いつもなら、絶対食いついていただろう。

その時、ノックの音が聞こえた。旭先輩がドアを開ける。サーシヤさんだった。

「魔術の練習の場へのご案内致します。」

サーシヤさんが案内してくれた部屋は、凄くシンプルなものだった。丁度教室くらいの大きさの部屋で、一番奥に机がある程度で、家具とかは全くない。部屋の中心には、大きな丸が描かれていた。

「魔法円だな。魔法陣を使う魔術の練習にも対応できているのか。良い部屋だ。」

「恐れ入ります。…ところでシイナ様、皆様だけで練習するとの事でしたが、本当によろしいのですか？せめて、魔導士の方位―」

「不要だ。昨日借りた本の知識は既に頭に入っている。この世界の魔術について、ほぼ把握したと言っている。何なら、始めに古宇田達に説明する所だけここにいるか？不足が無いかどうか、見極めれば良い。」

サーシャさんが言いたかったのは、私達の魔術指導に人がいるのではという事だと思う。知識があるから要らないって事は…椎奈は、知識だけでこの世界の魔術まで使えるようになったのだろうか。

「…そうですね、我が国の魔術は特に奥が深いですから、いちおう拝聴させていただきます。ただし、私では力不足ですから、元々皆様に付けられていた魔導士の方でよろしいでしょうか？」

考えながら出された提案に、椎奈は素っ気なく頷いた。

「構わないが、呼ぶなら急いでくれ。時間が惜しい。」

「ご心配には及びませんな。」

椎奈の言葉に応えたのは、70歳くらいのおじいさんだ。部屋に描かれた円―椎奈の言葉を借りれば、魔法円―の真ん中にいつの間にか現れた。

椎奈は少し感心したような表情を浮かべて、おじいさんを見つめている。

「お初にお目にかかります。この国の一級魔導士、ヴァリオ＝メリと申します。どうか、お見知りを。」

丁寧に一礼するおじいさん。ちよつとだけ口調がわざとらしい。私達が孫くらいの年齢だからだろう。

「リナ・コウダです。初めまして。」

「シオリ・カンドです。よろしく願います。」

「キョウヘイ・アサヒだ。」

「シイナ。」

私達の自己紹介——じゃなくて、椎奈の自己紹介を聞いたヴァリオさんの目がずっと細められた。

「…真名を名乗られないとは…。身から放たれるお力と言い、かなりの魔術師でいらっしゃるようですね。」

「ほう、この世界でも真名に拘るのか。まあ、私のはそこまで深い意味はないから気にするな。そもそも、私は魔術師ではない。」

ヴァリオさんのどこか挑発的な言葉を、椎奈は軽く流した。

「さて、メリリ。始めても良いか？」

「…どうぞ。」

何だか疑わしげな目で椎奈を睨むヴァリオさん。どうも、椎奈を警戒しているみたい。

「まず、この世界の魔法と呼ばれるものは、3つに分類されている。使う者が一番多いのは精霊魔術。この国で使われるほぼ全ての魔術がこれに分類される。この世界の森羅万象の力を借りて、世界に干渉する。己の魔力を対価に支払ってな。火、水、木、風、雷の5属性だ。稀に光や闇を操る者もいるらしい。杖を振る等の行動で体内の魔力を練り、呪文を媒介として魔術を発動する。その際、事象をイメージする力がかかなり大きく影響するな。比較的理屈をこねずに使える魔術だ。ここまでは良いか？」

「大丈夫です。」

「うん、ついていけるよ。」

里菜と私が頷く。端的で分かりやすい説明だ。

「それなりに複雑な理論の理解が必要ですが……。」
ヴァリオさんが反論する。

「魔術を使うのにはほぼ必要あるまい。まあ知っておけば応用の範囲が広がりやすいが、想像力さえあれば何とかなる。」

「まあ、間違っはおりませんが……。」

椎奈のやや強引な考え方に、ヴァリオさんが苦笑した。

「次にいくぞ。と言っても、ここからは昨日少し説明したな。次は理魔術。私達の世界で言う、西洋魔術の事だ。大規模魔術に多く見られる。ああ、召還魔術や、ヘラーの使った防御魔術も理魔術だ。精霊魔術と同じように杖を振って呪文を唱える事もあれば、魔術を発動させる場所に直接魔法陣を描いてそこに魔力を流し込み魔術を

発動させる事もあり、象徴となる道具を用いて特定の魔術を発動させる事もある。ああ、儀式として供物、まあ対価となるものを捧げ、森羅万象の力を使う事も可能だ。かなり理論に精通していなければ使いこなせない為、どうしても使える魔術の数が限られる魔術師が多い。理論自体も複雑だ。私達の言う科学の知識も必要になって来る。理詰めで世界に干渉しようというのだから、当然と言えば当然なのだが。」

椎奈の説明に、思わず里菜と顔を見合わせた。ヴァリオさんが何も言わない所を見ると、間違っではないのだと思う。

——でも。

2人同時に旭先輩を見やった。旭先輩は視線に気付いたのかこちらをちらりと見たが、何も言わずに視線を椎奈に戻す。

そう。旭先輩は呪文を使う事もなければ、何か動作が伴う訳でもない。魔法陣も描かないし、何か持っていた所も見えた所はない。ただ視線を向けるだけで、魔術を使っている。

…そう言えば椎奈、訓練のとき「余り目立つな」と言っていた。「詠唱の真似事くらいしろ」とも。つまり、旭先輩の魔術の使い方は特別なのかな？

「さて、次に進んでいいか？」
椎奈が私達を見て聞いた。慌てて頷く。椎奈は何事もなかったかのように話を再開した。

「最後の魔術、神霊魔術。私達の世界で術と呼ぶものだ。儀式の際の魔術がここに分類される。前の2つとは、随分性質が異なっている為、精霊魔術と理魔術を一度に修める事は出来ても、理魔術と神霊魔術を一度に修める者はほとんどいない。アドラスは特別という事だな。神霊魔術を修めたものが精霊魔術に少し手を出す事はあるそう。神霊魔術は印を組む。：ああ、アドラスは杖を使っていたから、杖でも出来るようだな。あとは言霊。祓詞はらいことばだったり祝詞いのちだったり、まあいろいろある。神籬ひもろぎと呼ばれる依代を使って、神を迎える事も出来る。浄化の性質を持つものが多いな。神に近いもの―この国では神官だ―が扱う。私の国では式を使ったりもするな。ただし、呪術も多い。こちらで言う、方術の流れだがな。」

魔術講義（後書き）

少しだけ追加説明をさせて下さい。

ここで使う言葉や魔術は、かなり作者の創造が入っています。決して現実の魔術に即してはおりませんので、「違う!」とか言わないでいただけると嬉しいです。

言葉もです。例えば、魔法円と魔法陣は本来同じものですが、分類上、円のみを魔法円、完成したものを魔法陣とさせていただきました。

魔法円は、魔術を使う上でイメージの補助になる為、練習の時に使えるという事にしました。

こんな所で設定を作るのもどうかと思うのですが、本編には書けそうにもないので…作者の非力をお許し下さい。

4人の魔力と、霊力

椎奈が締めくくると、ヴァリオさんが拍手した。

「素晴らしい。私が言う事はありません。…さて、では私から1つだけ。皆様の魔力特性を計る水晶をお持ち致しました。」

そう言って4つの水晶を取り出すヴァリオさん。

「こちらを用いる事で、皆様がどの魔術を使えるのかを判断する事が出来ます。精霊魔術ならば、その属性までも分かります。触れていただくと、魔力に反応して輝きます。精霊魔術ならばその属性の色―火は赤、水は青、木は緑、風は橙、雷は黄、光は白、闇は黒になりますし、理魔術は銀色に、神霊魔術は虹色に輝きます。輝きの強さが魔力の強さを示します。どうぞお試し下さい。」

水晶を宙に浮かせながら、ヴァリオさんがそう言うのを聞いて、私達4人は顔を見合わせた―正確には、私と里菜が椎奈と旭先輩を見上げた。

私は橙、里菜は青。それは多分間違いない。けれど、椎奈と旭先輩はどうなるのだろう。椎奈は理魔術と神霊魔術を両方使えるし、旭先輩は神霊魔術への適正を持ったまま理魔術を使っている。水晶に現れる色は未知だ。

でも、それをヴァリオさんの前で試すのも気が引ける。里菜の言葉借りれば、椎奈達は非常識だ。余り目立つのもどうかと思う。

「メレリ、その必要はない。儀式の際に、それぞれがある程度何の属性を持つのかを知ったからな。」

椎奈がヴァリオさんの申し出を辞退しようとする。

「いや、そういう訳には参りません。魔術は1つ間違えば、大事故に繋がります。始めに自分が何の属性を持つのか確認しないのは、自殺行為です。」

けれど、ヴァリオさんも譲らない。私達を心配してくれているのは分かるんだけど…。

「…分かった。」

椎奈が溜息をついてから、頷いた。そのまま水晶玉に近づく。旭先輩もその後に続いた。私達も、おっかなびっくり近づいた。

「それでは、触れてみて下さい。」

その言葉に、まず私と里菜が同時に触れた。予想通り、私の水晶は橙色に、里菜の水晶は青色に輝いた。水晶全体が強く輝いて、眩しい。

「コウダ様は精霊魔術の水属性、カンド様は精霊魔術の風属性。流石は勇者様だけあって、素晴らしい魔力量ですな。それではアサヒ様、シイナ様もどうぞ。」

ヴァリオさんに促され、旭先輩と椎奈は一瞬目を合わせた後、同

時に触れた。

それぞれ、銀色と虹色に輝いている。光の強さは、私達と同じ位。

「アサヒ様は理魔術、シイナ様は、お珍しい、神霊魔術ですか…。
この2つの魔術の使い手で、これほどの魔力量をお持ちなのは、さ
ほど珍しくはありませんが…」

ヴァリオさんが妙な目で椎奈を見つめている。椎奈は気にする様
子もなく、ヴァリオさんに声を掛ける。

「メレリ、これで良いか？後は自分たちで何とかする。サーシャが
魔術書と杖を用意している。必要なものはあるし、後は心配しなく
ていい。」

「…畏まりました。それではこれで失礼致します。何か私に出来る
事がございましたら、いつでもお申し付け下さい。」

未だに疑わしげに椎奈を見つめつつも、ヴァリオさんは丁寧に一
礼して部屋を去った。

「それでは私も、これで失礼致します。」

サーシャさんがヴァリオさんに続いて部屋を出て行く。その後ろ
姿を見る椎奈の目がどうも怖いのは、どうしてだろう。

「…さて、行ったな。」

その言葉と同時に、椎奈が刀印を結んだ。何かが部屋を包むよう
な感じ。

「椎奈、今のは何？」

私が尋ねると、椎奈が意外そうな顔をした後、直ぐに教えてくれた。

「：気付いたか。少し魔術への感覚が鋭くなっているな。今のが盗聴防止の術だ。」

「ああ、これがそうなんだ。」

里菜も納得したように頷いている。

「まあ今回は、外から魔力、霊力の流れを感じ取れないように遮断させてもらったが。今からやる事をあれこれ探られると、いささか厄介だ。：さて、始めようか。」

椎奈がそう言って、教卓みたいな机に歩み寄ろうとした。

「あ、待った。椎奈、旭先輩もだけど、さっきの水晶玉、何をしたの？」

里菜の言葉に、首を傾げた。ただ触れたようにしか見えなかったけど…。

そんな私を見て、里菜が呆れたように首を振った。

「あんな反応しかでないんだったら、椎奈も最初から渋らないですよ。それに、私達と魔力量が同じな訳ないじゃない。椎奈達だよ？」

「そっか。」

納得した。確かに、椎奈の魔力―椎奈は霊力って言ってたっけ―は、かなり強いはずだ。それは闘技場の件から考えても間違いない。

「理論的ではないが：まあ、その通りだ。ああなるように加減した。」

椎奈が複雑な面持ちで頷いた。

「じゃあさ、普通にやったらどうなるの？」

里菜は興味津々と言った様子で尋ねた。椎奈が肩をすくめ、無造作に水晶に触れた。

水晶は、一瞬だけ色の識別もつかない位強い閃光を放って、砕けた。

「こうなる。旭はどうなるんだ？」

絶句する私と里菜に簡潔に答えて、旭先輩を振り仰いだ。旭先輩がずっと水晶に触れる。

水晶は一瞬金色に輝いて、砕けた。強い光を2回も見たから、目がチカチカする。

「…そう来たか……。」

椎奈がやや呆れ気味に旭先輩が触れた水晶の破片を見やって呟いた。

「術師として修行を修め、方術と仙術を使いこなす椎奈が、苦もなく西洋魔術を使える理由がようやく分かった。椎奈の霊力は、特性がないのか。」

「自分の事を棚上げにするな。金色と言えば、魔術3種全て修められる証だ。メレリはあり得ないと思ったらしく、言いもしなかったが。」

淡々と分析するように言う旭先輩と、半眼で言い返す椎奈。どちらも自分の霊力量に関しては触れない。今更って事かな…。

「だが椎奈も精霊魔術に手を出す気だろう。」

「ああ、面白そうだからな。…まあ、私達の事はどうでも良い。古宇田、神門、ユトウルナとミキストリを呼んでくれ。2人の魔術については、彼らの方が詳しいだろう。」

旭先輩の言葉にあっさり頷いた椎奈は、いきなり私達に話を振った。

『まあ、呼ばれるまでも無いが……。巫女にアサヒ殿よ、汝らは非常識を通り越して異常だな。』

『先程示された魔力量、その気になればこの国1つ滅ぼせるであろうな。』

未だに言葉を失う私達の腕輪から現れたユウ―この間里菜に、もうユウで良いと言われた―とミキは、呆れ声で椎奈と旭先輩に答えた。

「異常と言うな。それと、私達が持つのは魔力ではなく霊力だ。：それより、ユトウルナとミキストリ、悪いが古宇田と神門の杖選びを手伝ってやってくれないか。私達は使った事がないから、今一つよく分からない。」

余り本気でない顔で反論すると、椎奈はユウとミキにそう言った。

『使った事がないとは……いや、もう何も言うまい。そうだな、この腕輪がある以上、通常魔術師が使うような杖は不要だ。腕輪自体が、その役割を果たす。ただ、武器を使いつつ魔術を使うならば、加えて道具が必要だ。』

疲れたように首を振ったユウが、椎奈のリクエストに応じてアドバイスをしてくれる。

『腕輪に魔力の流れを制御する石を埋め込むのが良からう。詩緒里

はその指輪が良いだろう。』

ユウに続いてミキがそう言うので、机に近づいてミキのさす指輪をはめた。瞬間、指輪が淡く光り、腕輪に吸い込まれるようにして消えた。腕輪に、指輪についていたオレンジ色の石が埋め込まれていた。

『リナはその杖だな。』

「これ？」

ユウに言われて里菜が短い杖―王様のよりも短い―を手にとると、同じように淡く光って、腕輪に吸い込まれていった。里菜の腕輪に、碧瑠璃色の石が埋め込まれる。

『巫女、他には何かあるか？』

「いや、もういい。後はこちらでやる。」

ユウの問い掛けに首を振る椎奈。それを見てユウとミキは頷き、同時に消えた。

4人の魔力と、霊力（後書き）

諸事情により、多少混乱していました。すみません…

魔術の授業、その1（前書き）

里菜と詩緒里の実力や、いかに。

魔術の授業、その1

「さて、始めようか。まず2人は、魔力を扱う練習からだな。自分の身の内にある魔力を自在に操れるようになれば、魔術も何もない。…神門。」

「はいっ。」

指名されて、緊張気味に答える。

「魔法円の中心に立ち、部屋の音に耳を傾けろ。目を閉じてもいい、とにかく聴覚を研ぎすませるんだ。」

唐突な指示に戸惑いながらも、魔法円の中心に歩み寄った。椎奈達が、少し離れる。

目を閉じると、耳に入る音が大きくなった気がした。ラジオのノイズが晴れていくように、少しずつ音が鮮明になっていく。風の音―何故か時々乱れてる。この部屋、窓とかあったかな―に混ざって、里菜の声が聞こえた。何を言っているか、よく分からない。独り言かな…

「…もう良いぞ。何が聞こえた？」

椎奈に言われて、目を開ける。聞こえたものを素直に答えた。

「え？私、何も言っていないよ？」

里菜がきょとんとした顔で答えた。嘘を言っている様子はない。聞き違い…？

「上手くいったようだな。それは、古宇田の心の声だ。風の属性を持つ者は、心を読んだり、：テレパシーと言うべきか、とにかくそういうものに長けている。後、風の音というのは、魔力の流れだ。この部屋は、魔術の練習場だから、魔力の残滓が多い。古宇田や神門の魔力と反応して、乱れているのを感じたのだろう。」

椎奈が説明してくれた。里菜が驚いたような顔をしている。きっと私も似たような顔をしていると思う。

「こうして音を聞くのは、心を無にしないと出来ない。だが、要は慣れだ。無意識に聴く力を調節できるように練習していく。ただし、ここ以外ではやるな。普段はなるべく何も聞かないように意識しろ。」

「うん。でも、どうして？」

逆らうつもりはないけれど、最後の指示に少し不思議に思った。

「今は古宇田だけだったから良いが、一度に多くの人間の心の手を聞くのは負担だ。魔力も、慣れていないうちから感覚を研ぎすませていると、精神を削られる。だから、普段は自分が影響を受けないような訓練をしろ。」

「分かった。」

素直に頷く。椎奈の言う通り、たくさんの声が聞こえたら頭が痛くなりそうだ。

「でも、なんで私の声だけなの？椎奈達は？」

里菜がちょっと不服げな顔をして聞いた。椎奈が肩をすくめる。

「私達は心を閉じる術を身につけている。霊力が放出するのを抑える術もな。」

「さいで…。」

里菜が不服げな顔のまま頷いた。

「さて、次は古宇田だな。魔法円を中心に立ったら、何でも良い、水に関する事でイメージしてみろ。ただし、間違っても部屋が水でいっぱいになるとか考えるな。死ぬぞ。」

「了解。えーっと、何にしようかな…。」

答えながら、里菜が軽い足取りで魔法円の中心に立つ。目を閉じてぶつぶつと呟きだした。少ししないうちに、里菜の周りから氷が広がりだした。それはあっという間に広がり、里菜の周辺と私達3人の周り以外、一面氷で覆われた。

「…古宇田。もう良いから、何をしたのか自分の目で確認しろ。」

「へ？…って、え！？」

椎奈が呆れ声で里菜に声を掛けると、里菜が目を開けた後、ものすごく驚いた顔をした。

「さっき説明したように、精霊魔術はイメージが重要だ。古宇田はイメージを現実にはめる力が強いな。だからこうなった。古宇田の課題は、魔力を調節する事だ。ちよつとイメージしただけで実現していたら、城がぼろぼろになるからな。ふと何かが頭に浮かんだした時に魔力にそれが伝わらないようにする練習だ。」

「はい。」

里菜がちよつと反省した様子で頷いた。

旭先輩が一步前に出て、手を床にかざした。

足下が少し暖かくなる。あっという間に氷が溶け、水が蒸発した。

それを見た椎奈が、疲れた顔で首を振った。

「…精霊魔術も、杖無し無詠唱で行けるのか……。」

「試して見たが、上手くいったな。理魔術よりも遥かに単純だ。これなら椎奈でも出来る。」

「…そうなのか？」

興味を持った様子で、椎奈が旭先輩に目をやった。旭先輩が首肯するのを見て、椎奈が部屋の隅に目をやった。

視線の先で、火柱が一瞬大きく燃え上がって、直ぐに消えた。

「成程な。」

右手を見つめ、感心したように呟く椎奈。

「さて、神門はさっき言った練習とともに、基本的な魔術を1つ練習しようか。単純に風を起こすだけだ。自分の周りに風が緩やかに渦巻くのをイメージする。」

そう言って椎奈が、目を薄く閉じ、呟いた。

『風よ、我が周りを舞いたまえ。』

椎奈の周りに、やや強い風が巻き起こる。風は淡く青色に染まっている。椎奈の長い髪が風になびいてふわりと広がり、まるで椎奈が、風を起こす精霊に見えた。

私達が見とれていると、風が収まった。椎奈が目を開く。

「こういう感じだ。自分の中に魔力が流れるのを感じて魔術を使え。」

余り強い風をイメージするなよ。」

「分かった、やってみる。」

「良いなあ詩緒里。私もやりたい！」

「今の古宇田には危なすぎる。この魔術1つとっても、古宇田がやれば竜巻になる。」

「うっ…。」

羨ましそうな声を上げる里菜に、椎奈がきっぱりと言った。言葉に詰まる里菜。流石にさっきのはマズいと思ってるみたい。

「さて、それぞれ別れて練習するか。3人とも、少し離れてくれ。」

私達が数歩下がると、椎奈が刀印を組んだ手を一閃した。

「こちら側半分で古宇田が、反対側で神門が練習しよう。私は古宇田につくから、旭、神門を頼む。」

「分かった。」

椎奈と旭先輩の会話を聞いて、凍り付いた。里菜がこっちを見て、いたずらっぽく笑う。

「2人とも、余り時間がない。古宇田、早く来い。」

「了解。」

そう言って里菜が椎奈の元へ走る。途中で立ち止まって首を傾げた。

「ん？今の何？」

「結界を通り抜けたのを感じたのだろう。」

ああ、さっきの結界だったんだ。半ば現実逃避気味にそんな事を考えた。

「始めようか。」

後ろから声を掛けられて、危うく飛び上がりそうになった。振り返ると、旭先輩が私を見つめている。何とか、首を縦に振った。

不意に、足下に円が浮かんだ。

「部屋を半分に区切ったから、代わりとなる魔法円を敷いた。」
びっくりしている私に、旭先輩が淡々と説明してくれた。

「ありがとうございます。」

お礼を言ってから、練習に取りかかろうとして、ふと気付く。

椎奈の言い方を考えると、魔術には集中力が必要だ。魔力の流れとかを感じなければならぬのだから。

―けど。目の前に旭先輩がいて、私を見ている状況。今でも胸がドキドキしている。

集中、出来ないかも…

「どうした。」

魔術を練習しようとしないうちに、旭先輩が声を掛けてきた。

「あ、いえ、なんでもありません。」

「：始めから成功するとは思わなくていい。ゆっくりやれ。」

旭先輩の思わぬアドバイスに、心が弾む。

「はい！」

大きく頷いてから、私は目を閉じ、練習に取りかかった。

——結局その日、私は魔術が成功しなかった。ほんの少し風が起るだけで、巻き上がったりはしなかった。出来るようになるかなあ……

ちなみに、里菜はあの後も巨大な氷柱を作ったり水の竜巻を作ったりして、最後には部屋中に雨を降らせていた。それだけの事を出来るといっても凄いなと思うんだけど、毎回自分と里菜の身を守って、制御不能になった里菜の魔術を抑えていた椎奈は、本当に凄いなと思う。

魔術の授業、その1（後書き）

先は遠いようです。

ここから、時間が飛びます。このままだと、いつまでたっても進みませんので…

停滞、そして（前書き）

おかげさまで3000PV超えました！本当にありがとうございます。

これから椎奈達をよろしくお願いします。

停滞、そして

橙色の光が緩やかな風を起こした。始め神門の周りを包むように巻き上がった風は、次第に広がり、俺の周りに纏わりついた。風の勢いが増す。

いつでも魔術を発動できる状態で待機していたが、風は一定の勢いを保ったまま変化しない。

「…ここまでだな。」

そう言って魔術を強制的に終了させる。光が収まった。

神門の周りに敷いていた魔法円を解除すると、神門が溜息をついた。

「何度やっても上手くいきませんね…」

「……………」

返すべき言葉が見つからず、無言を貫いた。

訓練が始まって、1週間。3日目に1つ目の魔術を成功させた神門に、今度は風を相手に纏わりつかせる魔術を教えた。神門は戸惑った様子を見せながらも、3度目で成功させた。そこまでは良かった。

その先、纏わせた風の勢いを増し、鎌鼬を起こす魔術が成功しない。いくつか助言し、俺も椎奈も何度か見本を見せているのだが、どうしても一定の風速を超さない。

原因は分かっていた。神門は相手を攻撃する事への躊躇が強すぎ

る。こちらは防御を整えた状態なのだから、魔術が暴走しても問題ないと説明してあるのだが、そもそも人を攻撃する魔術を使う事自体に迷いがある。

古宇田が未だに制御できないまま攻撃魔術を椎奈に浴びせているのとは、まるで正反対だ。

椎奈の方もいろいろ試しているようだが、古宇田は余程世界への干渉力が強いらしく、僅かな魔力しか漏れていないにもかかわらず、中級魔術並みの威力を発揮させてしまう。

「あの、旭先輩。もう一度やって良いですか。」

神門が尋ねてきた。意欲がある事は良い事だが、そもそも躊躇っている時点で上手くいくはずも無い。首を横に振る。

「これ以上は、魔力の使い過ぎになる。今日はここまでだ。」

「……はい。」

神門が俯いて返事をする。「音」を聴く力の制御はほぼ問題無い。それほど急ぐ必要も無いだろう。

「…古宇田、今日はここまでだ。」

椎奈の方も古宇田が限界を迎えたようだ。椎奈の声と同時に、結界が消える。

この後は、魔術書を読み理論を学ぶ。自分の扱う魔術もそうだが、全ての魔術についてある程度学習する。実戦でいきなり見ず知らずの魔術を防げるはずも無いからだ。

俺も椎奈も、精霊魔術は勿論、自分の領域である術、西洋魔術―

こちらでは神霊魔術、理魔術か―の復習をしていた。この世界独特の魔術も存在すると分かったからだ。

いつものように図書室への移動だろうと出口へ足を向けたが、椎奈から制止の声がかかった。

「待て、旭。まだ終わっていない。」

怪訝に思い振り返り、思わず息を止めた。

椎奈の表情が変わっていた。今俺の目の前にいるのは、普段古宇田達と話す「高校生」でも、鮮やかな剣術で騎士達をあしらう「剣士」でも、剣術や魔術の指導をする「先生」――古宇田がそう呼んでは、椎奈に嫌がられている――でもない。

古の術を受け継ぐ、「術師」たる椎奈が、俺を見据えていた。

椎奈のこの表情を見るのは、訓練初日にヘラーの魔術を破ったとき以来だ。いや、それ以上に張りつめた表情を浮かべている。

前の世界で椎奈がこの表情を見せていたのは、妖を祓う時と。

「訓練が始まって、1週間。ようやく慣れたようだな。それだけ靈力に余裕があるのならば、問題あるまい。」

俺との、魔術戦の時だ。

停滞、そして（後書き）

…さて、今後の忙しさとストックの余裕を考慮し、あえてここで切らせていただきます。そして今日は二話更新はしません。

…酷い、ですか…？ですよね…

……どうしようかな……

魔術戦（前書き）

お待たせしました！
椎奈VS旭です。

魔術戦

椎奈が刀印を結び、目を閉じる。青い光が部屋を覆い、消えた。

術特有の結界だ。一見何も変わらないが、もはやここは切り離された世界。この部屋がどれだけ壊されようとも、結界を解けば元通りになる。

ただし、ここで負った怪我はそのままだ。

続いて椎奈が、刀印を部屋の隅にいる古宇田達に向けた。ヘラーの防御魔術の3倍の強度を誇る結界が、古宇田達の周りに張られた。

「古宇田達はそこから動くな。」

「分かった。」

いつもと違う俺達の様子に、珍しく真面目な口調で古宇田が返事をした。神門も神妙な表情で頷く。

「…1ヶ月ぶりか？」

「ああ。」

椎奈のどこか楽しげな口調の問い掛けに、短く答えた。無駄口を叩く余裕は、無い。

「ルールはいつもと同じだ。時間制限無し、魔術のみ。勿論互いに手加減は無し。異論は？」

「無い。」

「よし、では始めよう。」

そう言って椎奈が刀印を結び、構えた。俺も魔術をいつでも放てるように、呼吸を整える。

緊迫した空気が最高潮に達した瞬間。

椎奈の腕が鋭く空を切った。斬撃を鎌鼬で迎撃する。

不可視の刃は、2人の中で衝突し、消えた。

間髪入れずに炎を召還し、上方から椎奈にぶつける。

椎奈は目を向ける事なく結界でそれを防ぐ。

ここまでは予測していた展開。

弾かれた炎を地に這わせ、椎奈を囲ませて一気に火力を上げる。

椎奈が目を細めた。刀印を結んだ右手がわずかに動く。

足下に霊力が集まるのを感じ、咄嗟に飛び退く。先程までいた場所、拘束術が発動した。

息を継がせる間もなく拘束術が追って来る。移動する霊力の流れから次に発動する場所を予測しつつ、走って逃れ続ける。

走りながら、椎奈の周りの炎に風を纏わせ竜巻状にすると同時に、椎奈の結界に、魔術によってつくった結界をぶつけた。

ここに来て初めて、椎奈の動揺が伝わって来る。攻撃の手を緩めず、わずかに揺らいた結界に霊力を込めた無数の氷弾を叩き込む。

青い光が閃き、椎奈の周りの魔術全てが吹き飛ばされた。

魔法陣が全て碎かれたのを感じた瞬間、死角から強い衝撃が俺を襲った。吹き飛ばされ、壁に叩き付けられかけたが、辛うじて魔術で勢いを殺す。

体勢を立て直す俺に向かって、霊力を細く絞った数えきれない程の光線が飛んで来る。防御魔術を発動してそれを跳ね返し、同時に椎奈の足下を揺らす。

霊力の流れが途切れたのを感じ、そのまま衝撃に特化した魔術を放った。

性質を限定した魔術が轟音と共に周りの空気を飲み込み、椎奈に襲いかかろうとした、その時。

莫大な霊力の塊が、魔術を粉々にした。魔術を飲み込んだそれは、そのまま俺に向かって来る。

凄まじい威力を持つその攻撃に、全ての力を防御魔術に回して相殺する。

刹那。

足下に青い五芒星が輝いた。

しまった、と気付いた時にはもう遅い。

「不動縛！」

凜とした声が響き、練り上げられた霊力が全身を拘束する。

堪えきれずに片膝をつく俺目掛けて、不可視の刃が飛来する。

霊力を一気に解放する。体の動きだけでなく、魔術の発動を妨げていた椎奈の術を、一瞬だけ無理矢理緩め、防御魔術を構築した。

本来ならば術を飲み込み椎奈に跳ね返すはずのその魔術は、しかし、魔法陣ごと不可視の刃に切り刻まれ、勢いを殺がれる事なく動けない俺に襲いかかる。

なす術もなくそれを見ると、刃は俺の目の前で静止し、消えた。

魔術戦（後書き）

描写力の未熟さ丸出しですみません…

また短めですね…

次回は結構長くなりますので。

成長と変化（前書き）

予告していた通り、長めです。

旭が一人称という訳で、知識が滝のように流れ出ます。ちよつと細かいですが、お付き合い下さい。

成長と変化

「……ここまでか。」

その言葉とともに、体を束縛する力が消えた。

「今までで一番持ったな。吹き飛ばした時点で終わるかと思ったが。」

立ち上がる俺に歩み寄り、椎奈が声を掛けてきた。視線を向け、疑問をぶつける。

「最後の術は何だ？明らかに強度はこちらが上だったはずだ。」

俺が使った防御魔術は、上位魔術だった。込めた霊力を考えても、方術の基本である断裁術が、あの魔術を力技で打ち破るというのは考えられない。

「魔法陣は核となる部分に狙いを定めれば、比較的少ない霊力で解体できる。根元から壊された魔術ならば、切り刻む事は可能だ。」

「∴魔法陣を、解析したのか。」

西洋魔術はいくつもの理論、概念、そして宗教観を軸に構成されており、人間の頭脳のみでは短時間で処理できず、実用には程遠いものになってしまう。そこで、魔術の発動を補助するのが魔法陣だ。

魔法陣は文字、絵、図形、描く順序、全体の構成に何重もの意味を持たせる事で魔術に必要な情報を記す。魔法陣を、魔術を起動する位置に描き出し、正しい順序で魔力を流し込む事で、初めて魔術が発動する。

西洋魔術を発動させる方法は多くあるが、どの方法にしても必ず魔法陣を使う。呪文の詠唱や、杖を振るあるいは十字を切るなどの結術は、魔法陣に魔力を流す順序、量を定める事を目的としている。儀式や供物は魔法陣の一部であり、森羅万象から力を借りて魔術を発動させる鍵。象徴となる道具を使って魔術を発動する場合は、その道具に魔法陣を組み込んであるか、道具自体が魔法陣の役割を果たしている。

あらかじめ魔法陣を描いてから発動する魔術師が多いのは、魔法陣についての知識不足による魔術発動の失敗、それに伴い魔術師にかかる強い負荷を防ぐ為だ。

魔法陣を実際に描かずに魔術を使える魔術師は、魔法陣における図形、文字に込められる意味を全て理解して魔術を使っている。魔力の流し方まで理解すれば、呪文詠唱や結術も省略が可能だ。より効率的かつ効果的に魔術を使える為、魔術の威力もやはり強い。

そして、更に上級の魔術師になると、自分で魔法陣を組み立てられるようになる。大抵は、元々魔法陣に組み込まれる魔力の増幅機能の拡充程度に終わるが、稀に独自の魔術を編み出す魔術師もいる。以前に椎奈が行った地図の作製、即ち概念魔術がそれにあたる。まあ、椎奈の場合は魔法陣を意識しない、術の理論に大きく偏ったものだが。

だが、魔法陣、それも実際に書かれていない魔法陣を読み取る事は、魔術の習熟とは別次元の話だ。

魔法陣の解析は、魔力の流れから魔法陣の形を判断し、更にそこに込められた概念全てを読み取り、使用される魔術を推測するという手順を取る。

魔力の流れを視る事の出来るものならば理論上は不可能ではないが、そもそも人の頭で扱いきれないからこそ魔法陣だ。魔術の攻撃を食らう前に魔法陣を解析しその核を見つけ出すなど、全ての魔法陣を暗記していなければ出来はしない。いや、仮に暗記をしていても、俺は魔法陣を自分で組み、流す霊力の順序や量も詠唱や結術に頼らずに調整しているから、大部分を解析しなければならない。

それを、魔術を学び始めて2ヶ月の少女がやり遂げたというのだ。非常識、という言葉で片付けて良いものではない。

「あの魔術の魔法陣は、以前旭に借りた魔術書に載っていた。それを覚えていただけた。」

しかし、椎奈はまさかという顔で首を振る。

「…俺はいろいろ魔法陣をいじっている。」

「そうは言っても、あの状況で加えられるものなど、霊力の増幅の調整と強度の追加、対魔術用の防御魔術を術に適用させる程度だ。核の位置はさほど変わらない。予測していれば解析だなんて大げさなものではなくなる。結果の分かっている実験をするようなものだ。」

椎奈はそう反論するが、そもそもそれをあの短時間で見極めた事自体が驚異だ。2桁の数の3乗を暗算でやるようなものであり、普通は出来ない。

「とはいえ、今回は驚いた。2度も術を破られかけるとは思わなかった。特に不動縛。拘束を解いた一瞬で、あれだけの魔術を組むとはな。旭、霊力が増したか？」

椎奈が首を傾げながら問いかけてきた。自分では自覚は無いので、無言をもって答えとした。

「それに、身のこなしが随分軽くなっている。訓練の成果が出るのがやたらと早いな。普通は実戦で使えるようになるまで、時間が掛かるものだが。」

これについては自覚があった。以前ならば拘束術から走って逃れる事など出来なかったし、吹き飛ばされながら魔術を使って体勢を立て直すなど、論外だった。明らかに身体能力が向上している。

―俺に言わせれば、あれだけの訓練をしていれば、その位の結果が出て当たり前なのだが。

「今まで知らなかった体の使い方を知った。それだけだ。」
そう言うと、椎奈が呆れ顔になった。

「…知っただけでは実行に移すのは難しいんだ、本当は。旭の魔術を見ていると、今更だと思わざるをえないが。」

「椎奈には言われたくはない。」

最初に基本となる発動の仕組みを俺から教わった後、知識だけで次から次へと西洋魔術を使えるようになっていく、椎奈には。

「理論だけで魔法陣を描く事なく結術無しかつ無詠唱で魔術行使をするんだ、今更と言って良いだろう。」

ああそれから、旭。さっきの勝負、あの時防御魔術ではなく、不動縛を解除する魔術を優先したら、まだ分からなかったぞ。」

椎奈が反論した後、いつものように講評を述べた。それを聞き、苦々しい感情が込み上げるのを抑えられなかった。

「…それが出来れば苦労はしない。」

術の解除は難しい。魔術とは根本的に仕組みが違うえ、魔法陣のようなものも無い。五芒星自体は術を発動する時に必要な霊力回路だから、術が成った後は妨害しても意味が無い。それこそ術への霊力供給を強制的に止めるしか無いが、霊力の流れを止めるのは自然界へ干渉するのと同義であり、通常は供物を捧げ数日間の儀式を通して行うレベルの魔術だ。いくら何でも、それを記述魔法陣無し結術無し無詠唱では出来ない。…努力はしているが。

「だったら、不動縛に捕まる前に問題があるな。あのとき防御に全てを割かず、術の軌道を逸らしつつ自分の足で逃げれば良かった。威力に目が行って、霊力の流れに注意を向けるのを、完全に失念していただろう。」

言葉の返しようがなかった。椎奈の莫大な霊力の奔流に動揺した

のは事実だ。

「だが、上出来だ。術の並列起動、戦術の組み立て、魔術1つ1つの練度。私としても見習う事が多かった。…久しぶりに、楽しい戦いだっただ。」

そう言って椎奈が、僅かに口端を上げた。笑みとも言えぬ表情だが、明らかに満足している。「術師」である椎奈が、真の実力者に出会えた事に喜びを覚えている、そんな表情だ。

椎奈がその表情を俺に向けたのは、初めてだった。つまり俺は、初めて椎奈と対峙しうる「魔術師」として、認められたということだ。

その事に喜びを覚えているという事実には、驚かされる。俺にそんな「普通」の反応をする事が出来るとは、思ってもいなかった。

―椎奈と出会ってから、俺は随分と変わった。感情などとうに失せたはずの俺が、椎奈に関わる事においては妙に感情的になる。

椎奈に会わなければ、今頃俺は、それこそ化け物になっていただろう。

成長と変化（後書き）

今回もいろいろと作者によって作り出された魔術論がいっぱいです。
「実際は違おうだろう！」という突っ込みは無しでお願いします（笑）

上達と実力差

「…旭、どうした？」

訝しげな声に問いかけられて、椎奈をずっと見つめていた事に気が付いた。自分がどんな表情をしていたのかやや不安に思いつつ、無言で首を振る。

「何でも無い。俺も久しぶりに、勉強になった。」

「そうか、それなら良かった。…さて、片付けるか。」

不思議そうな顔をしたまま頷いた椎奈は、再び刀印を結んだ右手に、息を吹きかけた。

緩やかな風とともに、部屋を覆っていた結界が消えていく。

完全に結界が消えた時、部屋にあった焼け焦げや裂けた部分は全く残っていなかった。

同時に古宇田達を守っていた結界も解けたらしい。古宇田達がこちらへ歩み寄ってきた。

「…ねえ椎奈、今のが魔術戦なの？」
「そうだ。」

簡潔に頷く椎奈に、古宇田が頭を抱えた。大体考えている事は想像がついたので、補足しておく。

「このレベルの魔術戦は滅多に無い。そもそもこの世界は、詠唱破棄もまともに出来ない精霊魔術師ばかり。無詠唱魔術など、夢のまた夢だ。詠唱があれば、知識をつけておけば相手がどのような魔術を使うのか直ぐに分かる。古宇田や神門程魔力があれば大抵は防げるから、心配する必要は無い。」

言いながら、古宇田の魔力に僅かな変化が生じているのに気付いた。

今まではただ漏れ出ていただけだったのが、明確な流れを持ち始めている。

「…古宇田、部屋の中央に氷柱が立っているのをイメージしろ。」
「はい？」

唐突な指示に戸惑った声を上げたが、直ぐに視線を部屋の中央にやった。

異様に太い氷柱がそびえ立つ。

「次に、その氷柱を見ながら、「その隣には氷柱が立たない」とイメージしてみろ。」

「氷柱が、立たないんですか？」
「そうだ。」

困惑しきった声に短く肯定する。首を傾げながら、古宇田が氷柱に目をやった。

古宇田の魔力が氷柱の周りを流れるのを見て、成功を半ば確信した。

「最後に、頭の中で氷柱が二本立っている様子を思い浮かべながら、氷柱が立たない」とイメージしろ。」

指示を聞いて、古宇田が集中した顔つきで目を閉じる。

氷柱の周りの魔力が増えたが、氷柱が現れる事は無かった。

「…成程な。段階的にイメージさせたのか。」

今まで神門とともに理解できていない表情を浮かべていた椎奈が、感心したように呟いた。

「先程の魔術戦で魔術を使うというイメージが持てたようだったから、誘導すれば出来るだろうと思った。」

「心理学にもそれに似たようなものがあつたな、そう言えば。」

そう言って、未だ目を閉じたままの古宇田に、椎奈が声を掛けた。

「古宇田。そのまま1本目の氷柱が粉々になるのをイメージしろ。」

その時、魔力が氷柱を中心から壊すという事に意識を向けるんだ。」

「粉々…」

古宇田が呟いた途端、氷柱が中から碧瑠璃色に光った。

爆発音と共に、氷柱が粉碎した。

「成功だな。随分と派手だったが。」

「え？成功？」

椎奈の言葉に、古宇田が驚いたような声を上げた。

「ああ。精霊魔術中級、破碎魔術。水の突沸を応用した技だ。氷柱を作る事自体は、初級魔術だが。」

「えっと、つまり…」

「魔術を2つ修得した。それも、無詠唱でな。」

「やったあ！」

喜びの声を上げる古宇田に、神門も笑みを浮かべている。かなり羨ましそうではあるが。

「…ならば、これで行けるかもしれないな。」

不意に椎奈が、何かを思いついたように呟いた。そのまま、部屋の片隅に視線を向ける。

一拍後、蔦で作られた柱が現れた。

「神門。先程の魔術の目標を、あれに定めてみる。」

「分かった。」

神門は頷き、目を閉じた。小さいが、よく通る声で呟く。

『風よ、彼の者を捉え、切り裂け』

再び橙色の光が閃き、風が巻き起こる。先程よりも短い時間で蔦

を捉えると、少しずつ風の勢いが増していく。

先程と同じ勢いに達した。一度勢いが緩んだ後、一気に加速します。轟音が響き始めた。

数瞬後、鋭い斬撃音が部屋に響く。

「止めろ。」

椎奈が神門に声を掛けると、風が直ぐに収まった。

鳶は、原形を残さず切り裂かれていた。

「やったじゃん、詩緒里！」

古宇田が嬉しそうな声を上げた。

「うん、何とか。」

神門がほっとした様子で頷くのを見ながら、小さな疑問を抱く。

確かに、標的が人から物へと変わる事で、躊躇いは減る。とはいえ、攻撃魔術は人や魔物に対して行うもの。今のままでは実用にはほど遠い。

「…さて、後は同じだ。神門、今度は私を標的にして魔術を放て。私だという事は、意識しなくていい。先程のように、鳶の柱を切り裂くと思って魔術を使え。」

「…やってみる。」

頷く神門の表情に、やはり躊躇が浮かんだ。このままでは結果は同じだ。

ふと思いついて、声を掛けた。

「神門、心配する必要は無い。先程の魔術戦で椎奈の周りに纏わせた、炎を含んだ竜巻は、今から使う魔術の10倍の威力を持っていた。」

「……10倍？」

古宇田が呆れ返った声で呟くのに、頷いてみせる。

「まあ、そういう魔術だったな。だが神門、魔術は込められる魔力でどうとでもなる。私が張る結界を壊す気で放て。」

そう言っただけで椎奈が印を結び、結界を張った。椎奈は更に、結界の周りに蔦を張り巡らせる。

その様子を見た神門が頷く。深呼吸をして、目を閉じた。

瞬間、竜巻が椎奈の周りを覆い、一気に勢いを増した。少しの間を置いて、引き裂くような音が響き渡る。

風が収まると、無傷の椎奈の周りに、ぼろぼろになった蔦が落ちていた。

「成功だな。神門、この魔術はこれだけの威力を持って初めて成立する。覚えておけ。」

「はい。」

椎奈の言葉に、神門が頷く。

精霊魔術風属性中級、鎌鼬。4日目にしてようやく成功した。――無詠唱で。

古宇田も神門も結術無し無詠唱。それがどれだけ特殊か、未だよく分かっていない――主に俺達のせいだろう――ようだが、少なくともここにいる魔術師の大半が出来ないはずだ。

椎奈も、術や西洋魔術に関しては結術――術においては結印と言う――を外せない。ただ椎奈の場合、幼い頃から結印して術を使っていた為、その癖が抜けないからだと俺は睨んでいる。

「…さて、戻るか。今日は予定よりも長く行ったし、図書室に行くのはやめておこう。魔力、霊力がかなり消耗している。今日はもう、休んだ方が良い。」

椎奈の言葉に密かに賛同した。慣れたとはいえ、午前の基礎練、剣術の訓練はかなり体力を削る。その上久々の椎奈との魔術戦だ。疲労が蓄積していた。

古宇田や神門も、今日はいつともよりも魔術の練習が長かった為だろう、疲労のにじみでた顔に、安堵を浮かべている。

椎奈が、霊力、魔力の波動を外に漏らさない防音魔術を解除し、部屋の扉を開ける。その時、気付いた。

先程の魔術戦、椎奈は防音魔術に加え、部屋の結界と古宇田達を守る結界を維持したまま戦いに挑んでいた。部屋に張っていた結界は、張るときと解除するときの霊力消費が激しく、古宇田達の周りに張っていた結界は、維持する為に常に霊力を供給しなければならぬ。防音魔術も比較的高度な魔術だ。

それだけの術を維持したまま、椎奈は俺と戦い、勝利した。そして、確かに多くの霊力を消耗しているとはいえ、表情の余裕や行動の機敏さから判断するに、さほど疲労は強くなさそうだ。

――純粋な魔術戦では、何とか対抗しうるだけの力がついた。だが、実戦において、特に体術や剣術、体力面では、互角というにはほど遠い。大体、椎奈の本領は、刀を握って初めて発揮されるのだ。

俺が魔術を身につけ始めて、5年。椎奈は、もう9年になると聞いた。その上椎奈は、ずっと剣術や体術も共に学んで来たのだ、差があつて当然というべきなのは分かっている。

―それでも、自分の不甲斐無さに対する苛立ちを覚えずにはいられなかった。

このままでは、椎奈と共にいても、椎奈の負担にしかない。

椎奈の側にいる為には、椎奈を守る為には、もっと貪欲に力を求めなければ、いつまでも追いつけない。

―まだ、足りない。約束を守る為にも、椎奈に追いつく為にも、力をつける。

会話を交わす3人の後を歩きながら、俺は決意を新たにした。

上達と実力差（後書き）

里菜と詩緒里はちょっとした事で見事成功。旭の心理学技術が役立ちました。

椎奈の実力は底なし：？いえ、勿論限界はありますが…
まだ旭とは差があるようです。

奇妙な夢と出逢い（前書き）

さて、新キャラ登場ですね。

奇妙な夢と出逢い

「あー、疲れた…。」

ベッドに飛び込んで、思わず言葉が漏れた。

訓練が始まって、一週間。椎奈が旭先輩に言っていたように、大分慣れた。初日の練習後は筋肉痛が半端なかったけれど、今はそういうのではない。

ただし、薙刀術で毎日技を学んでは打ち込み50回とかやっているから、体力がかなり削られるのは変わりがない。

更に、魔術の練習。魔法って聞くと、結構楽って印象があったけれど、実際はものすごく精神力や集中力が必要とされるから、異様に疲れる。

その上、今日は無かったけど、魔術書で勉強するのも大変。実践の部分だけで良いつて言われているけれど、それでも膨大な量がある。学校の試験勉強が楽に思える程、覚える事が多い。

「椎奈達は、ずっとこんな事をやってきたんだなあ…。」

改めて、2人の努力を思い知った。非常識なものには変わらないけど、あのレベルに達したのは、長年の自己研鑽の賜物だった、という訳だ。

旭先輩は、自分は魔術だけだと言っていたけど、理魔術って、めちゃくちゃ難しい。この間ちらっと基本の部分に目を通して、後回しを余儀なくさせられた。何、あの物理と化学と数学を掛け合わ

せて、更にややこしくしたような理論。あれを小学校の頃から読んでた旭先輩って、ホント何者なんだろう：

「でも、2人の足を引っ張りたくないしなあ。」

私達の魔術練習に付き合ってもらって、椎奈達は余り練習できていない。まあ、もう使えるんだからいいのかもしれないけれど、2人だってやりたい事がいっぱいあると思う。

「早く上達しないと…」

追いつけなくても、せめて自分の身くらい守れるようになりたい。このままじゃ、何も出来ない。

強くなりたい、そう思いながら、私は眠気に身を委ねた。

目を開けると、私はやたらと広い上に延々と続く、和風の回廊に突っ立っていた。うーん、大きな神社とか、平安京とか、そんな感じ？ 凄く神聖な感じがある。

「えーと、私寝たよね？」

声に出したけれど、当然答えはない。当たり前だ、誰もいないんだから。

「夢、かなあ？」

それにしても、やたらと現実感がある。儀式の時に連れて行かれた（？）虚構世界とやらにいると言われた方が、説得力があるくらいだ。

「……里菜？」

不意に斜め後ろから声が聞こえて、びっくりして振り返る。
目を真ん丸くしている詩緒里がそこにいた。

「…これ、ホントに夢だね？」

「私も寝てたのに、気付いたらここにいた。」

思わず言葉を漏らすと、詩緒里も戸惑い顔で頷いた。

「…あれ？私が夢で見ているだけのはずなのに、妙に受け答えが普段っぽい…」

「…というか、実際に会っているとしか思えないよ。」

詩緒里と2人、狐につままれたように顔を見合わせた。

その時、青い光が回廊を満たした。その光は、見覚えのあるもの。

―椎奈の術？

青い光が次第に強くなり、一瞬何も見えなくなった。

光がおさまり、視界が元に戻ると、私達の目の前に、同い年くら

いの男の子が立っていた。

真っ黒な癖の無い髪に、綺麗な輝きを放つ黒い目。頬がややふっくらしているし、目はぱっちりとしていて、可愛い感じ。なんか、育ちが良いですって彼の纏う空気が語っている。

人の良さそうな、友好的な雰囲気。―それなのに。

―どこことなく、椎奈を前にしたときと、似たような感覚を覚えた。

全く似ていないのにどうして？と疑問に思っていると、男の子が口を開いた。

「君達、あゝ、巫女と、一緒にいるの？」

私は詩緒里と顔を見合わせた。詩緒里も、私と同じ印象を、彼に對して持っていると分かった。
向き直り、訊き返す。

「巫女って、椎奈の事？」

「あゝ、そう、だね。」

やや複雑な顔で頷く男の子。何か変な事言ったかな？

「うん、一緒だよ。それより、貴方は誰？」

頷いてから、尋ねてみる。男の子は少し迷った後、答えてくれた。

「名前は、言えない。僕は、巫女の…同業者。」

「術師って事？」

男の子が驚いたような顔をした。

「…巫女が自分から、術師だって言ったの？君達に？」

—そう言えば、椎奈、秘密にしてるっぽかったな。

「状況的に仕方が無いからって教えてくれた。…ねえ、名前言えないなら、何て呼べば良い？」

「——夢宮。」

夢宮…。夢の中、宮中みたいな所で会ったから？何か安直だなあ。

「じゃあ、夢宮君。私達に何か用なの？というか、ここどこ？私達、寝てたはずなんだけど。」

男の子は、直ぐに答えてくれた。

「「君」は要らない。名前じゃないからね。ここは夢殿。夢は、いろいろな世界と繋がっている。夢殿はその狭間。それこそ術師なら、死んだ人でも来る事が出来るし、一部の強い妖も来る事が出来る。…ああ、ここを自由に行き来して他人の夢を渡ったり、未来を視る事が出来る人の事を、夢見というんだ。巫女の事を調べる為に、君達にここに来てもらった。」

夢を渡る、死んだ人と会える、挙句に未来を視ると来たか…。案外、ファンタジーって身近にたくさんあるもんだったんだ…。

「…驚かないね。」

ちよつと意外そうな夢宮。

「驚き慣れちゃった。椎奈といると、驚かないのが難しい。…それで、私達に何の用？」

「…ああ、そうだった。あのさ、巫女や君達、一体どこにいるの？ここ3日位姿を見ないんだけど。居場所を探そうにも、どこにも巫女の霊力が感じられないし。」

夢宮の言葉に、ひっかかる部分を見つけた。

「3日？今、3日って言った？」

「言ったよ。巫女を最後に見てから…というか、巫女がいる事を最後に確認してから、3日。君達の親も探していると思うよ。どこにいるの？」

—うん、状況を確認してみよう。

訓練を初めて、丁度一週間。その前に儀式があった日と、初めてこの世界に来た日を合わせて、9日のはずだ。みんな心配してるよねえと、寝る前に詩緒里と話したばかり。

それなのに、3日？

「どうしたの？」

夢宮が怪訝そうな顔で尋ねて来るので、とりあえず質問に答えた。

「私達がいるのは、異世界。えっとね、魔術が普通に認識されてて

魔物がいて、魔王を倒す勇者として召還されたみたい。今いるのは、エルド国。」

夢宮が頭を抱えた。

「異世界？その上、勇者？もう、何やってるんだよ…。」

―疑われる事も、驚かれる事も無かった。ちょっと反応を楽しみにしてたのに……

残念に思っていると、詩緒里が夢宮に尋ねた。

「私達のいる世界では、9日経っているの。これはどうして？」

「…ああ、2つの世界の間に、時空の歪みがあるんだろう。そういうのは、それほど珍しくもないよ。」

未だに弱り切った顔のまま、夢宮が答えてくれた。

それにしても、珍しくないって…。今の状況、珍しくないの？それはそれで、怖い話だ。

「あのさ、巫女に伝えてくれないかな。魔王なんて放っておいて、出来るだけ早く戻って来てくれって。」

「椎奈と同じ事言ってる…。」

詩緒里が呟く。そういえば椎奈、最初はさっさと戻る気でいたよね。

「あー、それ無理。何か、こっちの世界の神様と約束しちゃったから。あ、私達もだよ。」

「何で神まで出て来るんだよ…。」

溜息をつく夢宮。諦めた様子だ。神様との約束だもんね、仕方な

いよ。

「ねえねえ、夢宮は元の世界にいるんでしょう？　だったら、私達の無事を伝えたりできる？」

夢宮が首を振った。

「君達の親がどこにいるのか、知らないよ。学校だって分からないし。」

「学校は椎奈と一緒にだよ。私達、クラスメイトだもん。」

「…いや、巫女の行ってる学校を知らないんだ。」

その言葉に、意外に思った。何か椎奈と結構関わりがあるみたいだから、絶対知っていると聞いたんだけど…

「学校の名前を言えば分かるでしょ？　私達は―」

「いや、それ以上は言わないでくれ。」

夢宮が真剣な表情で私の言葉を遮った。

「巫女との約束なんだ。巫女の学校生活について、一切詮索しないって。巫女のクラスメイト、つまり君達とも、本当は接触を禁じられている。」

「…どうして？」

「巫女が教えていないのならば、君達に言う事は出来ない。」

きっぱりと言い切られてしまった。それ以上は追求するなど、目が言っている。

「そっかー、じゃあ、無事を知らせる事も出来ないね…」

「…うん。僕が君達に関わる訳にはいかない。ごめんね。」

すまなさそうに謝る夢宮。まあ、仕方が無いんだろうけど、心配

させるのが申し訳ないなあ。

奇妙な夢と出逢い（後書き）

さて、彼は何者なのか…
結構重要な立場にいます。

友情と願い（前書き）

気付けば4000PVを超えていました…驚きです。

読んで下さっている方々、本当にありがとうございます！

筆者も無い文才絞り出して頑張りますので、応援よろしくお願いします！

出来れば、感想待ってます。

友情と願い

そこまで考えた時、ふと思いついて、訊いてみた。

「じゃあ、旭先輩は？旭先輩は魔術師だし、知ってるんじゃない？」
「旭先輩……？」

首を傾げられてしまった。あれ？それも知らないのか…

「えーっと、椎奈の彼氏だけど。」
「はあっ!？」

目を見開き大きな声を出す夢宮。あー、久しぶりに見たなあ、この反応…

「ちょっと待って、冗談だろう!？巫女に彼氏？嘘だ！あり得ない!!」

…夢宮の反応、何か変。

椎奈が恋したって聞いてびっくりするのは、よく分かる。けど、それなら好奇心が顔に出るはずだ。今まで、椎奈や旭先輩の周りの人は、驚きと好奇心の混ざった反応だった。呆れている人とか、嬉しそうな人とかもいた。

——けど、夢宮の反応は。信じられない、ただそれだけだった。その違いに、違和感を覚えた。

「本当だって。まあ、椎奈と付き合い長いなら、私達より更に驚くかもしれないけど、事実だし。仲良いよ？あんまりそういう所、見せてくれないけど。」

「椎奈は旭先輩の事を大事にしてるし、旭先輩も椎奈の事を真剣に想ってるよ。」

私に続いて、詩緒里がはっきりと言った。こういう時の詩緒里は、本当に強い。真っ直ぐ夢宮を見つめていた。

「…嘘だろ？っていうか、その、旭先輩って、何者？」

夢宮が呆然と訊いてきた。「何者？」という問いには、大いに同感だ。

「私達のイツコ上の先輩で、魔術師。凄く強いよ、椎奈も認めてたし。」

「…まあ、それなら相当な実力者だろうけど…。それでも、ありえない。巫女が、受け容れた…？一体、何があったんだ？」

納得できない様子の夢宮。その言い方に、ちよっとむっとした。

「良いじゃない、椎奈が誰と付き合おうと。問題ないでしょ？」

私の言葉を聞いて、夢宮が私達に向き直った。表情が変わっていた。真剣なんだけど、どこか感情を押し殺したような顔。

「…巫女が君達に、何て言っているのかは知らない。とはいえ、巫女が何も告げていないとも思わない。けど、僕からも言わせてもら

う。巫女にそれ以上近付くな。どうやら君達にもそれなりの魔力があるようだけど、それでも駄目。巫女と一緒に魔王を倒すというのなら、仕方の無い部分もあるけれど、なるべく巫女からは距離を置いておくように。クラスメイトとして関わっている間は、良い。けど、友達になろうとか、巫女の事を知りたいとか思うのは、危険だ。」

その言葉に、かっとなった。

「ふざけないでよ！何で会ったばかりの貴方なんか、そんな事言われなきゃいけない訳？椎奈は私達にとって、大事な友達だよ。今までいっぱい助けてもらった。だから、私達も力になりたい。椎奈が話したくない事があるなら、聞かない。けど、仲良くするのは私達の勝手でしょ！」

「里菜の言う通りだよ。貴方も、椎奈のことを化け物とか言うような人なの？椎奈は、誰よりも優しいよ。勝手なことを言わないで。椎奈がどれだけ傷つくか、分かっているの？」

夢宮の表情が、崩れた。顔に浮かんでいるのは、戸惑いと、驚きと、怖れ…？

「…君達は、巫女の力を見て、怖くないのか？その気になれば、国1つ滅ぼす事なんて、雑作も無い。それでも、怖くないの？どうして？」

「友達を怖がるような真似、する訳ないじゃん！」

怒鳴り返すと、夢宮が目を閉じ、手で顔を覆って俯いた。重い息を吐き出す。

次にこちらを見た時、夢宮は懇願するような顔をしていた。

「ならば尚更、巫女との距離を保って欲しい。君達のように、巫女を恐れない人が、どれだけいると思う？これは君達の為であり、巫女の為でもあるんだ。」

はっきりと首を横に振った。

「いや。理由も分からないのに、椎奈の友達をやめるつもりは、ない。」

「：ならば、言わせてもらう。巫女が一度でも、君達を友達だと言ったか？」

不意に夢宮の口調が厳しくなった。咄嗟に言い返そうとして、首を縦に振れない事に気が付いた。

私達の様子からそれを悟ったのか、夢宮は続けた。

「言っていないだろう？そう、巫女が友人を作る事はない。それどころか、他人が自分に近づこうとする事も許さない。許しちゃいけないんだよ。―そうしなければ、その人が消えてしまうから。」

「消える、って：」

「言葉の通りだ。あえてはっきりとは言わないけれど。僕でさえ、巫女には最小限しか近づけない。巫女の学校について知らないのも、同じ理由だ。だからこそ、その祖先輩の事は信じられないのだけど、今はそれは良い。僕が言いたいのは、君達が巫女を怖がらず、人間として接してくれるのならば、巫女の前から消えないように、距離を保って欲しいんだ。：これ以上、彼女を傷つけないならね。」

夢宮は、必死だった。その目には、哀しみや強い願いが籠っている。椎奈の事を、本当に心配していると分かった。――本当に、椎奈の為に、消えて欲しくないと思っていると、分かった。

――でも。だから、こそ。

「――断る。」

あえて、椎奈の口調を真似て言った。夢宮が目を見開いた。

「私達は、椎奈の友達。椎奈がどう思っていようとね。距離を置くつもりは無いよ。むしろ、縮めたい位。その事によって危ない事があっても、絶対に椎奈の前から消えたりはしない。」

「椎奈にこの事は、言わない。言えば、どうあっても距離を置こうとするだろうから。でも、椎奈から離れたりはしないよ。」

ずっと独りに見えた椎奈。そうしなければならぬ理由が、あった。それが何かは分からないけれど、そのせいで椎奈は、友達を作る事さえ出来なかった。

でも今は、旭先輩がいる。その事が椎奈に、小さくても変化を与えている事は、この数日の様子を見れば分かる。前よりも少し表情が明るくなったし、旭先輩との距離が近くなった。――旭先輩を、信頼し始めていると、分かった。

だから、私達は、友達として。椎奈に少しでも、独りじゃないと思っただけ。

「…はは。参ったな……。」

しばらく黙って私達を見つめていた夢宮が、不意に苦笑した。何だか、凄く優しく、嬉しそうな顔だった。

「…成程、ね。これも定め、なのかな。だとしたら、面白い。その、旭先輩とやらもね。…稀代の術師でさえどうにもできなかった宿願が、叶うのかもしれない。」

不意に、夢宮が。随分と幼く見えたのは、どうしてだろう。

「君達の名前を、教えてくれ。」

真顔で今更な事を聞いて来たので、ちょっと意地悪を試してみた。「名前を言わない人に、教える名前は無いなあ。」

「里菜…。そんな、言ってみたかったからって…。」

詩緒里が溜息をついて、私を諫めた。うう、ばれたか…。

「ごめんごめん、冗談だって。私の名前は、古宇田里菜だよ。」

「私は、神門詩緒里。」

「古宇田里菜さんに、神門詩緒里さん、か。分かった。少しだけど、力を貸すよ。」

そういつて夢宮が右手で―刀印を、結んだ。
青い光が、私達3人を包んだ。

『吾は夢宮。吾、彼女達の守護者となる事を、ここに誓う。―彼女達の名前は、古宇田里菜、神門詩緒里。彼女達の未来に、幸あらん事を願う。』

夢宮の言葉が終わると同時に、優しい何かが、私の中にすうつと入っていくのを感じた。何故か、凄く安心する。

「その力が、君達を守ってくれる。巫女と一緒にいても、ある程度は危険から救ってくれるだろう。でも、万全とは言えない。…後は、君達次第だよ。」

不意に、視界がぼやけた。意識が遠のいていく。

「ああ、限界か。そうだね、随分疲れているようだし、休んだ方が
良いだろう。…どうか、消えないで欲しい。巫女と共に、無事に帰
って来てくれ。」

遠くから夢宮の声が聞こえた。辛うじて、言い返す。

「…当たり前でしょ。言ったじゃない、絶対に、消えないって…。」
「…うん。また会おう。君達が帰って来た、その時に。もしかしたら、君達に名乗れるかもしれない―」

その言葉を最後に、私の意識は完全に途切れた。

友情と願い（後書き）

気付かぬうちに旭と同じ決意をする里菜。椎奈がこれを知ったらどうなるのでしょうか…

夢宮の為に1つ弁護を。夢宮は、椎奈を忌んではいません。

夢宮の正体がばれていない事を祈りつつ…（笑）

術師と魔術師、夢殿にて（前書き）

夢は続きます。

術師と魔術師、夢殿にて

目を開けると、そこは巨大な白木造りの渡殿わたどのだった。

「……何？」

思わず、眉をひそめる。

夕べは直ぐに寝たはずだ。ならば、ここは夢の中という事になる。だが、それにしても現実感が強い。更に、このような場所を見た事など、一度も無い。

不意に、霊力の流れを感じた。その波動は、ここ3ヶ月の間に慣れ親しんだものに、非常に近い。

椎奈が術を使うときと同じ、青い光が閃く。

光が収まると、1人の少年が立っていた。身から漂う霊力は、先程感じたそれ。

一目で、卓越した術師だと分かった。

「何者だ。」

鋭く誰何をする、少年は動じる事なく答えた。

「夢宮、と言えば分かるかな。巫女と同業者だ。」

「…夢見、では無いのか？」

夢宮と名乗った少年は、意外そうな顔をして答えた。

「夢宮は、知らないのか。まあ、関わって欲しくなかったんだろう

な。夢見が分かるなら想像がついているだろうけど、ここは夢殿。ちょっと話してみたかったから、呼び出させてもらった。」

「俺に何の用だ。」

関わって欲しくないと思ったのは誰か――聞くまでもなかった。椎奈の事に詳しい事をほのめかす夢宮に、警戒心が募る。

「…いや、そんなに警戒しなくても…。言っただろ、ちょっと話してみたかったんだ。さっき、古宇田さんと神門さんに会って、話を聞いたから。」

一度に3人もの人間を夢殿に呼び出した。事も無げに言うが、それがどれだけ霊力を要し、熟練した技が必要なのかは知っている。どうやら夢宮は、椎奈に比肩する術師のようだ。

「古宇田達に会ったならば、俺達の居場所や状況は分かっているだろう。」

「うん、それも聞いた。巫女が勇者とはね…。」

でも、それ以上に驚いたのは、貴方の事。巫女と付き合ってるって、本当なの？「旭先輩」。」

どうやら、古宇田達に会ったという言葉に、嘘は無いようだ。

「巫女とやらが椎奈を指すのならば、事実だ。」

「…嘘だと言われた方が、余程信じられるよ。」

ゆっくりと頭を横に振りながら、夢宮が呟いた。

「それにしても、巫女がなあ。どうやって口説き落としたの？何が

何でも拒絶しようとしたはずだ。」

「答える義理は無い。」

「…手遅れにならないうちに、言わせてもらおう。巫女から離れた方が良い。巫女と付き合うだなんて、正気の沙汰じゃない。巫女は災いをもたらす身。不幸が降りかかるのを防ぐ為に、ほとんどの人が巫女を避ける。巫女は、化け―」

みなまで言わせず、最短時間で構築できる攻撃魔術を放った。

「うわっ！嘘だろ、何今の！？記述魔法陣無し結術無し無詠唱で、上級魔術！？あり得ないだろ、っ！か何その反則的な技術！大体貴方、霊力持ちでしょ？何で魔術！？」

軽い身のこなしで魔術を避けた夢宮が、驚愕の叫び声を上げる。
答える気にもならず、攻撃魔術を並列起動し、夢宮の周り、全方位から放った。

「ちょ、ちょっと待った！やめろって！僕が死んだら帰れなくなるから！」

警告も無視して魔術を放ち続ける。どうせこの程度で死にはしない。ならば、少しでも痛い目に遭わせる。

「…くそっ、ああもう！」

夢宮の周りで、霊力が爆発した。魔法陣が全て霧散する。その場から飛び退いて不動縛から逃れる。二の舞を踏む気は無い。

そのまま、隠蔽の特性を強めた中級魔術を、霊力の流れに気付かれないように放った。

「つて、ええ！？うわっ、痛！」

それでも魔術が当たる直前に気付かれ、避けられる。直撃はしなかったが、一応かすったようだ。

「…警告だ。二度と椎奈をそんな風に呼ぶな。次は殺す。」

あえて怒気を隠さず、殺意を込めて言い放った。

血の滴る左腕を抑えながら、夢宮は呆然と俺の顔を見た。

「…巫女がそう呼ばれる理由、貴方程の魔術師なら、理解しているはずだ。巫女だって、説明しているんだろう？その上で貴方は、怒っている、のか？」

「椎奈の側にいる事で危険が訪れたからという理由だけで、自分たちと同じ人間だと思いたくないなど考える愚か者が椎奈を侮辱して、俺が怒らないとでも思ったか。」

夢宮が真顔になった。

「：『ソレに近づいたものは、不幸になる。ソレは、災い。ソレに近づいてはならない、心を向けてはならない。近づけば、心を向ければ、災いが降り掛かる。』」

彼女はずっとそう言われて来た。貴方はこの言葉を知った上で、それを言っているのか？彼女の側にいた、彼女に心を向けた人間が片っ端から亡くなっていったという事実を、彼女の運命の重さを、全て理解した上で、尚、彼女を人間だと主張し、侮辱する相手に怒りを向けるのか？―彼女と付き合おうと思うのか？」

いつか椎奈自身の口から聞いた言葉に、もう一度攻撃しようかと考えたが、言霊が込められた問いかけである事に気付き、止めた。代わりに、夢宮の目を真っ直ぐ見据えて、答える。

「人は、何時死んでもおかしくない。それを自覚していない奴の方が多いが。椎奈の周りで人が多く死んだとしても、それが確率的な問題ではなく、椎奈の背負う運命だとしても、その為に彼女が人間ではないと言われる道理は、無い。」

一度言葉を切り、夢宮に、言霊の響きから、俺の言葉に偽りが無い事を確認させ、続けた。

「俺は椎奈の抱える全てを受け容れ、椎奈の側にいると、何があっても消えはしないと約束した。俺はその約束を守る為ならば、禁忌だって犯す。椎奈は、俺を巻き込む事は罪だと言った。だが、もしもそれが罪ならば、俺もまたその罪を犯させたという罪を負う。それでも、椎奈の側にいると決めた。椎奈も、それを受け容れた。俺達の決意に、貴様が介入する余地は無い。」

一度は俺の手を振り払ったその手を、二度と手放すつもりは無い。ごく稀に傷つき怯えた顔を見せる彼女を、目を離せばそれこそ消えてしまいそうな儚さを持った彼女を、俺は守ると決めた。

訓練初日に頭に血が上った俺を追いかけて来て、ほんの少し照れくさそうに、嬉しかったと呟いた時に初めて見せた、あの嬉しそうな、安心したような表情を、いつも浮かべられるように。

―あの時感じた温かな感情を、失わない為に。

術師と魔術師、夢殿にて（後書き）

旭は椎奈の影響を受けてしまったのでしょうか…何だか随分攻撃的です。

神に愛されし者（前書き）

夢宮の実力発揮です。

神に愛されし者

俺の言葉を黙って聞いていた夢宮は、ふと口元を緩めた。

「……天の配剤、だな。全く、「神に愛されし者」は、どっちなんだか。」

聞き覚えのあるその言葉に、問わずにはいられなかった。

「夢宮は一体、椎奈の何なんだ？ 椎奈の何を知っている？」

「気になる？」

にやりと笑って聞き返して来た。神と似たような表情を浮かべる夢宮を軽く睨む。

夢宮は肩をすくめて笑みを消し、遠くを見るような目をした。

「…何を知っている、か。今となっては、僕が一番詳しいんだろうな…。でも、僕が知っているのは、彼女についてであって、巫女についてではない。そして、これ以上は巫女の為に、言えない。…まあ、安心してよ。貴方の邪魔はしないからさ。」

自らに言い聞かせるように曖昧な言葉を紡いだ夢宮が、最後にかかうような口調で言った言葉の意味が分からず、首を傾げる。

「…何の邪魔だ？」

「…そこでボケるか…。まあいいや。どうやら貴方の覚悟は本物のようだし、僕の出番は無いな。…まあ、そもそも僕の出番なんて、

与えられてもいないのだろうけれど。」

自嘲的に呟く夢宮は、己を責めているようにも、見えた。

「…貴方の名前を、聞かせてもらっていいかな？ 巫女と強い縁^{えにし}を持つ、類い稀なる役目を持った、貴方の名を。」

一度首を振って意識を切り替えるようなそぶりを見せた夢宮が、真剣な表情で尋ねて来た。言霊を込めて、名乗る。

「旭梗平。」

「良い名前だね。…さてと、失礼な事を言ってお詫びも兼ねて、全力を出させてもらおう。貴方なら、受け止められるはずだ。」

そう言って、夢宮が目を閉じた。

夢宮を取り囲む空気が変わった。先程までとは比べ物にならない、甚大な霊力が夢殿に満ちた。

夢宮が目を開ける。先程まで黒曜石のような輝きを放っていた瞳の色が、鮮やかな蒼に変わっていた。椎奈が術を使う時の青とも、古宇田が魔術を使う時の碧瑠璃とも異なる、神聖なる蒼。

俺と夢宮の周りを、夢宮の瞳の色と同じ蒼い光が取り囲んだ。光が床に描くのは―五芒星。

『吾は夢宮、「神に愛されし者」。吾、目の前にいる青年の誓いが

守り通されん事を祈り、彼の天命が無事果たされん事を祈り、彼に吾が力を授けん。―彼の名は、旭梗平。』

俺の名に込められた凄まじい言霊に、身体の自由や霊力はおろか、霊体ごと絡めとられるのを感じた。

「!.....」

思考すら働かない状態で、俺は夢宮の紡ぐ「誓いの詞」を、ただ、聴いていた。

『彼は鍵、彼は救い。吾に授けられし「夢宮」の称号に掛けて、吾は彼に、護りを分け与えん。』

そう言って夢宮は、俺の攻撃で流れていた血を、呆けたようにその場に立っている俺の胸元―神との契約の証たるクロスに、こすりつけた。

「っ、!？ ……! …っ、 ……っ! ――! !」

身の内に、異様な感覚が走った。彼の霊力とともに、契約の時に流し込まれたのとは異なる神気が、内側から体を撫で上げていく。奇妙な程頭の中で反響する「誓いの詞」と融合し、俺の精神を掻き

乱す。

『吾、ここに願う。彼が闇を晴らす光となり、――吾らが宿願を果たしてくれる事を。』

結びの詞に込められた、切なる響きに言霊が加わり、幾重もの強烈な波となって、魂に直接流れ込んだ。

「……、…………――」

全ての感覚が消えた。視界が蒼く染まり、今自分がどうなっているのかすら分からない中、必死で意識を保った。ここで意識を手放してはならないと、俺の中で何かが叫んでいた。

永遠とも思える時間が流れた後、唐突に蒼い光が消えた。同時に、霊力の奔流も収まる。

感覚が戻り、拘束が解けた。急に重くなった体を支えきれず、崩れ落ちるように片膝と両手をつく。

荒れた呼吸を必死で繰り返す俺の頭上から、静かな声が降り注いだ。

「…うん、巫女が選んだだけあるな。一度神と契約していて耐性があるとはいえ、驚いたよ。僕の本気をもろに受けて尚、倒れさえしないとは、ね。」

言葉を返そうにも、息が苦しい為、声が出せない。顔を上げる事すら出来ずにいる俺の額に、夢宮の手が触れた。

「…まったく、そもそもそれだけの霊力を消費しておいて、夢の中で魔術を使い、僕に怪我させるってのも尋常じゃないよな。まあ、お疲れ様。ゆっくり休めるように、少し術をかけておくよ。明日に消耗を引き摺らないようにね。」

言葉と同時に、額から霊力が緩やかに流れ込むのを感じた。

急速に意識が薄れていく。力無く地に頽れた俺の耳に、幽かな呟きが遠くから滑り込む。

「…彼女達といい、貴方といい。——は、やっと——」

限界だった。さしたる抵抗も出来ず、俺の意識は闇に沈んだ。

神に愛されし者（後書き）

からかおうとしたのは、失敗していますね…

何だか旭は割とひどい目に遭う率が高い気がしますね。

夢宮は『護り』を与えただけです。決して怪我させられた仕返しではありません。ええ、決して。

さて、もう1つの話にも書きましたが、学問の季節がやって参りましたので、更新頻度はおそらく少なくなります。

こっちは、一応ストックに少し溜めがありますが…

目覚め（前書き）

あれ？更新が遅れると言って、どうして更新しているのでしょうか
：

目覚め

目を覚ますと、この9日程で慣れ親しんだ天井が目に入った。

起き上がり、手早く身支度をする。そのまま部屋を出ようとしたら、ドアがノックされた。

「はい、どうぞ。」

返事をする、ドアが開いた。里菜が、私と同じように着替えた状態で立っていた。

「…ねえ、昨日夢を見たんだけどさ…」

困惑気味に口を開く里菜。やっぱり私と同じ用件だった。頷いてみせる。

「…多分、ただの夢じゃないよ。…夢殿、で、会ったよね。私達。」

「じゃあ、夢宮ってのも…」

「…うん。」

夢の中で私たちが出会ったのも、夢殿に連れて行かれたというのも、本当だった。—という事は。

「夢宮の言った事、どう思う？」

里菜の質問に、首を振る。

「確かに私達は椎奈の事を知らない。夢宮が嘘をついているようにも見えなかった。けど、私の意見は変わらないよ。椎奈から、離れたりはいしない。」

「…うん。ただ、私はひとつ考えが変わった。椎奈の過去については、触れない。…なんか、訊いちゃいけない気がする。」

里菜の言う通りだと思う。夢宮の言葉、表情から察しがついた。椎奈はいろいろなものを背負っている。きっと、触れるだけでも痛みを伴うものを、当たり前のように抱え込んでいるんだと思う。その重荷を少しでも軽くしてあげたいとは思っているけど、きっと、訊いて欲しくないのだとも思う。

「そうだね。…それにしても、どうして夢宮が椎奈に似ているように見えたんだろう？」

「さあ…。見た目とか、雰囲気は全然似てないのにね。椎奈にも夢宮の穏やかさが少しでもあれば、って思った。」

「でも、それは椎奈じゃないよ。」

「確かに。」

2人で顔を見合わせて笑う。奇妙な夢を見た事に対する不安は、もう無かった。

「うーん、でも、夢宮の事は訊いてみたいかなあ…」

里菜が呟くけれど、1つだけ忠告。

「旭先輩のいない時にしようね？」

「…あー、そうだね。」

椎奈と親しそうな男の子。旭先輩も余り気にするタイプには見えないけれど、目の前であれこれ訊くのは気が引ける。

「さて、朝ご飯食べにいこうよ。そろそろ時間だし。」
里菜がそう言って、部屋から出て行った。続いて、私も部屋を後にする。

4人が共有している部屋に移動し、隣り合わせで席に座る。

それほど時間を空けず、ドアが開く音がした。椎奈が姿を見せる。

「あ、おはよー、椎奈。」

「おはよう。」

里菜に続いて挨拶を投げ掛ける。黒曜石のような輝きを持つ瞳が私達を捉える。

「古宇田、神門。今朝は早い——」

椎奈の言葉が途中で止まった。切れ長の目を見開いて、私達を凝視している。椎奈の視線はただでさえ強い光をたたえている。ちょっと目を合わせるだけでも緊張するのに、凝視——と言うより、睨まれると、やましい事は何も無いのに、何か悪い事をしたのではないか、という気にされる。

「えっと、椎奈。私達、何かした？」

心は同じなのだろう、里菜がおっかなびっくり問いかけた。

「——2人とも、夢で同年代の少年に会わなかったか。」

椎奈の言葉には、ほとんど確信している響きがあった。

「え……」

思わず声が漏れる。あまりに的確な指摘に、面食らった。

「黒目黒髪の少年だ。――おそらくは、広大な和式の廊下で。」

「何で……」

里菜が言葉を漏らす。椎奈が不機嫌な顔になった。

「――会ったんだな。」

「……うん。夢宮って呼んでくれって。椎奈がどこにいるのかって訊いてた。椎奈、知ってるの？」

里菜が素直に答えると、椎奈が不機嫌な顔のまま、溜息をついた。

「まったく、何を考えているんだ、あいつは……」

「……知り合い？」

尋ねずにはいられなかった。この場にはいない夢宮を睨みつけているかのような目をしたまま、椎奈が答えた。

「私と同じ術師だ。……それなりに顔を合わせている。この世界では有名な存在だ、夢宮は。」

椎奈の答えに、ちょっと違和感を感じた。その感覚は、里菜が夢宮に、巫女とは椎奈の事かと訊いた時の、夢宮の反応を見た時に感じたものに、よく似ている。

「ねえ、夢宮って名前じゃないって言っていたんだけど……、名前じゃないなら、どうしてそう呼ばれているの？」

里菜の質問に、椎奈が少し口ごもった。椎奈はいつも返答に間を開ける事がないから、その珍しい反応に、ちよつと驚いた。

「…夢宮、というのは――」

その言葉の続きは、ドアの開閉する音によって中断された。3人揃って音の方向に目を向けると、旭先輩が部屋に入って来た。

里菜と目を合わせる。打ち合わせ通り、話の続きは後回しにしよう、意見が一致する。

「――旭も夢宮に会ったのか!？」

――けれど、初めて聞いた椎奈の驚愕の叫び声によって、私達の予定は崩れた。

「ああ。夢殿でな。」

簡潔に首肯する旭先輩を見て、椎奈の顔つきが変わった。不機嫌なんてものじゃない、正真正銘の怒りの表情だった。

「…あの、馬鹿が……!」

里菜と顔を見合わせる。

椎奈の口調からして、夢宮と椎奈は単なる顔見知り、なんて関わりには思えなかった。

「椎奈。夢宮とは、何だ？」

旭先輩が椎奈の怒りをものともせず、疑問を投げ掛けた。椎奈が怒っている理由をほぼ理解しているように見える。

その言葉を聞いた椎奈が、逡巡を見せた。私達3人に順に目をやり、言うべきかどうか考え込んでいるみたいだ。

その場にいる誰かが口を開く、その前に。ノックの音が響いた。椎奈がドアを開けると、サーシャさんが食事を運んで来てくれた。いた。

「朝食の用意をさせていただきます。」

そういつて、サーシャさんは手際良く食事をテーブルに並べた。そのままいつも通り部屋を出ようとして、サーシャさんの視線がふと私達を捉えた。

サーシャさんはほんの少しだけ目を細めたけれど、何も言わず、そのまま一礼して姿を消した。

…何だろう、今の。何かに気付いた様子だったけれど。

そのとき、部屋を防音魔術が被ったのを感じた。椎奈の魔術だ。
「…食べた話す。」

椎奈は短くそう言って、席に着いた。旭先輩もそれに従う。

微妙な空気の中、私達は朝食を食べた。

目覚め（後書き）

次回、夢宮について少し分かります。

夢宮（前書き）

お待ちせ致しました。ようやく夢宮についての説明です。

夢宮

「…古宇田、神門。夢見というのは、知っているか？」
朝食後、椎奈が何の前置きもなしにそう尋ねて来た。

「うん。夢宮が説明してくれた。夢殿に自分の意志で行ったり、夢を渡ったり、未来を視たりできる人でしょう？」

そう答えると、椎奈が首肯して、説明を追加してくれた。

「そうだ。夢見はさほど珍しくもない。霊能者なら、ある程度意味のある夢―未来についての警告である事が多いが―を視る。それが強くなったのが、夢見という訳だ。―そういう私も、夢見だ。」
「えっ、そうなの？」

素っ頓狂な里菜の声に、椎奈が頷く。

「まあ、さほどその力を使う事は無いが、夢見同士情報を交換する事はある。情報漏洩の可能性が低いからな。」

「…確かに。」

あの夢殿で、盗み聞きは難しいと思う。

「…夢宮は、夢見を統率する役割を持つ、夢殿の維持者にして管理者だ。あの場に訪れるものを監視し、悪しきものが夢を利用して人に害を与えるのを防ぐ。」

…ものすごく偉い人みたい。あんなに生意気な口をきいて、よく無事だったなあ……

里菜も同感だったらしい、こめかみに冷や汗をかいている。

それに気付かないまま、椎奈が言葉を続ける。

「私は巫女としての役割上、夢宮と多少関わりがある。夢殿は、神のおわします世界とも繋がっている。神に仕える身である巫女と、神の世界に繋がる場を守る夢宮が協力するのに、不思議は無いだろう。」

椎奈が初めて「巫女」としての自分について語った。思わず息をひそめる。

「∴私達の立場は対等だ。夢の世界と、現実世界。両方の世界の平和が保たれる事で、神は完璧に祀られる事となる。どちらかが欠ければ均衡が崩れ、神を宥める事が出来ず、天災が起こる事となる。」

「それで、早く帰って来いなんて言っていたんだ∴。」

私の呟きを耳にして、椎奈が顔を顰めた。

「まあ、そうだろうが∴。実際、私がいなくてもさほど困りはしない。あいつも日中は現実世界で生活をしているんだ。大禍時に妖を祓い、夜に夢殿の監視をする。夢宮1人で十分果たせる仕事。それなのに、いちいち私に仕事を持って来るんだ、普段は。たまには1人でやるのも悪くはないだろう。」

思わず耳を疑った。

―椎奈が、仕事を押し付けた？

いつもは何でも1人で抱え込むような椎奈が、ごく当たり前といった様子で、夢宮が仕事を持って来る事に文句を言い、1人でやるのも悪くないと言った。あり得ない光景だ。

里菜は勿論、旭先輩まで僅かに驚いた顔をしている。

「何だ？」

3人にまじまじと見つめられて、椎奈が目を瞬く。

「椎奈が他人任せにするのは、珍しい。」

旭先輩が代表して私達の意見を口にした。

椎奈は一瞬虚をつかれたような顔をした。けれど、直ぐに納得した様子を見せて、答えた。

「―ああ、言っていなかったか。私が妖を祓うのは、私自身が狙われるというのは別として、全て夢宮から回って来た仕事だ。夢殿から妖の動向を視て、神に悪影響を及ぼす恐れがあると判断したとき、私に祓うようにと連絡して来る。だが本来は、それも夢宮の仕事。私が協力しているのは単に、協力の報酬として手に入る情報の為だ。夢宮の立场上、夢殿で交わされる会話、訪問者の素性、その他もろもろの情報は全てあいつに筒抜けだからな、有用な情報を多く手に入れる事が出来る。それを貰う対価として、妖を祓っているんだ。」

「それは…協力って言わないんじゃないか…」

里菜の呟きに、椎奈が首を振る。

「貸し借り無しの関係だ。ビジネスだって、協力と言いつつも金のやり取りをするだろう。それと同じだ。…大体、巫女というのは神に仕える身。常に身を清めていなければならないというのに、妖と命のやり取りをして妖気に触れているというのは、本末転倒だ。私は元々術師だったから、特例的に妖の討伐を行っているだけだ。」

「いろいろ複雑だなあ…」

そう漏らすと、椎奈が肩をすくめた。

「仕事が倍になれば、早く帰って来いというのも無理は無いのだろうが。まあ、夢宮は優秀な術師だ。問題はあるまい。」

「…ねえ、椎奈と夢宮、立場は同じって言ってたけど、どっちが強いのか？」

里菜の問い掛けに、椎奈が即答した。

「夢の中で夢宮に敵うものはいない。普段は抑えているが、あいつが本気を出せば、私には太刀打ちできない。現実では…五分といった所か。やり合った事が無いから、分からないが。」

「すご……」

里菜が咂然と呟く。その気持ち、よく分かる。椎奈より強い人がいるとは思わなかった。

「…現実世界では、夢宮との関わりはないのか？」

旭先輩の言葉。普段より、ほんの少し声が低い。あれっと思った。

―旭先輩、もしかして―

「無いな。というより、なるべく関わらないようにしている。あくまで、同じ術師として関わるだけだ。」

椎奈が否定の言葉を口にしたけれど、旭先輩は椎奈を見つめたまま。変わらない椎奈の表情から、何かを読み取ろうとするように。

里菜と、顔を見合わせた。里菜の目が輝いている。

私が何か言う前に、里菜が口を開いた。

「でもその割に、椎奈、夢宮に詳しいね。夢宮も結構詳しくそうだった

たし。」

―里菜の命知らず。

多分旭先輩は、夢宮を意識している。夢宮の様子を見ていれば、夢宮が椎奈に思い入れがあるのは直ぐ分かる。だからこそ、椎奈と夢宮の関係が気になるのだと思う。

はつきりとした形を持っていないその感情は、多分――嫉妬。旭先輩、自覚も無いだろうけれど、椎奈に詳しい夢宮が、ちょっとした気に入らないみたいだ。

…でも、だからといって、ここで聞かなくなたって良いのに。

里菜が期待したような反応は、見られなかった。

「―夢宮が、私の事について、何か言ったのか。」

不意に雰囲気が変わった椎奈が、険しい顔で私達を問いつめた。突然の豹変に、触れてはいけない事だったと、気付いた。

「…うん。自分からは何も言えないって。ただ、詳しそうだなんて思っただけ。」

少し怯えの混ざった声で、里菜が答える。椎奈は里菜の目をしばらく見つめると、嘘が無いと判断したのか、旭先輩に目を向けた。

「俺も聞いていない。自分が一番詳しいだろう、とは言っていたが。」

「—そうか。なら良い。」

椎奈はひとまず納得した様子で頷いた。

—その様子から、ああ、椎奈はやっぱり、自分の事を知られたくないのかと、悲しくなった。

そんなに、私達の、旭先輩の事—信じてないのかな。

「—ああ、あいつが私に詳しいのは、その夢宮としての仕事上、夢殿から情報を得ているからだ。夢殿で夢宮に会うという事は、ある程度情報を曝け出しているのと同義。あいつがその気になれば、生い立ちなど簡単に探る事が出来る。」

旭先輩の無言の問い掛けに、椎奈が答えた。そこに、やましい様子とかは全然見えない。少なくとも、嘘はついていないと思う。けれど—まだ何か、隠している気が、した。

「：椎奈と夢宮の使う術は、随分似ている。霊力の質もだ。」

旭先輩が不意に口にした。椎奈が肩をすくめる。

「夢宮が扱うのも方術や仙術。そして先程言った通り、互いに神に関わる身。似ているのも無理は無い。」

旭先輩が目を細めた。まだ何か、納得いかない様子。けれど、それ以上は何も言わなかった。

「…さて、説明はこの位で良いな。そろそろ、訓練場に移動する時間だ。」

そう言って椎奈が、着替えるべく部屋へと向かった。不自然な様子では無いのに、逃げたように思えるのは―旭先輩の様子のせいかな、それとも、私の感じている、得体の知れない予感のせい、かな。

持て余す感情

訓練が終わり、寝台に身を沈めた私は、深い溜息をついた。

「…何を考えているんだ。」

溢れるのは、今まで抑えていた苛立ち。

私の居場所を探そうとする必要など、無いだろうに。わざわざ古宇田達を夢殿に呼び出してまで私の事を調べ、拳句の果てに2人に保護の術を施した。旭に至っては、本気を出して保護の術を掛けた上、自分が神から受けた保護を分け与えている。―あれほど、関わるなど言ったのに。

「お前と私の縁は、4年前に切れたんだ。まだ分からないのか。」

この場にはいない夢宮に語りかける。

「…お前はお前の生を歩めと、何度言わせれば気が済む。」

もう夢宮が、私に振り回される必要など、どこにもないのに。

「…私はもう、お前の――」

その時、部屋のドアがノックされた。身を起こす。旭の霊力を感じた。

「入っていいか。」

「ああ。」

答えると、旭が入って来た。

私を真っ直ぐ見つめて、問いを投げ掛ける。

「夢宮は、椎奈の何なんだ。」

旭が今朝の説明に納得していないのは分かっていた。だが、ここまで食い下がるとも思っていなかった。

「言っただろう、同業者だ。」

「それだけか？」

「他に何かあるというんだ。」

言い返すと、旭が押し黙る。ゆっくりと言葉を選ぶようにして言った。

「夢宮は、ある願いがあると言った。その願いを、俺が叶えられるかもしれないとも。間違いなくお前に関係のある事だろう。――願いとは、何だ。」

その言葉に、目を伏せた。

願い。それが何かは、分からない。けれど、その言葉から分かる事は、ある。

――あいつは、まだ私に――

「椎奈。」

旭が私に答えを迫る。仕方なく、ほんの少しだけ真実を告げる。

「願いが何かは、私にも分からない。――夢宮とは、過去に、少しだけ関わりがあった。そして前にも言った通り、あいつは私を人間扱いして生き残った2人のうちの1人。死者に思う所はあるようだな。」

「死者に、では無く、椎奈に、だろう。」
首を振った。

「それはない。夢宮は私に恨みこそあれど、その他に何らかの感情を持つ事などあろうはずもない。」

当然だ。私は、あいつの大切なものを、ことごとく奪ったのだから。

それにも関わらずあの馬鹿は、私に関わるものを守ろうとする。自分だけが生き残った罪悪感なのか、私に関心を持った者に、夢殿で私に近付くなど警告をして、災いが降り掛かるのを防ごうとする。

――そうして私に関われば、自分の周りの人間に害が及ぶと、分かっているはずなのに。

「――「神に愛されし者」。これは、どういう意味なんだ。」

旭はそれ以上夢宮との関係について問いかける事無く、別の問いを口にした。

「言葉の通りだ。生まれながらにして神の祝福を受け、神の加護を得、神の力を借りる事の出来る者。妖も、夢宮に手出しは出来ない。」

だからこそ、私が彼にもたらすはずの災いは、彼の大切な存在へと飛び火する。

それでも、私からある一定以上離れようとしなのは、おそらくは、――の遺志。

「夢宮が名乗らないのは何故だ。」

「夢殿で名乗るのは、自分の情報を曝け出すのと同義だ。特に、夢見を前にしている時は。夢見にとって、夢宮の情報は喉から手がでる程欲しいものだから、肩書き以外は名乗れはしない。」

「古宇田達にも、か？」

「ああ。名乗った、という事実自体が、危険に直結するからな。」
「――そうか。」

旭は頷いて、背を向けた。

「……もう良いのか？」

拍子抜けしてそう問いかけて、私は私を疑った。

何を考えている。何故、折角終わった追求を続けさせようとする。私に過去は、無い。あつてはならない。だから、これ以上過去を問われない事を喜ぶべきだ。

それなのに、何故――

「言っただろう。椎奈がどんな過去を抱えていようと、俺は構わない、聞こうともしないと。椎奈が言いたくないことを、無理に言わせるつもりはない。」

旭が背を向けたまま返した言葉を聞き、胸が痛んだ事に、戸惑う。

ここは、安堵すべき所だろう。何故、旭が私の過去に興味を示さなかったからと言って、こんな気持ちにならなければならぬ。――追求されない事自体、私が旭を受け容れた理由の1つだったはずなのに、何故、追求されなかった事に、不安を感じるんだ。

「…夢宮と私の師匠は、同じ人物だ。私達は、共に修行を受けた。」

戸惑いが、不明瞭な感情が、私の判断を鈍らせてしまったのか。気が付くと、私はそんな事を口走ってしまっていた。

旭が振り返る。驚いた顔をしていた。顔を背ける。

「―すまない。忘れてくれ。」
半ば頼み込むように言った。

「椎奈。」

呼ぶその声に抗えず、視線を旭に戻す。

――私を見つめる、旭は。いつか見た優しい光を、その瞳に宿していた。

「話してくれた事、感謝する。」

それだけを言って、旭は、部屋を出て行った。

呆然と、その扉を見つめていた。言葉が漏れる。

「感、謝……？」

意味が分からない。どうしてそんなに優しい目で私を見る。言っ
てはならない事を言った私に、旭を更に危険に晒す真似をした私に、
どうして感謝する。

―どうして、彼の目に、言葉に、私は喜びを感じている。

旭の心どころか、自分の心すら理解できない。こんな事、今まで
なかった。

私の心は私のものだ。いつも制御して来た。感情に振り回される
事も、理性が判断した行動を―それがどんなものであると―とる
事に躊躇う事も、なかった。

それなのに、何故今になって。私は、私を見失うのか。

これから先、旭は私のせいでより危険に晒されるというのに。旭
を守る為には、これまで以上に慎重な判断が必要だというのに。ど
うして今になって、彼の為を思う判断を、感情が乱すんだ。

これは、旭だけの問題ではない。捨て去った過去を拾い上げる事は、私に関わる全てのものにとって、致命的だ。この3年間で積み上げて来たものの全てを失いかねない。

そんな事、分かりきっているのに、何故私は。

―旭に話してしまった事を、それほど後悔できないんだ。

混乱したまま横になった私は、随分と長い間、眠る事が出来なかった。

持て余す感情（後書き）

椎奈が自分の取った行動に気付く時は、来るのでしょうか。
次回、ちよつと過去編が入ります。

過去夢（前書き）

今回、初の3人称に挑戦です。
それから、タグを付けていた「残酷描写」があります。苦手な方はご注意ください。

過去夢

ごく少数の選ばれた者のみが存在を知る、山。

その山の中腹に、木々を切り倒してできた広場があった。
否、「切り倒した」のではない。

戦いの余波で「薙ぎ倒された」のだ。

広場では、2つの影が相對していた。

体中に深手を負い、肩で息をしている少女。

腕に所々浅い裂傷があるものの、息を乱す事のない男。

少女は今にも倒れそうな様子ながらも、氣丈に男を睨みつけている。
対する男は、嫌な笑みを浮かべてそんな少女を眺めている。

男は細身で長身。異様な程長い腕の先には、人ならばあり得ない長さの爪が伸びている。ざんばらに切られた暗緑色の髪に覆われた細面から覗くのは――黄土色の瞳。

男―妖は、口を歪めて言葉を発した。

「ガキのくせに大したもんだ。普通にやり合ってたら、とうにお陀仏だな。」

満身創痍の少女は、その黒曜石の輝きを持つ瞳に、苛烈な怒りを
はらませた。

妖の言葉通り、本来少女の實力を持てれば、この程度の相手に
遅れをとる事はない。

少女の口から、激情が迸る。

「この、下種が…！」

「悪態は、俺達妖にとって褒め言葉さ。」

笑みを深くした妖が、片手を上げた。広場の片隅から、小さな呻
きが聞こえて来た。

少女は、反射的にそちらに目をやりそうになって、直ぐに妖に意
識を戻した。だが、妖は隙を突いて襲う気配すら見せない。まるで、
そんな事をする必要はないと言わんばかりに。

少女は奥歯を噛み締め、もう一度声の方向に目を向けた。

視線の先では、少女と同じ位の年格好の少年が、暗緑色のものに
縛られ、力なく項垂れていた。意識は無く、体のあちこちに刻まれ
た傷から、血を流している。

先程の呻きは、妖が暗緑色のもの―妖の髪 of 戒めを強くした事で、
少年が意識のないまま漏らしたものだった。

「お前のようなモノに、人の情があるとはな。自分で仕掛けたとは
いえ、ここまで上手くいくとは、夢にも思わなかった。」

嘲りの籠ったその言葉を聞き、少女がいきり立った。しかし、攻撃はしない。少年を危険に晒すという選択肢は、少女には無かった。

妖は、少年を人質にしていた。少女は、少年が傷つけられるのを恐れ満足な攻撃も出来ず、妖が戯れのように少年に攻撃するのを己の身を犠牲にして守る事しか出来なかった。

少年も、通常ならばこの程度の妖に遅れを取る事はない。彼もまた、力を持たない友人を庇わねばならず、実力を出し切れずに妖に捕らえられた。

「…さて、お遊びはこの程度にして、そろそろ終わらせるか。ガキ、この世に別れを告げる準備はできたか？」

「ふざけるな！」

完全に侮った妖の言葉に、少女が叫んだ。その身から強力な霊力が放たれ、妖を縛る。妖が目を見開いた。

「へーえ、その怪我でまだやるか。化け物と呼ばれるだけはあるな。…それにしても。」

そこで一旦言葉を区切り、妖は皮肉な笑みを浮かべた。

「俺はいわば聖域への侵入者たる妖で、お前はそれを祓う術師のはずなのに、実際は異形同士の命の取り合いでしかねーってのは、お笑いだな。なあ、お前もそうは思わないか？」

言葉と同時に、妖の全身から凄まじい妖力が迸った。物理的な力に姿を変えたそれは、拘束を消し飛ばし、少女へと襲いかかる。

「……！」

咄嗟に避けようとした少女は、気付いた。この妖力が、少年にも襲いかかっている事に。意識の無いままこれを食らえば、ひとたまりも無い。

少女はぼろぼろの体を叱咤して少年の元へと駆け寄った。そのまま盾になるように立ち塞がり、その場で不可視の壁を構築した。

だが、既に限界を超えていた少女に、その莫大な妖力を防ぎきるだけの霊力は、残っていなかった。

結界は粉々に打ち砕かれ、少女の体は吹き飛ばされた。華奢な体が描く軌跡は、血によって彩られる。

地面に叩き付けられた少女に、咬笑が浴びせかけられた。

「ははははは！この期に及んでそのガキを守るのかよ！化け物が、人みたいな真似をしやがって、ばっかじゃねえの！？」

「……だま…れ。」

少女が力の無い声ながらも言葉を返す。必死で立ち上がろうとするが、もうその力は残っていない。

弱々しく地を搔く少女に、妖がゆつくりと歩み寄る。

「大体お前、目障りなんだよ。俺達よりも遥かに性質の悪いモノのくせに、正義面して俺の仲間を殺しやがって。お前、——にとって邪魔なんだろう？とっとと消えちまえ、その方が皆の為なんだよ。そんな事、お前だって分かってんだろ？どの面下げて生きてやがるんだ、この化け物が！」

言葉を紡ぎながら次第に怒りを募らせていった妖は、少女を蹴り飛ばした。血塗れの体が弾丸のように宙を飛び、木に衝突した。少女は受け身もとれず、そのまま根元に落ちる。

「あーもう鬱陶しい。とっとと消えてくれよ。俺は——に喧嘩を売る趣味は無い。そっちの少年の命を獲る気は無いのさ。お前を消せば——にも感謝される。そうだろう？」

苛立ちを隠そうともせず吐き捨て、妖は少女を妖力で拘束した。少女は妖気に晒され意識が遠くなりかけたが、気力でつなぎ止める。

少女は、理解していた。自分が化け物である事も、己が消えるのが皆の為である事も。
だが、それでも。

「…きさまのような妖をここに残したまま、死ぬわけにはいかない……！」

「だから、お前を殺したら出て行くっての。お前の妖嫌いは知ってるが、要するに同族嫌悪だろうが。正義面するな、胸糞悪い。」

その顔に嫌悪を滲ませ、妖は手を振り上げた。血に染まった爪が、少女に狙いを定める。

「あばよ、化け物。」

妖が腕を振り下ろした。自身の命を奪う爪が近付くのを、少女の目はやけにゆっくりと映し出していた。

鮮血が、飛び散った。

少女の形の良い目が、極限まで開かれる。唇が動くが、言葉は出て来ない。

「…その子から離れなさい。」

皺だらけの顔に厳しい表情を浮かべた老人が、結印したまま妖を睨んでいた。老人の背後には、戒めから解放された少年が丁寧に横たえられていた。その身に刻まれていた怪我は、無い。

「爺、てめえ…」

妖が低く唸りを漏らす。少女に振り降ろした筈の爪は弾け飛び、手から血が滴り落ちていた。

「3度目は無い。その子から離れなさい。」

「…正気か？このガキを庇うなんて。」

妖の問いかけに対する答えは、老人の身から放たれた研ぎ済まされた霊力だった。それを見た少女が、血相を変えて叫んだ。

「…だめです！そいつを連れて逃げて下さい！」

「それは出来んよ。」

「師匠！」

少女の言葉を聞いた妖が、唇を歪ませた。

「へえ？このガキの師匠、ねえ。酔狂な御仁もいたもんだ。」

そこで言葉を切り、妖は少女を蹴り上げた。浮き上がった体を傷付いた方の腕で掴み上げる。

「その酔狂に付き合ってやるよ。このガキを殺されたくなけりや、大人しくしな。」

その言葉を聞いた老人が、口元に冷たい笑みを浮かべた。穏やか

な笑みしか知らなかった少女が、驚きに目を見張る。

老人から放たれていた霊力が一気に圧力を増し、その場を支配した。

背筋に寒気を覚えた妖は、少女を盾にしながら飛び退く。

刹那。

妖の腕が消し飛んだ。

その場で地面に叩き付けられそうになった少女は穏やかな風に包まれ、少年の隣まで運ばれた。

「な……に……!!」

妖が驚愕に言葉を失う。

老人が放った術は、目標の設定に0.1ミリたりとも誤差が許されない上、莫大な霊力を極限まで練り上げる技術が求められる。術の中でも最高難度を誇るその術を使える人間は、現在はいないとされてきた。

しかし、術の使い手は、間違いなく人間だ。

そんな非常識を常識にできるのは。

「爺、まさかてめえ……！」

しかし老人は、妖に言葉が続ける猶予を与えない。

先程よりも更に甚大な霊力を練り上げ、鋭く唱えた。

「――万魔供服！」

常人の目には見えない霊力の奔流に飲み込まれ、妖は消し飛んだ。

霊力が収まると、老人は振り返り、未だ動けぬ少女に屈み込んだ。
少女の体が光に包まれ、少女の身に刻まれた全ての傷が消えた。

それを確認した老人は、力なくその場に倒れ込んだ。少女は急いで身を起こし、老人を抱え上げた。

「師匠！どうして……」

老人はかつて、最強と呼ばれた術師だった。しかし近年、身体の衰えによって、その甚大な霊力を制御しきれなくなっており、少女

を指導する時でさえ、術の行使を控えていた。

―次に術を使えば、器たる体は靈力に耐えきれず、天命は尽きる事となる。

そう、告げられていたからだ。

少女は、それを知っていた。だからこそ、止めようとしたのだ。少年を救った時点で逃げていれば、まだ可能性はあったから。

それを拒絶した老人は、蒼白になった少女を見上げ、優しく笑みを浮かべた。

「…修行の時、以外に、そう呼ぶなど、言うただろうか？」

「そんな事、今はどうでも良いでしょう！すぐに誰か呼びますから――」

必死で言葉を紡ぐ少女を、老人が死にかけとは思えない力で引き寄せる。

「良いか、――。自分を、責めるでない。」

「っ、何を言って――」

老人の眼光に射抜かれ、少女が息を詰めた。少女は老人から目を逸らす事が出来ず、紡がれる言葉が少女の耳朶を打つ。

「お前は、悪くない。悪いのは、あの妖。…前にも言うたな、決し

て、自分を、傷付けるなど。その言葉を、何故、守らなんだ。」

「それは…、――が…！」

「――を守ろうと、した。それは、よい事じゃ。だが――、自分は、守らんのか？お前はいつも、自分から、傷付きにいく。やめろと、何度も、言うた、だろうに。」

老人が咳き込んだ。赤い華が散った。少女は、ますます青ざめた顔で叫ぶ。

「もうしゃべらないで下さい！今すぐ治癒術をかけてもらえば、まだ…」

「…もう良い。――、最期に1つ、約束して、くれんか。」

「何を――」

次第に血の気の失せていく老人の顔を見て、少女の言葉が途中で消える。

老人の顔には、強い願いが滲み出ていた。

「――、命を、捨てては、ならんぞ。」

「なっ…！」

少女は心を読まれたようなその言葉に何か言いかけるが、老人の言葉に遮られた。

「命を、大切に、するのは、人として、最低限の、事。命を、捨てれば、お前は、…本当に、化け物に、なる。」

「私は―」

「人じゃ。何度も、言わせるで、ない。良いか、――。約束せい。決して、自ら、命を、断たんと。」

老人の気迫に気圧され、少女は頷いた。老人が相好を崩す。

「術師、同士の、約束じゃ。必ず、守れよ。…、――にも、伝えて、くれ。お前達2人を、残して、逝く、わしを、許して、くれ、とな。」

そう言っただけ老人は少女の頬にそっと触れると、ゆっくりと目を閉じた。年輪を重ねた腕が、力無く落ちる。

「…師匠？目を、開けて下さい。師匠！」

少女が揺るも、老人は目を開けない。

「師匠、師匠！ししよ…、――！！！」

少女の叫びが、森に吸い込まれて、消えた。

シイナ

見慣れた天蓋が目に入ったが、自分が今異世界にいて、ここが城の中、己に与えられた部屋だと思い出すまでに、しばらくかかった。

肺が空になるまで、大きく息を吐き出した。腕で目を覆う。

「よりもよって、あの夢か…」

昨日の夢宮の話、旭との会話が原因である事は間違いない。

「…師匠、何故あんな約束をさせたのですか。」

もう届かない言葉を、幾度も重ねた問いを、口にする。

「あれさえなければ、私は—」

—あの後すぐ、命を絶っていた。あれ以上の、犠牲を出さずに済んだ。

「……………」

もう一度息を吐き出す事で、忘れたはずの感情が込み上げるのを押さえ込み、再び胸の奥に何重にも鍵をかけてしまい込んだ。

ゆっくりと身を起こす。普段起きる時間を随分過ぎている事に気

付き、たるんでいる自分に舌打ちした。

「…師匠。これは、警告、ですか。」

旭を受け容れている私に、旭に近付きすぎている私に、このままでは彼も同じ末期を迎えるという、警告。

―否、これは古宇田達にも言える事だ。

「…ソレに近づいたものは、不幸になる。ソレは、災い。ソレに近づいてはならない、心を向けてはならない。近づけば、心を向ければ、災いが降り掛かる。」

忘れぬように、もう一度口ずさむ。旭の優しさに甘えて忘れかけていた、戒めを思い出す。

「―私は、シイナ。名前も過去も、捨てたんだ。」

自分に言い聞かせる。その意味を、重要さを心に再び刻み、二度と気の迷いを起こして言の葉に乗せないように。

言葉にすればそれは、容易に今の私と結びつき、全てが台無しになるのだから。

「過去を捨てるのと、忘れるのは、違う。忘れて、同じ事を繰り返し返すわけにはいかない。」

魂に刻み込む。

そうして、新たに誓う。もう誰も、傷付けない為に。

「師匠。私は、師匠の教えに逆らいます。――私は、彼らを守る為ならば、私が傷付く事を厭いません。」

彼らの命が危機に晒されている時に、自分を守ったりは、しない。そんなもの、何の役にも立たない。

「∴私はもう、シイナの巫女でしかありません。」

椎奈は、登録上の当て字だ。シイナと呼ばれる方が、真に近い。

シイナの巫女――弑名の巫女。

名を弑し、過去を弑し、人の振りをする化け物。禁忌を犯して巫女という仮の肩書きを持つ事で、人の中に紛れる化け物。

：そう。旭が何と言ってくれようと、怒ってくれようと。私は――
化け物だ。

名もないモノが、人であろうはずもない。

「：最も私は、名を捨てて前から、師匠の教えを守れるような、守る事を許されるような、立派なモノではありませんでしたが。」

自嘲を漏らし、勢いをつけて立ち上がった。手早く身支度を整えて、ドアへと歩み寄り、ノブに手を伸ばした。

『……』。

不意に声が聞こえた気がして、振り返る。勿論、何もいなかった。

「：何を血迷っているんだ。」

頭を振って意識を切り替え、私は、覚悟を新たに部屋を去った。

『…どうか、――の定めを――』

その言霊を聞く事が出来たのは、ただ1人。

その願いを、叶えられる、のは――

シイナ（後書き）

何だか「振り出しに戻る」感がありますかね？
早々上手くは行かない、という事で…

予想外の指名（前書き）

時は流れます。

予想外の指名

袈裟懸けに薙ぎ払った木製の薙刀を掻い潜って、人影が懷に飛び込んで来る。

慌てて一步下がり、伸び上がるように下から切り上げて来る木刀――真っ直ぐで、日本にあるものより少し長い――を受け止める。

そのまま弾かれないように薙刀を握る手に力を込めるも、相手は既に間合いを開けていた。

息を継ぐ暇も無く、烈火のごとき斬撃が襲いかかる。刀の軌跡を目で確認する事も出来ず、勘だけで辛うじて受ける。けれど、そうは持ちそうにない。

そのリーチの長さを活かして勢い良く振り上げる事で一度刀を弾いて、薙刀の後ろ側――石突――で最速の突きを繰り出す。

刀が弾かれて体勢を崩しかけた相手には避けられない、と思ったのに、あっさりいなされて、薙刀は下に払い落とされた。

マズい、と思ったその時には、首筋に刀が添えられていた。

「うー…。」

「攻撃の後に隙が出来ている。その後に直ぐ攻撃できるくらいの余裕を持ってないような力の使い方をするな。」

連戦連敗が悔しくて呻くと、刀を引いた相手――椎奈が淡々と告げて来た。

「分かってはいるけどさあ…」

「無理に攻撃をするな。少しは相手の動きを利用しろ。」

「はい。」

それが出来れば苦勞しないのに…という気持ちを込めて返事をするも、椎奈は気付く様子も無く、視線を闘技場の奥へと移した。

「…神門と旭も終わったようだな。」

その言葉に私も視線を椎奈の向けている方向に向けると、詩緒里と旭先輩が言葉を交わしている所だった。

「次は古宇田と旭、神門と私でやるか。」

そう言って椎奈はそれを伝えるべく、視線の方向に歩き出した。思わず声を上げる。

「まだやるの…?」

「何か問題あるのか。」

「いえ…」

心の中で盛大な溜息をついた。またぼこぼこにされるのか…

ここ2ヶ月の旭先輩の成長ぶりは、目を見張るものがあった。初めてこっちで椎奈との魔術戦を行った辺りから、何か心境の変化があったらしく、練習の時の雰囲気が変わった。そうして弱音1つ吐かずに関わり合い組んでいたのが急成長の要因だろうとは思っているけど、それだけでは説明がつかない程、上達が早い。

椎奈との魔術戦を初めて見た時にも思ったけど、旭先輩は教わった事を実戦で使えるようになるのがやたらと早い。技を習ったその

日に行う模擬戦で、その技で勝ったりする。

今の旭先輩は、有段者クラスとも十分やり合えると思う。魔術戦で椎奈の相手をしていただけあって速い攻撃にもついて来るし、訓練の成果か力もある。その上、戦術の立て方がものすごく高度。実力そのものは多分まだ私の方が上だけれど、駆け引きでばろ負けする。

誰よ、旭先輩が運動音痴だなんて言ったの。池上先輩が目立ちすぎてただけじゃない。

「…シイナ様。」

心の中で愚痴っていると、騎士さんの1人―アベル||リベラさんが真剣な表情で椎奈に声を掛けた。

「何だ？」

椎奈が目だけを向けると、アベルさんは灰色の瞳に静かな闘志を燃やして、黒曜石の瞳を見据えた。

「私と手合わせ願いたい。」

「…そうだな……。」

少し考え込む様子を見せる椎奈に、少し意外に思った。

訓練の始めの頃に全員と一度手合わせしたものの、その後椎奈が相手をしていたのは、アドルフさんみたいな本当に強い人ばかりだった。それでも指導にしかないんだから、騎士さん達は悲しそうな顔をしているけれど…

アベルさんは確かに強いけれど、椎奈が普段相手をしている人達の中には入っていなかった。そんなアベルさんの申し出なんて、椎奈は速攻で断ると思っていた。

「…よし、こうしよう。リベラ、私の代わりに、神門と手合わせしてくれ。」

「…え？」

詩緒里が間の抜けた声を上げた。アベルさんも面食らったような顔をしている。

「そして、ヴァレニウス。古宇田の相手をしてくれないか。」

「…畏まり、ました。」

「へ？」

ヨーナⅡヴァレニウスさん。椎奈に相手こそしてもらえないけれど、相当な実力者。アベルさんよりもずっと強い。

とても私が相手になるような人じゃない、と思うんだけど…

「何をしている。早く準備しろ。」

構わず椎奈が私達を急かす。椎奈の雰囲気気圧され、試合戦の内側に入った。詩緒里もややびくつきながらアベルさんと対峙する。

「ヘラー、ガウス、審判を頼む。」

「…分かりました。」

近衛騎士団第1隊のトップツーのアドルフさんとミュリエルさんが、椎奈の依頼に何とも言えない顔で頷いた。ミュリエルさんが、少し迷った様子で口を開く。

「しかしシイナ様、よろしいのですか？」

「訓練を初めて、およそ2ヶ月。そろそろ良いだろう。ヘラー、拙いか？」

「…いえ、こちらとしても必要な事です。」

…よく分からない会話だ。何が良いのか、さっぱり分からない。私、初心者によくやく毛が生えた程度なんですけど！そして、必要って、何！？

心の中で叫ぶも、言っても聞く耳を持ってもらえない事はこの2ヶ月で学んでいるので、溜息を飲み込んで構えた。

「「始め！」」

アドルフさんとミュリエルさんの声が重なり、私は地を蹴った。

予想外の指名（後書き）

最近なかなか更新できていませんが……
ご意見感想、お待ちしております！

速さ(前書き)

先程久しぶりにアクセス解析を見たら…

p v 7 0 1 7 ユニーク 1 0 7 6

……びっくりしました。いつの間に……

見て下さっている方々、本当にありがとうございます！

短くても良いので、ご意見ご感想、お待ちしております！！

速さ

細身の西洋剣が鋭く突き出されるのを薙刀の柄で弾く。

直ぐに下がって薙刀を払うと、ヨーナさんは飛び退いて退ける。

そのまま間合いを詰めようとするのを再び薙刀を払って防ぎ、連続で突きを繰り出した。

ヨーナさんが紙一重で避けるのを見ながら、私は心の中で首を傾げていた。

——遅い。

動きが、遅い。何て言うか、調子悪いの？て聞きたい位。戦術の組み立て方は洗練されているのだけど、1つ1つが遅いせいでバレバレ。正直、さっきから違和感が勝ってやりづらい。

「くっ！」

ヨーナさんが、私が突き出した薙刀を掴もうとするので、振り上げて阻止する。その機会を逃さず西洋剣をもう一度突き出して来るのを、体を半身にする事で避ける。

同時に薙刀を袈裟懸けに振り降ろして——

「——それまで！」

アドルフさんの静止の声がかかって、手を止めた。ヨーナさんが悔しそうに唇を噛み締める。

「勝者、コウダ様。」

その声に、自分が勝ったとようやく理解した。

「それまで。勝者、カンド様。」

隣からそんな声が聞こえて来たから目を向けると、詩緒里が何だか戸惑い顔でアベルさんと自分の刀を交互に見やっていた。

「…コウダ様。素晴らしい上達ぶりですね。脱帽致しました。」

ヨーナさんがそう言って手を差し出して来た。咄嗟にその手を握り返す。

「はあ…。ありがとうございます。」

相手が心の底から感嘆の眼差しで見つめて来ている状況で、「体調悪かったんですか？」とはまさか聞けない。椎奈じゃあるまいし。

「…まだ振った後に隙がある。振り幅を考えろ。」

不意に背後から件の椎奈の声が聞こえて、飛び上がった。振り返ると、無表情の椎奈と目が合う。

「振り幅？」

「つまり、自分の制御できる範囲内で振り上げると言っている。直ぐに引き戻せないような振り方をするな。」

「分かった。…ねえ、椎奈。ヨーナさんが調子が悪いの、気付いて

たの？」

「…いや、ヴァレニウスは別に体調不良でも不調でもない。」
「え？」

思わぬ言葉に面食らった。だって…

「…古宇田。まさかとは思うが、気付いていないのか。何故旭が始めて僅か2ヶ月で、あれだけの速さを身につけているのかを。」

「ごめんなさい…」

怒られた訳ではないけれど、思わず謝った。椎奈が溜息を漏らす。

「旭は常に、加速魔術を使っている。いろいろ組み合わせを試しながらな。」

「……は？」

口がぽかんと開くのを感じた。椎奈は構わず説明を続ける。

「加速魔術にもいろいろある。移動の速度を速めるもの、身体能力そのものを上げるもの、風に押させて勢いを増させるもの。旭はそれらを駆使して、本来の自身の能力以上の速度を得ているんだ。普通はそんな事をすれば体を壊すが、保護魔術も並列起動している。」

…旭先輩……。道理でやたらと速いと思った。

でも確か加速魔術って、専門の訓練が必要とか、適正が無いと出来ないとか、魔術書には書いてあったんだけどなあ。

「古宇田も神門も、今まで私か旭、ヘラー、ガウスとしかやっていないだろう。今となっては他の奴らでは、遅く感じるのも当然。目が慣れてしまっているからな。」

「…だから、妙に遅く感じたんだ…」

いつの間にか私の隣に来て一緒に説明を聞いていた詩緒里が、言葉を漏らした。

「そうだ。そろそろ勝っても良いだろうと思ってやらせてみたが、…力不足だったな、彼らでは。動きを見極められるだけでは勝てないから、もう少し拮抗した戦いになると思ったのだが。2人とも、上達したな。未だ直す所はあるが、随分様になって来た。」

思わず顔を見合わせる。詩緒里の顔が輝いていた。私も同じだろう。

訓練初日にも思ったけれど、椎奈に誉められるのは本当に嬉しい。滅多に誉めてくれないけれど、上達とかをきちんと評価してくれる。これからも頑張ろう、という気になる。

「…さて、旭。私達もやるぞ。ああ、勿論加速魔術は無しだ。どれくらいの速度がついたか、見たい。」

「…分かった。」

文句を言わない旭先輩、凄い。魔術が使えるなら、わざわざそんな事をしなくたって…

「古宇田、常に魔術が使える状況で戦えると思うな。魔術を無効化する方法は存外に多い。それに、いくら旭が瞬時に魔術を展開できるとはいえ、その一瞬が命取りになる事だってある。剣術だけの実力を上げる事も必要だ。」

顔に考えが出ていたらしく、椎奈に厳しい声で言われた。戦いに関して、椎奈は妥協しない。それもこの2ヶ月で骨身に沁みて分かった事だ。

「はい。で、私達はどうするの？」

「古宇田はヘラーと、神門はミュリエルとだ。」

…やる気になったとはいえ、そろそろ辛いなあ。

速さ（後書き）

：気付きましたが、椎奈はスパルタですね。初心者相手に魔術で加速している人と戦わせるとは……

旭も、初心者でそんな事が出来るとは流石です。普通は習った事だけではないですよ……

魔術の常識と学習

碧瑠璃色の輝きと共に、氷の刃が私目掛けて飛んで来る。目の前に風の膜を作ってそれを防ぎながら、突風を叩き付けた。

「うわ！」

里菜がバランスを崩すのを察して、そのまま上から大きな風の鎌を落とす。

再び碧瑠璃色の輝きが閃き、風の鎌が水に吹き飛ばされた。そのまま襲いかかって来る水を鎌鼬で落としたとき、足下から氷の鎖が伸びて、縛られた。

「あっ…」

竜巻を起こしてそれを吹き飛ばそうとしたけれど、その前に里菜の放った氷の手裏剣が目の前に迫っていた。思わず目を閉じる。

「―それまで。」

椎奈の声が響き、手裏剣も鎖も消え、風も収まった。

「…神門、拘束された時はそれから逃れる事より、相手の追撃を防ぐ事が優先だ。元々それを狙って拘束するんだ、逃れる事に意識を逸らしたら相手の思うつぼだ。」

「…はい。」

「古宇田は攻撃の時の防御が甘い。簡単に足下を掬われてどうする。もう少し魔力の流れに気を配れ。」

「はい。」

「…まあ、使う魔術の種類は増えてきたがな。ようやく身に付いてきたか。」

椎奈がそう言って、結界を解除した。びしょ濡れだった部屋が、あっという間に元に戻った。

「旭、他に何か追加する事はあるか？」

「いや。」

短く否定の言葉を発する旭先輩に頷いて、椎奈が向き直る。

「さて、魔術書も運び込んだのである事だし、学習に移るぞ。いつものように、使いたいものがあったら、練習する。」

「…今日は、椎奈達は良いの？」

椎奈と旭先輩の魔術戦は、3日に1度行われている。毎日やったら霊力の消費が多すぎるからだそうだ。3日に1度でも辛そうかどうか…

今日は魔術戦を行う日の筈だ。旭先輩も疑問に思っているらしく、椎奈に視線を向けている。

「ああ。今日は座学に重点を置く。」

椎奈は簡潔に頷いて、魔術書を開いた。

椎奈は「先生」。教わっている側が意見を言う事なんて出来ない。私達は素直に従った。

魔術の勉強も随分進んで、いろいろな事を知った。

魔術は、魔力によって、あるいは、魔力を介して精霊などの力を借りて、世界の情報を書き換えることで発動する事。

呪文や結術は、書き換える情報をはっきりさせるもの、要するにコンピュータのプログラムのようなものである事。

呪文を唱えずに魔術の名前だけを口にするのは「詠唱破棄」、何も言わずに魔術を発動するのは「無詠唱」と呼ばれ、どちらも高度な技術であり、魔術のレベルが上がるごとに難しくなり、無詠唱は、どんなに優秀な魔術師でも中級魔術が限界である事。

特に理魔術は、全ての理論を完璧に理解し覚えないと詠唱破棄さえ出来ず、理論が常識となって初めて無詠唱が可能になる事。

理魔術、神霊魔術は精霊魔術という5系統全てを操る事になる為、相当な魔力が必要な事。

神霊魔術は魔力を更に練成し、世界に溶け込ませる必要がある事。

精霊魔術はともかく、理魔術、神霊魔術に結術、結印は不可欠で、特に神霊魔術はいくつもの印を組み合わせて初めて魔術を構築できる事。

：つまり、椎奈も祖先輩も、魔術理論を全て覆して粉々にしているという事を知った。

以下、2人の言い分。

「魔法陣、呪文、結術は、どれも魔術の完成形をイメージする為の呼び水だ。結果的にどうなるのかを理解できていれば、全体の完成図を思い浮かべるだけで魔術は発動する。」

「術も似たようなものだ。組み合わせられた結印、長い詠唱。どちらも世界への干渉を目的としていて、その順序を指し示すものだ。順序や方法を頭に入れてしまえば、刀印1つで事足りる。」

以下、魔術書の言い分。

「魔術は過去の魔術師達が連綿と受け継いできた英知の結晶であり、膨大な理論背景、知識を元に長い年月をかけて作り上げられたものである。魔術はそれ自体が巨大な情報体であり、1人の人間がそれを常識とする事は事実上不可能である。」

これを里菜と2人で読んで下した結論。

：椎奈達の「当たり前」を信じてはいけない。

そうは言っても、私達も結術無しで魔術が使える。これはユウやミキのおかげだそうだ。

更に、まだ中級魔術の一部分くらいまでしか練習していないけれど、ほぼ全てを無詠唱で出来る。

私達はイメージを持つ事を優先したから、理論が無くても魔術が使える、と椎奈が教えてくれた。

そこまで考えて指導してくれていた2人に、心から感謝した。

「あ、私これ試すー。」

不意に里菜が声を上げた。椎奈が里菜の指す魔術書のページに目を通す。

「…初日に部屋を氷付けにした魔術の応用だ。直ぐに出来るだろう。無詠唱でいけ。」

「…やってみます。」

頷いた里菜が魔法円の中央に立つ。目を閉じると、碧瑠璃色の光が魔法円の上を走った。

氷の壁が里菜の前に立ち上がり、円柱を作った。そのまま一気に円の半径が小さくなって、氷が粉碎した。

「成功？」

「ああ。」

椎奈の首肯を見て、里菜がガッツポーズをした。

「神門は何かあるか？」

「うん。…えっと、これ。」

そう言って、移動魔術を指し示した。前にミキが使っていたものだ。

「…術に移動魔術は無いから、あまりよく分からないが……、旭、分かるか？」

椎奈に呼ばれて顔を上げた旭先輩が、魔術書を一瞥して、簡潔に答えた。

「移動先をきちんと意識していれば、問題ない。」

「分かりました。」

頷いて、里菜と入れ替わりに魔法円の中心に立つ。深呼吸をしてから、円の外側の一点を見つめて、風を起こす。

橙色の閃光と強い風に思わず目を閉じて、次に目を開けた時には、さっきまで見つめていた場所に立っていた。

「凄い、詩緒里！良いなあ！」

里菜の言葉に笑顔を向ける。確かに、移動に魔法を使うというのは、1つの憧れだ。

「…ん？詩緒里、腕どうしたの？」

里菜が気付いた様子で私の右腕の切り傷に目をやった。一瞬口ごもる。

「古宇田の魔術で少し切ったようだな。」

「え、ごめん…」

椎奈の説明に、里菜が焦った顔をした。首を横に振る。

「お互い様だよ。この先、私が怪我をする事もあると思うし。いちいち気にしたら、練習にならないよ。」

「…そっか。じゃあもう謝らない。」

里菜はそう頷いた後、私に近付いてきて、右腕を取った。切り傷に右手を翳す。

瑠璃色の光が傷を覆い、何かが流れ込むような感触がした。
光が消え、里菜が手を離した。にっこりと笑っている。
腕を見ると、切り傷は跡形も無く消えていた。

「治癒魔術、覚えたんだ。一昨日…だったかな？自分で試して上手くいったから、詩緒里にも試したけど…成功して良かった。」
「ありがとう。里菜、凄い。」

水属性の魔術が治癒魔術に向いているというのは知っていたけれど、ここまで完璧に治すのは、かなり高度な魔術の筈だ。

「…治癒魔術も中級魔術だな。大したものだ。」

椎奈の賞賛に、ちょっと違和感を覚えて声の方に目を向けた。
椎奈の顔には、何の感情も浮かんでいなかった。無表情のまま、じっと私の腕と里菜を見つめている。

「…椎奈、そろそろ戻らないか。夕食の時間だ。」

旭先輩の言葉に、椎奈が視線を外し、片付けに取りかかった。何となく動き辛かった私達はほっとして、片付けに参加すべく駆け寄った。

魔術の常識と学習（後書き）

詩緒里も里菜も順調に成長しているようですね。
この間の椎奈達の成長は…書けるのでしょうか…

考えるよりも、やるべき事

部屋に戻って直ぐ、サーシャさんが夕食を運んできてくれた。

今日は魚料理。何でも、エルド国の近くに大きな河があつて、そこで魚がたくさん捕れるそうだ。おかげで、比較的高い頻度で魚が食べられる。日本人としては実に嬉しい話だ。

「ね？ 椎奈もそう思うよね？」

「…何が言いたいのか、さっぱり分からないのだが。」

相も変わらず食事量の増えない椎奈に、食欲をそそのかすその魚を食べるような言外に促してみるが、椎奈は実に素っ気ない返答を返しただけだった。めげずに続ける。

「だからさ、魚よく出て来るし美味しいし、日本人としては嬉しいよね。」

「別に。必要な蛋白質を摂取できれば、肉だろうと魚だろうと豆だろうと何でも構わない。」

「摂取、って…」

詩緒里の呟きは、椎奈に無視された。

「そんな事言っていないで、椎奈、ちゃんと食べようよ。」

「くどい。もう十分だ。」

短く答えて、椎奈は立ち上がった。

そのまま部屋を出て行こうとする背中に、旭先輩が声を掛けた。

「椎奈、どこへ行く。」

「図書館で調べものだ。日付が変わるまでには戻る。先に休んでい

ろ。」

振り向きもせずに答えて、椎奈が出て行った。

堪えきれずに、私は溜息をついた。

夢宮にあった事を話した次の日位から、椎奈の態度が変わってしまった。

訓練の間は、今までとほぼ変わらない。丁寧に技の説明をしてくれたり、適切なアドバイスをしてくれたり。手取り足取り教えてくれる。

けれど、それ以外の場所では、必要最低限の受け答えや、連絡事項とかの事務的な事以外、ほとんど会話に加わる事はないし、今みたいに1人でどこかへ行ってしまう事が多々ある。

―まるで、学校にいる頃に戻ってしまったみたいだ。

私達は、まだ良い。問題は、旭先輩との距離が広がったように見える事。

最近、椎奈が旭先輩と一緒にいる所を見ていない。前は図書館に行く時は、一緒に行っていたのに。今日みたいに行き先を答えるのはまだ良い方で、「私がどこで何をしようと勝手だろう」って答える事も少くない。

夢宮に会う前の、少し明るくなったように見えた椎奈は、もうどこにもいない。素っ気なくて、いつも独りで、誰も信じない。初めて会った頃の椎奈、そのままだ。

それが―凄く寂しくて、悲しい。そして…怖い。

—このまま椎奈が、ふっと、いなくなってしまうそうぞ。

「…古宇田、余計な事を考えるな。」

いきなり旭先輩に話しかけられて、大いに焦った。
思考読まれた!?

「考えた所で答えが出ないのならば、思考を止めるべきだ。悪い方に流れ、抜けられなくなる。」

私の焦りなど意に介さずに旭先輩が続けた言葉に、目を見張った。

「今自分がするべき事を見失うな。考えても答えのでない事に拘るくらいならば、より強くなる為に必要な事を考えろ。」

旭先輩は、私にだけではなく、詩緒里にも語りかけていた。—そして、自分自身にも。

—旭先輩の言う通りだ。椎奈の事を心配するより先に、先ず自分の事。私は魔術も薙刀もまだまだ。自分の身だけでもちゃんと守れるようにならなきゃ、椎奈や旭先輩の足手纏いだ。

きっと旭先輩も、自分の力不足を感じているのだと思う。椎奈に教えられているという現状は、納得のいくものではないのだろう。

だから、旭先輩は。広がった距離に悲しむなんて無駄な事をしないで、距離を縮める為に、訓練に集中しているんだ。

「…分かりました。ありがとうございます。」

椎奈に、私達を信じてもらう為にも、もっと強くなる。椎奈がどんなに強くても、独りじゃ出来る事は限られている。私達が強くなれば、椎奈も少しは肩の力を抜く事が出来る筈だ。

—そうすればきっと、また、椎奈から近付いてくれる時もある。

思いを新たに、とりあえずは明日に備えてゆっくり休むべく、私は寝室へと向かった。

考えるよりも、やるべき事（後書き）

椎奈の決意は、こういう形で現れてしまったようですね。
旭が意外と面倒見が良い回でした。

越えられない、一線(前書き)

おかげさまで70話です。今までお付き合いいただいている方々、
本当にありがとうございます。

どんな事でも良いですので、ご意見ご感想ご指摘、お待ちしております。
ます。

越えられない、一線

この世界では、日付が変わる前にはほぼ全ての人間が寝静まるようだ。勿論兵が見回りを行ってはいる。だが、その他の使用人は既に各自与えられている部屋に戻っていた。

私にとっては、この時刻は仕事の終了時刻、あるいはそれでも仕事が残っている時刻である為、この静けさには少し違和感を感じる。図書室での用件を済ませ、神官の練習場に足を向けた。ここ2ヶ月というものの、ほぼ毎日訪れているが、未だに誰かに遭遇した事は無い。

ここの神官は、自主練というものをしないらしい。騎士達といい神官達といい、向上心の無い者ばかりで嫌になる。

練習場に入り、いつもの結界を張り巡らせる。図書室から拝借した魔術書を開き、もう一度確認する。

精霊魔術水属性、中級治癒魔術。古宇田が使っていたものとは、また違うものだ。相当古いそれは、今では使う者はほばいないそうだ。魔力の消費量が多い、というのが理由らしい。

「……………」

確認を終え、持っていた小さな石を、五芒星の頂点となるように足下に置く。魔術書を脇に置いて、結印し、深く息を吸って意識を集中する。

青い光が5つの石を線で結び、五芒星が淡く輝く。

時間を置かずして五芒星が宙に浮き上がり、私の目の前で形を維持したまま静止したのを見て、魔術を解除した。

今行ったのは、魔術の動作確認だ。正しく魔術の発動順序を踏み、霊力を流せているか、魔術が完成しているか、調べる事が出来る。大規模魔術など、実際に発動させるわけにはいかない魔術の練習に使われる事が多い。

始めに置いた石は、魔術の杖に使われている石―晶華しょうかだ。魔力の流れを制御し、魔力量を調節できる晶華を使う事で、魔術の動作確認をより精確なものと出来る。

五芒星の形がどれだけ維持できるか、動きを制御できるかが、魔術の完成度の指標となる。

―魔術は問題なく発動している。ならば…出来る筈だ。

左手の袖を捲り、腕を外気に晒す。薄暮の中でも白さを確認できるその腕に、刀印を結んだ右手を無造作に振り降ろした。

左前腕に赤い線が走り、血が滲む。

血が床に落ちないように腕を傾けて、目の前に掲げる。もう一度深く息を吸い込んで、最大限まで集中力を高めて、魔術を、使った。

青い光が左腕を覆う。霊力が渦巻き、傷に流れ込んだ所で―光が、消えた。

傷は少しも変わる事無く、血を滴らせていた。

溜息をついて、傷に止血の術を掛ける。直ぐに血が止まったのを確認して、袖を元に戻した。

「…やはり、駄目か。」

漏れた眩きに落胆が滲む。

師匠に術を教わり始めてから、9年。師匠の教えが適切だった為か、力を求めてただがむしゃらに修行を続けた成果か、師匠に教わった術や、術書に書かれた術で出来ないものは無い。旭から借りた魔術書のまとめが非常に分かりやすかったおかげで、魔術も順調に修得している。

―ただ1つ、「治癒」に関する術、魔術を除いて。

師匠に何度も教わって、辛うじて止血、止痛の術は出来るようになった。戦いにおいて怪我をする事は少なくないが、戦闘中に暢気に治癒など行う暇はない。命に関わる失血を抑え、動きを阻害する痛みを取り除けるこれらの術を根気強く教えて下さった師匠には、感謝してもしきれない。

旭に出会うまで、それ以外の術を求めた事は無かった。最低限の医療に基づく治療は自学で出来るようになっていたからだ。縫合も出来る。それ以上の治療を必要とする怪我を負う事など、近年は無かった。

しかし、旭と約束した後から、再び治癒術を練習し始めた。術書

を漁り、魔術書を読みふけり、ありとあらゆる治癒術、治癒魔術を試した。

更にこの世界で古宇田達とも行動を共にする事が決まり、私にとって治癒魔術の修得は最優先課題となった。

災いをもたらすモノと共に行動して、怪我をしない筈が無い。医療の発達していないこの世界では、治癒魔術が頼り。私のせいで傷付くならば、私が治すのは当然の義務だ。だからこそ、時間を見つけたら魔術書を漁り、今日までに精霊魔術、神霊魔術、理魔術の全ての治癒魔術を試した。

―だが、そこまでしても尚、治癒魔術は成功しない。

今日のように、動作確認は上手くいくのだ。本来ならば成功する筈なのだが、何度試しても傷が塞がる事は無い。止血さえ出来ないのだから、救いようが無い。

先刻、古宇田が治癒魔術を成功させたのを見て、彼女達が自分自身を守る術を手に入れた事に安堵すると同時に、自分がどれだけ出来損ないのかを突きつけられたような気がした。

確かに治癒魔術は難易度が高いとされている。だがそれはあくまで、「他の魔術に比べて」だ。初級の治癒魔術は他の中級魔術の難易度、という程度の話。上級魔術を当たり前前に使える魔術師が初級、中級の治癒魔術に苦勞する事は無い。

私が治癒術を1つたりとも満足に扱えない理由にはならない。

「…攻撃魔術なら、練習さえ必要ないというのにな。」

自らを嘲る。自分では見えないが、今私の口には、化け物に相應しい、歪んだ笑みが浮かんでいる事だろう。

堪えきれず、低い笑声が漏れる。成程、他者を容易に傷付ける事は出来ても救う事は出来ないというのは、確かに災いをもたらす身に相應しい話だ。

「…まったく、あの3人だけで旅出た方が、余程良いのではありませんか？この世界の神よ。」

実際に神に届かぬよう言霊を消して、旭と契約を交わした神に語りかける。答えなど必要ない。定めだか何だか知らないが、今私が言った言葉が真実である事に疑いは無い。

「これで旭と約束さえしていなければ、私はさっさと姿を消す所なのだな。」

そうひとりごちたとき、旭の言葉が甦った。

『「約束などするのではなかったなどと、言うな。」』

思わず目を閉じ、頭を振った。

「…旭。何故、私などの側に居たいんだ。」

1度も問う事の出来ていない問いを、風に乗せる。

旭には何度も救われた。欲しかった言葉も、知らなかった感情も与えてもらった。

―だが、私が旭に与えたものは、災いと不幸と、歪んだ生き筋。それだけだ。これから先も、それは変わらない。

それなのに、何故。

ゆっくりと息を吐き出して、答えの無い疑問に嵌りかけた思考を止める。

「…戻るか。」

日付が戻る前に帰ると言った気がする。日付が変わったからどうしたという話だが、言った言葉には責任は持たねばならない。

結界を解除し、部屋を離れた。そのまま寝室を目指し、人目を避けつつ、やや早足で歩き去った。

越えられない、一線（後書き）

椎奈の苦手編でした。

70話という区切りの話にしては、暗かったですかね…

慰め（前書き）

ちよつと間が開きました。見捨てられていないことを祈りつつ…（笑）

慰め

部屋の扉がある廊下にたどり着く直前の角で、旭と出くわした。

「…旭、どうかしたのか？」

訓練の疲労か、旭がこの時間に起きている事は少ない。起きていたとしても魔術書を読むだけで、城を徘徊するような習慣は無かった筈だ。

「帰りが遅かったから、何かあったのかと思った。椎奈が言った時間を守らない事など、滅多に無い。」

警戒心から、周回に出ようと思い至ったようだ。

「これからは、下手に戻る時間を明言するのは避けた方が良さそうだ。」

「少し調べ物に手間取り、時間を忘れただけ。何も起こってはいない。」

私が治癒魔術を練習している事は、誰にも話していない。私が基本的な治癒魔術1つ使えないと知れば、要らぬ不安を煽ると判断したからだ。

「そうか。ならば、部屋に戻るぞ。」

「ああ。」

旭の言葉に頷き、歩き出したが、旭が動かない事に気付き、足を止めた。

振り返ると、旭は私に歩み寄り、目の前で立ち止まった。

「…戻るのではなかったのか？」

怪訝に思っ て問いかけると、旭が私の左腕を取った。

「…何も無かったのならば、この腕はどうした。」

そのまま袖を捲られる。止血した傷が露になった。

「何でも無い。部屋に戻って処置すれば、数日で治る。」

そう言っ て腕を引こうとしたが、旭は手を離さない。

「そういう事を訊いているのではない。何故怪我をした、と訊いている。」

「敵襲にあった訳ではない。旭には関係ないだろう。」

言及を避けるべく手を離させようとするも、思いの外強い握力に既視感を覚えて、振りほどくに振りほどけない。

―この頃、どうも余計な事を思い出す。

心の中で舌打ちをして、先程から無言のままの旭に再び言葉を重ねる。

「戻るのだろう。明日―もう今日だな、今日も訓練はある。休まないと疲労が残るぞ。」

ただでさえ、昨日の旭は少し妙だったのだから。

私の言葉に対する旭の答えは、行動で示された。

旭が、腕を捕らえているのとは反対の手を、傷にかざした。旭の霊力が穏やかに流れ込む。

旭が手を離した。腕を見ると、傷は跡も残さず消えていた。

「：西洋魔術で、治癒魔術は珍しいな。旭が治癒魔術を使うのを初めて見た。」

「理魔術だ。こちらの魔術書に載っていた。」
勿論知っている。数週間前に試して、ものの見事に失敗した魔術だ。

「：そうか。傷跡も残らないとは、流石だな。」

再び込み上げる自責の念を押さえ込み、表情を変えずに頷いてみせる。

―旭が使えるのは、当たり前だ。

それ以上の会話を避けるべく部屋に戻ろうと踵を返した時、背中に声がかかった。

「椎奈。自分を傷付けるような真似をするな。」

その言葉に、嫌でも一月半前に見た夢を思い出す。
全く―何故旭はこれほどに、彼等と同じ事を言うのか。

「その傷、椎奈が自分で付けたものだろう。何故だ。」
「：言っただろう、旭には関係ない。」

追求を拒む。頭に浮かぶのは、血の気の無い皺の刻まれた顔と、
飛び散る赤い華。そして―赤く染まった、凄惨な光景。

もう二度と繰り返さない為にも、旭をこれ以上近づけるわけには
いかない。

―弑名という呼び名に込めた言霊を、願いを、無駄にはしない。

腕を強い力で掴まれた。そのまま無理矢理振り返らされる。

「何故、自分を傷付けた。」

私の目を覗き込むようにして、旭が繰り返す。絶対に引き下がないという意志が伝わって来た。

ここで意地を張って黙っていても、埒が明かない。そう判断して、私の欠陥を教える事にした。

「…治癒魔術の練習をしていた。時間の無駄遣いにしかならなかったが。」

「練習をする事は、無駄遣いにはならない。」

「結果が出ればな。この2ヶ月の結論だ。この国にある全ての治癒魔術を試した。…私は、治癒魔術が使えない。」

旭の表情が僅かに崩れた。その顔に浮かぶ感情を読み取る事はせず、淡々と言葉を続ける。

「だが、旭や古宇田が使えるのならそれで良い。ただ、誰かが怪我をしても、私は役立たずだという事だけは頭に入れておいてくれ。」

そう締めくくった私の言葉を聞き、旭がすっと手を伸ばして来た。手は、そのまま私の頬に触れる。肌越しに温もりが伝わって来た。

「誰にでも苦手な事はある。気に病むな。俺が使えるなら、問題無いだろう。」

穏やかな口調で告げる旭の手に、そっと触れる。

「…他を傷付けるだけで、救う事の出来ない、半人前の術師。問題無い訳が無い。」

「治療魔術だけが、人を救う手段ではない。」

静かに紡がれた言葉に、思わず、先ほどと同じ、歪んだ笑みを浮かべた。

「そうだな。そしてその全てが、私は不得手だ。攻撃魔術は仮令古代禁術であっても一度でできるがな。」

…まあ、どうでもいいことだな。旭の言う通り、旭も古宇田も使えるなら、ひとまず問題ない。」

そう言って、旭の手を外した。

「いい加減、戻るぞ。そろそろ誰かが不審に思うだろう。」

旭は、外された手を宙に止め、無言で私を見つめていた。何となく背を向け辛く、旭を見返した。

常よりも更に澄んだ光を讃えた瞳で私を見つめたまま、旭は口を開いた。

「…椎奈。俺は、お前が進んで人を傷付けようとする人間ではないと知っている。お前が力をふるうのは、他者を守るためだとも。守る為に使われる攻撃魔術に長けている事は、自分を卑下する理由にはならない。だから、…そんな顔をするな。」

優しく、言い聞かせるように告げられた言葉に不意をつかれた。顔を見られたくなくて、慌てて背を向ける。

「…戻るぞ。」

「ああ。」

旭は短く答えると、私の横に並んだ。どうにも落ち着かなくて、顔を背けたまま歩き出した。旭もそれに合わせて歩く。

それ以上の言葉を交わさずに、私達は部屋まで戻った。

慰め（後書き）

椎奈の辞書に「心配される」という言葉はありません。
あと、「照れ隠し」という言葉も無いようですね。

異変（前書き）

ようやくの新展開です。長かった……

異変

翌朝、朝食の席。

椎奈が食べないのは今更だけど――

「――旭先輩、それだけですか？」

「ああ。」

旭先輩までもが食事が少ないのは、何事だ。唯一の大食い仲間――と言っても、旭先輩はあくまで高校生男子の平均。私が大食いなだけ――だったのに……

そこで思い出す。そう言えば、昨日も余り食べていなかった。いつもはお変わりするのに、詩緒里と同じ量で食べやめていた。

普段の半分くらいの量で食べやめた旭先輩は、私の言葉に頷くと、立ち上がった。そのまま部屋に向かおうとする。

「――待て、旭。」

不意に、旭先輩の隣に座っていた椎奈がそれを止めた。椎奈は立ち上がった。食事中に席を立つなんて椎奈らしくもない行動に、詩緒里と顔を見合わせる。

「何だ？」

振り返る旭先輩に、椎奈が歩み寄る。

いつも会話をするときの距離よりも、更に一步、二歩と歩み寄って―旭先輩の目の前で静止した。

ずっと白い手が伸ばされ、旭先輩の額に当てられる。

って、何してんの!?

「…やはりな。旭、熱がある。」

呟くように行って、椎奈が手を離す。そのまま旭先輩を見上げるようにして、大真面目な顔で言葉を続けた。

「昨日から余り調子が良くないとは思っていたが…。自覚症状はあるか?」

旭先輩が表情を変えずに答える。

「食欲不審、倦怠感、頭痛だ。」

「風邪の症状は?」

「無い。疲労の蓄積だろう。」

椎奈は真剣な表情で頷いた。

「…そうか。今日は訓練は休みだな、部屋で寝ている。…訓練が始まって、2ヶ月。不慣れな激しい運動を続けていたからな。それに、これほど続けて魔術を使う事も余り無かった筈だ。疲れがたまっても無理はない。大丈夫か?」

「休めば問題ない。」

「なら良いが…。昼に向かって熱が上がる可能性もある。きちんと寝ている。」

そう言って椎奈が、もう一度旭先輩の額に手をやった。

………そういう事は2人っきりでやってくれないかなあ。

さっきから私達2人は、どうしようも無くて、固まっている。音を立てるのも躊躇われて、ただ黙って2人の様子を見ているしかなかった。

ホント、何で2人ともそんな普通の顔をしてるんだろう。椎奈と旭先輩の距離は、ほとんど触れ合うような距離だ。2人の身長差はだいたい15?位だから、あの距離では互いの息がかかる状態の筈。確かに2人は付き合っているとはいえ、お年頃の男女には、いささか緊張を強いられる距離だと思うんだけど、どちらもその様子はない。

…ともかくはつきりしているのは、2人の空気から考えても、私達は邪魔だという事だ。

「…部屋に戻れ。氷枕の類いはいるか？」

手を離し、椎奈が問いかける、旭先輩が静かに首を振った。

「不要だ。寝ていれば治るだろう。」

「…まあ、さほど熱は高くないが……。無理はするな。」

「ああ。」

旭先輩は今度は頷いて、一步後ろに下がり、踵を返した。そのまま部屋に戻って行った。

椎奈が小さく息を吐き出した。そのまま私達の元へと戻って来る。

「食事中に悪かった。」

律儀にそんな事を言って、椎奈が食事を再開する。そこに、照れ隠しをしている様子はない。

―まあ、椎奈だしね。

無理矢理自分を納得させた。

「古宇田、神門。そろそろ食べ終わらないと、訓練に間に合わないぞ。」

椎奈の言葉に、詩緒里が驚いたように聞き返した。

「え？」

椎奈が眉をひそめて、繰り返す。

「訓練の時間まで、そう時間は残っていない。少し食べるのを急げ。」

「…いや、そういう事じゃなくてさ、椎奈。今日は休みじゃないの？」

詩緒里の言わんとしている事―私も同感だ―を代弁すると、椎奈の眉間の皺が深くなった。

「…旭は体調を崩しているから休む。2人とも、体調が悪いのか？」

「いや、別に…」

詩緒里と2人して首を振る。

「ならば、休む理由は無いだろう。」

「…旭先輩の看病、しなくていいの？」

詩緒里が、私達が言いたい事をはっきりと口に出した。そうじゃないといつまでも通じないと判断したのだろう。同意見だ。

「旭が寝ていれば良いと言っていただろう。旭も子供じゃないんだ、

それくらい自己診断できる。旭が不要だと言ったのに、わざわざ残る必要はない。」

あっさりと言い切る椎奈に、もう言う言葉はない。椎奈がそれで良いなら、それで良い。そんな境地に達していた。

―久しぶりに休める、と思った期待は忘れる事にしよう。

「…それで、食べなくていいのか？」

「え？あ、いや、もうちょっと食べたい。」

椎奈の問い掛けに、呆け気味だった私は、慌てて答えた。

「なら、急げ。そろそろ出ないと間に合わない。」

そう言って椎奈は立ち上がった。食べ終わったらしく、自分の部屋へと去って行った。

私達も大急ぎで残りの食事を食べて、訓練の準備へ向かった。

異変（後書き）

椎奈は大真面目です。まったく……
こんなところに居合わせるのは、いやですよね。

予定（前書き）

前半が詩織里視点、後半が椎奈視点です。

予定

「午前の訓練はこれで終了する。解散！」

アーロンさんの言葉が闘技場に反響して、騎士さん達の張りつめた空気がふっと緩んだ。

この2ヶ月見続けた光景。私もほっと息を吐き出しながら、私が使う事になった苗刀と同じ形の木刀をしまった。

この木刀は、本物と同じ重さになっている。実戦になっても重さや形の違いに戸惑う事は無い、とアーロンさんが訓練2日目に手渡してくれた。その出来映えに、椎奈もちょっと感心した顔をしていた。

「詩緒里、戻ろっか。」

声を掛けて来た里菜に頷き、既に部屋から出ていた椎奈を小走りで追いかけた。

部屋を出て、廊下を曲がった先で、椎奈の声が聞こえた。誰かと話をしている。

「闘技大会？」

「はい、この城にいる騎士、神官が互いに普段の練習の成果をぶつけ合い、順位を付けます。結果次第で昇格、降格に繋がる為、それぞれが作戦を練り、全力で大会に臨みます。」

角からそつと顔を出す。椎奈が話をしている相手は、メイド姿の女性だった。サーシャさん、ではない。

「王も見学するのか？」

「はい、この城の者全てが大会を見学します。陛下は、皆様にも是非ご覧いただきたいとお考えのようですね。」

メイドさんの言葉に、椎奈の目つきが鋭くなった。

「ナトリー。この話、何時決まった？」

「：大会は1年に1度行われます。陛下のご都合の良い時期、という事で、毎年日時は異なります。今年の日程は――」

その時、メイドさんが私達に気付いて、言葉を止めた。丁寧に頭を下げて来た。

「コウダ様、カンド様、訓練お疲れ様でございます。昼食の準備はできておりますので、サーシャが間もなく部屋にお届けになるかと思えます。」

「あ、ありがとうございます。：ねえ椎奈、この人は？」

里菜の質問に、椎奈が簡潔に答えた。

「この城の使用人の1人だ。」

「イライザⅡナトリーと申します。どうぞお見知りおきを。」

赤毛に翠の瞳のイライザさんに、頭を下げる。

「古宇田、神門、戻るぞ。」

「：話は良いの？」

私の問い掛けに首肯を返して、椎奈が歩き出した。イライザさんに聞きたい事はいくつかあったけれど、とりあえず椎奈についていく。

「ねえ椎奈、闘技大会って？」

「今聞いていたのだろう。神官や騎士が実力を見せ合う場だ。私達を招待する気らしいな。」

里菜の問いかけに対する椎奈の答えを聞いて、図らずも話を立ち聞きする形になっていた事に、少し気まずさを覚えた。

「何でイライザさん、話を途中で止めたんだろ？」

里菜がさりげなく聞くと、椎奈は表情を変えない。

「2人に気付いたからだろう。使用人が立ち話をする所を、勇者として召還されたものに見られるというのは、誉められた話ではないからな。」

―椎奈もそうじゃないのかな。

心の中で呟く。口に出さなかったのは、それ以外の理由があるように思えたから。けれど、椎奈は口を閉じ、足を速めている。何でそんなに急いでいるのかは分からないけれど、それ以上の会話は望めそうにない。

歩くのが速い椎奈に置いていかれないように、私と里菜は小走りでついていった。

部屋に戻ったとき、サーシャはまだ昼食を届けには来ていなかった。

汗を流した後、1度共同の部屋へと顔を出す。昼食を待つ古宇田達と目が合った。

「あれ？椎奈、食べるの？」

意外そうな声の古宇田に首を振る。

ドアへと歩み寄り、開ける。サーシャがそこに立っていた。

「…御昼食の用意に参りましたが…、シイナ様、召し上がるのですか？」

「要らない。今日は古宇田と神門だけだ。」

「…畏まりました。」

サーシャの表情に変化は無い。一瞬だけその目を覗き込んだ後、道を空けた。

「失礼致します。」

サーシャが準備する。旭の食事を不要とした事に疑問を抱かないのは、旭は疲労が溜まっているから部屋で休んでいるとヘラーに告げた言葉を、どこから耳にした、という事だろう。

「準備が終わりました。いつも通り、お食事を終えられましたら、お呼び下さい。」

そう言って、サーシャが出て行った。気配が完全に遠ざかるのを確認してから、古宇田達に声を掛けた。

「古宇田、神門。今日の魔術の訓練は休みにする。流石に、私1人では見きれないからな。その分、少し片付けたい事があるから、ついて来てもらう事になると思う。普段訓練を開始する時間に、ここで待っていてくれ。」

「…分かった。」

戸惑いながらも、どこか嬉しそうな顔で2人が頷いた。2人も少し疲労が溜まっているようだ。

―生憎、午後の用事は気の休まるものではない。おそらく2人にとっては、この2ヶ月で最も辛いものだろう。

2人が食事をとり始めるのを横目に見つつ、私は旭の部屋へと向かう廊下へと足を向けた。

予定（後書き）

椎奈が何か企んでいるようですね。どうなるのでしょうか…
次回から、少しシリアスはいります。

罪と選択と（前書き）

お久しぶりですね。

：最近、進みませんが……

気長に応援していただけると幸いです。

罪と選択と

人が近付く気配を感じて目を開けると、椎奈が寝台の傍らに立っていた。

「すまない、起こしてしまったようだな。」

「いや。」

椎奈の謝罪を否定する。事実、先程から目は覚めていた。

椎奈が手を伸ばして来た。冷たい手が額に触れる。

「…やはり、熱が上がっているようだな。」

椎奈が呟く。倦怠感が増しているのには気付いていたので、意外には思わない。

不意に、穏やかな風が寝台の周りを駆け抜けた。一瞬俺に纏わり付いたそれは、直ぐに収まる。

椎奈の瞳に不穏な光が宿ったのを見て、口を開く。

「椎奈。まだ全てが分かった訳ではない。性急な行動は控えろ。」

「―それは出来ない。」

椎奈の口調には、静けさと荒々しさが同居していた。

「私は術師として、方術を修めている。陰陽の術を修めているものには、1つのルールがある。」

その話は、以前に聞いていた。神にも妖にも触れる事の出来る陰陽師は、清濁併せ持つが故に、1つ冷酷なルールを持つ。

「椎奈は、巫女なのだろう。」

「巫女である以前に、師匠から古の術を学んだ、術師だ。これだけは譲れない。」

迷いの無い言葉に、内心もどかしく感じた。

―椎奈にこの道を選ばせているのは、俺の力不足のせいだ。

「旭、すまない。」

それでも、椎奈は。

「椎奈が謝る事ではない。―大丈夫だ。」

「…何が大丈夫、だ。1つでも間違えれば、打つ手が無くなる。…私のせいだ。」

独りでその責を負う気にいる。

―今から、俺の為に犯そうとしている罪さえも、抱え込む気にいる。

「言っただろう。約束は守る、俺も罪を背負う、と。お前は俺の為に、その道を選んでいる。選ばせているのは俺だ。―選んだのも、俺だ。」

曖昧な言葉だが、椎奈には十分に通じた。

椎奈が俯く。長い黒髪が、椎奈の表情を隠す。

「―古宇田達にも、現実を見せる。午後、この部屋は旭1人となる。結界は張るが：気をつけて。」

僅かに語尾が揺れたのを聞き、手を伸ばして椎奈の腕に触れた。

「ああ。―椎奈こそ、気をつけろ。」

椎奈の肩が僅かに揺れる。俺の言葉に対する反応は、それだけだった。

椎奈が立ち上がる。顔を上げ、ドアへと視線を映した椎奈の顔には、強い意志が見て取れた。

「夕食までに、片をつける。―もう少し、辛抱していてくれ。」
「分かった。」

それ以上の会話は、俺達の間には不要だった。

椎奈は一度も振り返らずに、部屋を出て行った。

目を閉じ、祈る。

―無事でいてくれ。これ以上、傷を負うな。

罪と選択と（後書き）

そして短い……
本当にすみません。

秘められた心情

旭先輩のお見舞いを終えた椎奈は、ずっと私達の側に居た。無言のままの椎奈は、どうにもぴりぴりしている。目を閉じたまま何かに集中している様子で、声がかけられない。

サーシャさんがお昼の片付けをしてくれて、いつもの訓練の間になるまで、居心地の悪い思いをした。

訓練の間になったとき、椎奈が目を開け、やおら立ち上がった。「行くか。」

静かな口調で呟き、部屋から歩み去る。声を掛けられないまま、私達についていった。

椎名の迷いのない歩調からみるに、どこかへ向かっているようだ。いつもの魔術の練習場、ではない。

「：あのさ、椎奈。どこに行くの？」

「付いて来れば分かる。」

思い切って尋ねた答えは、凄く素っ気ないものだった。めげずに、ずっと気になっていた事を尋ねる。

「旭先輩の様子、どうだった？」

「熱が上がっていた。普段通りに振る舞っていたが、かなり辛いだろうな、あれは。」

淡々と事実を告げるように答える椎奈に、ちよつといらつとした。

どうしてそんなに平気なんだろう。旭先輩は、椎奈の彼氏だ。もっと心配したり、気に掛けたりするものだろう。いくら椎奈が他人との関わりを避けているとはいえ、こうまで薄情だとは思わなかった。

「…ねえ、椎奈は平気なの？旭先輩の事、心配してないの？」

私以上に思う所があるのだろう、詩緒里が随分強い口調で尋ねた。

「何を言っている、神門？」

あくまでも平静を保った椎奈の口調に、何となくその顔を見て、思わず息を詰めた。

椎奈の瞳は、冴え冴えとした光を放っていた。その光は、どこまでも冷たく、どこまでも鋭い。

「旭に害が及んで、私が平気な訳が無いだろう？」

椎奈の言葉は、静かな表情の裏に、凄まじい怒りの炎が燃え上がっているのを悟らせた。

「―いるのだろう。出て来い。」

不意に椎奈が、視線を向けずに背後に声を掛けた。振り返ると、サーシャさんが立っていた。

「お気づきでしたか。」

「当然だ。ついて来い、貴様に用がある。」

椎奈はそう言って、足を速めた。椎奈の気迫に立ちすくんでいた私達は、慌てて追いかけた。

秘められた心情（後書き）

切りが悪いので、ここで切らせてもらいました。短くてすみません
：

暴かれた事実（前書き）

前回と今回、合わせて一話分くらいですね……

暴かれた事実

私たちがたどり着いたのは、2ヶ月前、儀式の後、椎奈と話をした、神官さんたちの練習場だった。

椎奈が結印する。結界が部屋を覆ったのが分かった。

椎名がサーシャさんと向き合う。その目は、相変わらず冷たく燃え上がっている。

「―サーシャ。貴様は、私たちが王と交わした約束について、全て知っている筈だな。」

淡々と、でもいつもよりずっと低い声で椎名がサーシャさんに問いかける。問いかけは、ほぼ確認のようなものだった。

「：はい。」

サーシャさんが戸惑い気味の顔で頷く。

「ならば、私が王に呪いをかけたのも知っているな。古宇田や神門、旭に害を及ぼした場合、王の最も大切な者の命を奪う、と。」

「：存じ上げております。」

やや顔をこわばらせるサーシャさん。我慢できずに、口を挟んだ。

「ちょっと椎奈、どうしたの？サーシャさん、困ってるよ。」

椎奈は、私の言葉を黙殺して続けた。

「―ならば、サーシャ。貴様は、王の大切な者の命を、奪おうとし

ているのか？」

「な……！」

大きく目を見開くサーシャさん。私も私で、唐突なその言葉に、ただただ目を見張る事しかできなかった。

「言っておくが、私は王だけに限定したつもりは無い。王の名によって、王の部下の手で旭や古宇田、神門に害が及べば、迷わず呪いを発動する。今私が何もしていない理由は、これが王の命令とは思えないから、それだけだ。

もう一度聞く。貴様は、今取っている行動の意味を、本当に理解しているのか？」

椎奈の言っている事が理解できなくて、詩緒里と困惑顔を見合わせる。サーシャさんも理解できないのは同じなようで、びくつき、困りきった顔で口を開いた。

「…あの、シイナ様。私がとっている行動、とは、先程気配を消しておそばに控えていた事でしょうか？詮索しているようでしたが、私はただ、皆様のお役に立とうと——」

「下らない猿芝居に付き合っている暇はない。貴様が旭に掛けた呪いの刻限は、今日が終わるまで。私がそれを、指をくわえてみる訳が無いだろう。」

言葉と共に、凄まじい風が吹き荒れた。風の正体は―椎奈の霊力。

「呪い…？」

詩緒里が呆然と呟く。椎奈が頷いた。

「旭のあれは、疲労による熱などではない。巧妙に仕掛けられた、呪いだ。昨日の剣術の訓練辺りから様子がおかしかったから、その前の日に呪いを掛けていた、という事だな。気付けなかった私も愚か者だが、ここまで来てはれないと高をくくっている貴様は、相当な戯けだな。」

椎奈の言葉には、押さえ込まれた激しい怒りが感じられて、私は凍り付いた。

「…でも、何時呪いを掛ける機会があったの？ 椎奈の目の前でやられたら、気付くでしょう？」

「昼食だ。私は席を外しているからな。旭が気付けなかったのは—それこそ、疲労だろうな。」

詩緒里の問い掛けに、椎奈が即答する。その黒曜石の瞳は、サーシャさんから目を逸らさない。

「この世界に來たその日に、私は貴様に警告した。情けをかけると思うな、こちらの害となる場合はすぐに貴様を抹消すると。私が虚偽威しなど、するはずが無いだろう。」

抹消。その言葉には、どこまでも冷酷な響きがあった。

「ちょっと…ちょっと待ってよ、椎奈。旭先輩に呪いをかけているのは、本当にサーシャさんなの？ 証拠も無いのに、そんな…」

椎奈の氣迫に氣圧されながらも一生懸命反論するも、椎奈はあつ

さりとそれを切り捨てた。

「先ほど旭の見舞いに行ったときに確認した。旭の身にまわりついていた呪いから、こいつの妖気を感じた。この妖？？この世界では魔物と呼ぶのだったな？？この魔物が旭の命を奪おうとしている事に、疑いの余地は無い。」

？？？？？魔物？

暴かれた事実（後書き）

次回は長めです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0315w/>

災いをもたらす、その先には

2011年11月14日05時21分発行